

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第179集

I S O D A
井相田 C 遺跡
II

1988

福岡市教育委員会

井相田C遺跡II（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第179集）正誤表

頁	行	誤	正
図版目次	上から6行目	(3) SK14・16・18	(3) SK14・18, SG16
別冊挿図目次	下から3行目	Fig 57 柿経頭部形態分類	Fig 57 柿経頭部形態分類図
別冊図版目次	図版74(1)	(1) 法華經法師功德品第十八 法華經隨喜功德品第十九	(1) 法華經隨喜功德品第十八 法華經法師功德品第十九
*	図版74(2)		
*	図版99(2)	(2) 法華經妙莊嚴王本事品二十七	(2) 法華經妙莊嚴王本事品第二十
別冊表目次	上から一行目	第3表 柿経の巻束別書写一覧	第3表 SG16出土柿経の巻束別書写一覧
5	下から8行目	中世の水田が主体を成す	中世の水田とが主体を成す
*	下から4行目	述べるものである。	述べるものである。
6	上から5行目	井相田遺跡とは、近距離にある	井相田遺跡とは近距離にある
8	下から8行目	牛跡を残す。	牛の足跡を残す。
9	上から4行目	一溝・河川S E一戸戸	一溝・河川、S E一戸戸
12	上から9行目	10.72cm~10.75cm	10.72cm~10.75m
*	上から14行目	溝底は凸凹があり	溝底は凸凹があり
*	下から11行目	いたものとおわれる。	いたものと思われる。
15	上から4行目	中央部は、一段深くなる。	中央部は一段深くなる。
17	上から6行目	7m~10m	7cm~10cm
19	下から12行目	8本~9本で数える。	8本~9本を数える。
23	下から6行目	口縁部は外外面とも	口縁部は内外面とも
25	上から3行目	針である。	鉢である。
*	下から14行目	同心円文が残り	同心円文が残り
31	下から2行目	庭径	庭径
36	上から1行目	最大副	最大巾
42	上から1行目	高は、	た標高は、
*	下から6行目	本釘もしくは釘穴	木釘もしくは金釘穴
*	下から1行目	下駄制作時	下駄製作時
45	Fig 50+チャート	黒褐色土層出土石器実測図	黒褐色土層出土石器実測図
47	註11	註4に同じ	註10に同じ
48	上から9行目	存在している。可能性	存在している可能性
49	上から3行目	当調査に所在する	当調査地に所在する
50	上から8行目	室町後期における	室町時代後期における
51	上から8行目	卒塔婆が折れた	卒塔婆が折れた
*	上から23行目	奉廬した寺	奉納した寺
53	上から10行目	1978年 1978年	1978年
*	下から16行目	太宰府史跡	太宰府史跡
*	下から15行目	太宰府史跡	太宰府史跡
63	遺物番号 001	黒褐色土層	黒褐色土層
*	遺物番号036	039 16 小石丸	039 51 16 小石丸
*	遺物番号039		

誤

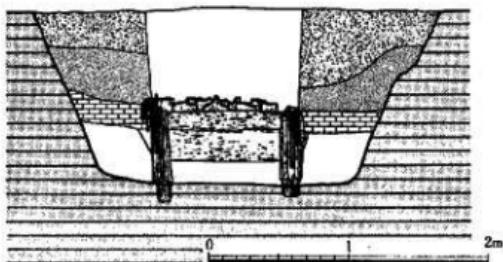
 $L = 11.3m$ 

Fig. 18 SE02実測図 (縮尺1/40)

正

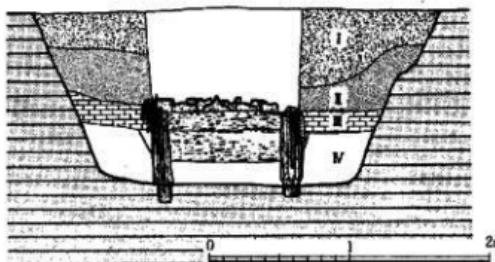
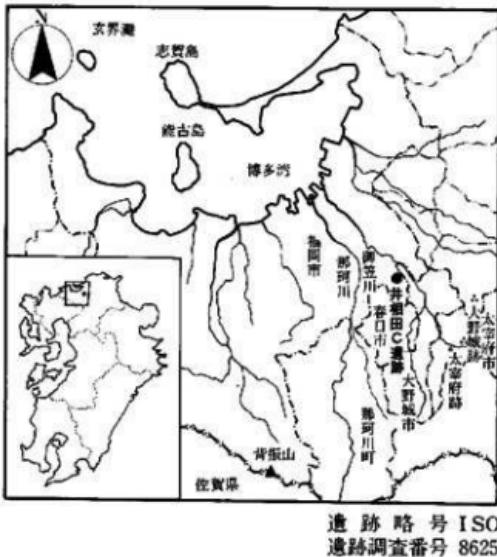
 $L = 11.3m$ 

Fig. 18 SE02実測図 (縮尺1/40)

井相田 C 遺跡

II



昭和 63 年 3 月

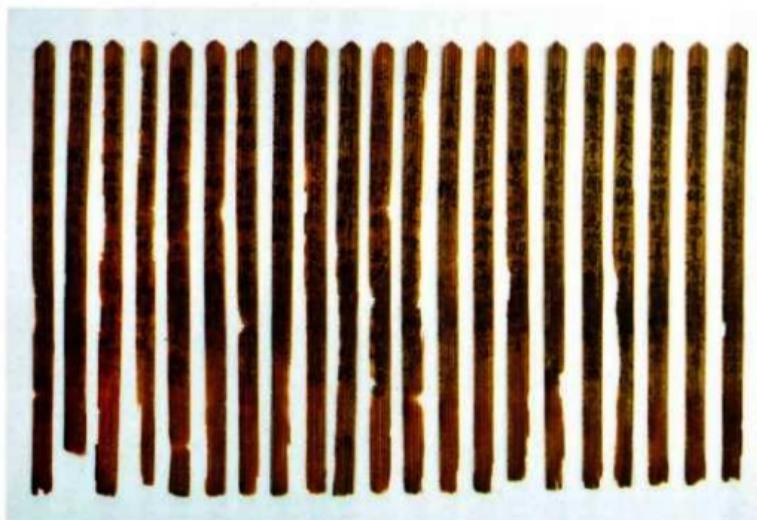
福岡市教育委員会



(1) SG 16柿経出土状況



(2) SG 16柿経出土状況



(1) 法華經卷第三之六（表面）— 授記品第六—



(2) 法華經卷第三之六（裏面）— 授記品第六・化城喻品第七—

序 文

福岡は、その地理的条件から先史時代より大陸文化享受の地として、発展をとげてきました。そのため福岡市地域内には各時代の文化財が豊富に埋蔵されております。これらの文化財は、日本の歴史、文化を正しく理解する上で欠くことのできないものであるとともに、国民的財産として保護活用し、後世へ継承すべきものと考えます。そのため福岡市では、各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書もそうした遺跡の一つで、過大規模校解消のために新設する中学校建設に先だって発掘調査を実施した井相H.C.遺跡第2次調査の報告書です。

調査の結果、遺跡からは古代から中世における人々の生活を知る上で貴重な資料が数多く出土しました。特に、中世における民間信仰を知る上で貴重な柿経を中心とする仏教資料が出土いたしました。今後、これらの資料が学術研究ならびに文化財に対する認識を深めることに寄与することを深く願うものです。

最後に、発掘調査及び報告書作成におきましては、関係各位の皆様から御協力いただきましたことに深く感謝いたします。

昭和63年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は、福岡市博多区井相田2丁目における福岡市立板付中学校建設工事の事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が昭和61年7月1日から昭和62年1月24日にかけて行なった井相田C遺跡の第2次発掘調査の報告書である。
2. 本報告書は、本冊と別冊の2冊からなる。
3. 本遺跡の名称は、福岡市文化財分布地図一東部Ⅰ一からによる。遺跡調査番号は8625
遺跡略号はISOである。
4. 発掘調査は埋蔵文化財第1係横山邦繼、瀧本正志が担当した。
5. 本書では下記に示すように遺構を記号化し、通し番号を附した。
S B……掘立柱建物　S C……竪穴住居　S D……溝・河川　S E……井戸　S G……池
S K……土壙墓・土塚　S P……柱穴　S X……水田
6. 本書の執筆は瀧本が行ない、中橋孝博、永井昌文（九州大学）、水野正好（奈良大学）各氏には各専門分野からの報告を受け掲載した。
7. 掘団のうち遺構の実測は、横山、瀧本、高橋達治（別府大学生）が行い、遺物の実測は瀧本が行なった。整図は瀧本が行なった。
8. 遺構の写真撮影は横山、瀧本が行ない、遺物撮影は、谷明子、吉田扶希子、小松原澄江の協力を得て瀧本が行なった。
9. 本書における木簡、墨書き札類の計測、記述は瀧本、吉田が行なった。
10. 本書作成にあたっては、藤沢典彦（元興寺文化財研究所）、光谷拓実、加藤 優（奈良国立文化財研究所）、八尋和泉、倉住靖彦（九州歴史資料館）、池崎謙二（福岡市博物館建設準備室）各氏の御致示を得た。
11. 本書の編集は横山と協議して瀧本が行なった。本報告書の文責は瀧本にある。
12. 本報告書に係わる遺物、記録類（図面・写真）は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2丁目）で保管、公開されているので活用されたい。

遺跡名	いそだ 井相田C遺跡		
遺跡略号	I S O	調査番号	8625
調査地	福岡市博多区井相田2丁目		
調査期間	昭和61年7月1日～昭和62年1月24日		
調査対象面積	22,000m ²	調査面積	11,000m ²

本文目次

頁

第一章	はじめに	1
1	発掘調査にいたる経過	1
2	発掘調査の組織	1
3	発掘調査の経過	2
第二章	遺跡の位置と歴史的環境	5
1	遺跡の位置と立地	5
2	遺跡の歴史的環境	5
3	地質	6
第三章	発掘調査の記録	8
1	遺跡の概観	8
2	土 層	8
3	遺 構	9
a	奈良時代～平安時代の遺構	9
b	鎌倉時代の遺構	17
c	室町時代の遺構	17
4	遺 物	19
a	土器・陶磁器	19
b	瓦・埴	34
c	木簡・墨書き木札	35
d	木器	42
e	その他の遺物	45
第四章	まとめ	48

附 編

福岡市井相田C遺跡出土の中世人骨	中橋孝博・永井昌文	54
中世葬祭供養品の廃棄空間	水野正好	57

挿 図 目 次

頁

Fig. 1 調査区位置図（縮尺1/200,000）	
Fig. 2 調査区剖面図	2
Fig. 3 体験考古学実習風景	3
Fig. 4 体験考古学実習風景	3
Fig. 5 SG 16発掘調査風景	3
Fig. 6 水田発掘調査風景	3
Fig. 7 調査地周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）	4
Fig. 8 第1次調査区全景（北から）	5
Fig. 9 調査地周辺地形図（縮尺1/5,000）	7
Fig. 10 造構と土層の関係略図	8
Fig. 11 造構配置図（縮尺1/500）	折り込み
Fig. 12 SB 15実測図（縮尺1/100）	9
Fig. 13 SB 30実測図（縮尺1/100）	9
Fig. 14 SC 03実測図（縮尺1/50）	10
Fig. 15 SC 04実測図（縮尺1/50）	10
Fig. 16 SC 05実測図（縮尺1/50）	11
Fig. 17 SC 31実測図（縮尺1/50）	11
Fig. 18 SE 02実測図（縮尺1/40）	13
Fig. 19 SE 02井戸隅柱実測図（縮尺1/8）	14
Fig. 20 SE 35実測図（縮尺1/40）	15
Fig. 21 SK 01実測図（縮尺1/40）	16
Fig. 22 SK 08実測図（縮尺1/40）	16
Fig. 23 SK 11実測図（縮尺1/40）	16
Fig. 24 SK 12実測図（縮尺1/40）	16
Fig. 25 SG 16実測図・遺物出土地点図（縮尺1/150）	折り込み
Fig. 26 SK 06実測図（縮尺1/40）	17
Fig. 27 SX 95・98実測図（縮尺1/400）	18
Fig. 28 黒褐色土層出土土器実測図（縮尺1/3）	20
Fig. 29 黒褐色土層出土土器実測図（縮尺1/4）	21
Fig. 30 SC 03・04・05・31出土土器実測図（縮尺1/3, 1/4）	22

Fig.31	S D13出土土器実測図（縮尺1/3）	23
Fig.32	S D38出土土器実測図（縮尺1/3, 1/4）	24
Fig.33	S E02出土土器実測図（縮尺1/3）	26
Fig.34	S E02出土土器実測図（縮尺1/3, 1/4）	27
Fig.35	S E02出土土器実測図（縮尺1/3）	27
Fig.36	S E02出土墨書き土器実測図（縮尺1/3）	28
Fig.37	S K12出土土器実測図（縮尺1/3, 1/4）	29
Fig.38	柱穴出土土器実測図（縮尺1/3）	30
Fig.39	S K06出土磁器実測図（縮尺1/3）	31
Fig.40	S D93出土遺物実測図（縮尺1/3, 1/4）	31
Fig.41	S G16出土土器実測図（縮尺1/3）	32
Fig.42	S G16出土土器・磁器実測図（縮尺1/3, 1/4）	33
Fig.43	S E02出土木簡実測図（縮尺1/2）	折り込み
Fig.44	S G16出土卒塔婆実測図（縮尺1/5, 1/6）	37
Fig.45	S G16出土卒塔婆実測図（縮尺1/5）	38
Fig.46	S G16出土卒塔婆実測図（縮尺1/5）	39
Fig.47	S G16出土卒塔婆実測図（縮尺1/5）	40
Fig.48	S G16出土木製品実測図（縮尺1/3, 1/6）	43
Fig.49	S G16出土木製品実測図（縮尺1/3, 1/4）	44
Fig.50	黒褐色土層出土石器実測図（縮尺2/3, 1/2）	45
Fig.51	S C03出土丸石実測図（縮尺1/1）	46
Fig.52	S C04出土丸石実測図（縮尺1/1）	46
Fig.53	S K18出土石器実測図（縮尺2/3）	46
Fig.54	S D93出土銅鏡拓影（縮尺1/1）	47
Fig.55	S G16出土頭骸骨復原図	55
Fig.56	元興寺極楽坊葬祭資料包藏抗（財団法人 元興寺文化財研究所提供）	57

図版目次

- 卷頭図版 1 (1) S G16柿経出土状況 (2) S G16柿経出土状況
卷頭図版 2 (1) 柿経 法華経巻第三之六(表面) —— 授記品第六 ——
 (2) 柿経 法華経巻第三之六(裏面) 授記品第六・化城論品第七 ——
図版 1 (1) 調査地周辺航空写真(昭和23年)
図版 2 (1) I区調査区全景(北から) (2) I区調査区全景(東から)
図版 3 (1) I区調査区全景(東から) (2) I区調査区南半部(東から)
図版 4 (1) II区調査区全景(東から) (2) II区調査区全景(西から)
図版 5 (1) S B15, S C04(東から) (2) S B30(北から)
図版 6 (1) S C04(北から) (2) S C04遺物出土状況
 (3) S C05(北から) (4) S C31(北から)
図版 7 (1) S E02検出状況(北から) (2) S E02土層断面(東から)
 (3) S E02(北から) (4) S E02井戸隅柱(北から)
図版 8 (1) S E35(南から) (2) S K01(北から)
 (3) S K08(北から) (4) S K12(北から)
図版 9 (1) S K06(北から) (2) S D94(南から)
 (3) S K14・16・18(北から) (4) S D93(東から)
図版 10 (1) S G16全景(南から) (2) S G16全景(北から)
図版 11 (1) S X95上層水田(南から) (2) S X95上層水田(北から)
 (3) S X95上層水田畦畔(東から) (4) S X95上層水田畦畔(南から)
図版 12 (1) S G16卒塔婆出土状況 (2) S G16卒塔婆出土状況
 (3) S G16卒塔婆出土状況 (4) S G16卒塔婆出土状況
図版 13 (1) S G16柿経出土状況 (2) S G16柿経出土状況
図版 14 (1) S G16木製挽出土状況 (2) S G16曲物タガ出土状況
 (3) S G16人骨出土状況 (4) S G16馬頸骨出土状況
図版 15 (1) 黒褐色上層出土遺物
図版 16 (1) S C03・04・31出土遺物
図版 17 (1) S D13・38, S E02出土遺物
図版 18 S E02出土遺物
図版 19 S E02出土木筒
図版 20 S E02井戸棒隅柱
図版 21 S E02井戸棒横板材

図 版	22	S E02井戸枠縫板材
図 版	23	S K06・12・18, S P68・94・116・129出土遺物
図 版	24	S G16出土遺物
図 版	25	S G16, S D93出土遺物
図 版	26	S G16出土卒塔婆
図 版	27	S G16出土卒塔婆
図 版	28	S G16出土卒塔婆
図 版	29	S G16出土椀、曲物底板
図 版	30	(1) S G16出土曲物側板 (2) S G16出土木製容器
図 版	31	S G16出土下駄、陽形木製品、木製加工棒
口 絵		(1) 第2次調査後、板付中学校に設置された遺跡説明板 (2) 井相田C遺跡第2次発掘調査参加者

表 目 次

第1表 掘載出土遺物一覧表.....	63
第2表 掘載出土遺物一覧表.....	64

付 図

第1図 井相田C遺跡第2次調査構造配置図(縮尺1/400)	付録
-------------------------------------	----

附 別冊目次

別冊本文目次

第一章 枝経・笹塔婆.....	65
1 枝 経.....	65
2 笹 塔 婆.....	83
3 小 結.....	84

別冊挿図目次

Fig.57 枝経頭部形態分類.....	65
Fig.58 S G16出土枝経実測図(縮尺1/2)	66
Fig.59 S G16出土笹塔婆実測図(縮尺1/2)	83

別冊図版目次

図版 32	(1) 柿絵作製風景 (稚兒觀音縁起より)	
図版 33	(1) 法華經信解品第四	卷第二之十二 (表面)
	(2) 法華經信解品第四	卷第二之十二 (裏面)
図版 34	(1) 法華經信解品第四	卷第二之十三 (表面)
	(2) 法華經信解品第四	卷第二之十三 (裏面)
図版 35	(1) 法華經信解品第四	卷第二之十四 (表面)
	(2) 法華經信解品第四	卷第二之十四 (裏面)
図版 36	(1) 法華經信解品第四	卷第二之十五 (表面)
	(2) 法華經信解品第四	卷第二之十五 (裏面)
図版 37	(1) 法華經信解品第四	卷第二之十六 (表面)
	(2) (末記入)	卷第二之十六 (裏面)
図版 38	(1) 法華経薬草喻品第五	卷第三之一 (表面)
	(2) 法華経薬草喻品第五	卷第三之一 (裏面)
図版 39	(1) 法華経薬草喻品第五	卷第三之二 (表面)
	(2) 法華経薬草喻品第五	卷第三之二 (裏面)
図版 40	(1) 法華経薬草喻品第五	卷第三之三 (表面)
	(2) 法華経薬草喻品第五 法華經授記品第六	卷第三之三 (裏面)
図版 41	(1) 法華經授記品第六	卷第三之四 (表面)
	(2) 法華經授記品第六	卷第三之四 (裏面)
図版 42	(1) 法華經授記品第六	卷第三之五 (表面)
	(2) 法華經授記品第六	卷第三之五 (裏面)
図版 43	(1) 法華經授記品第六	卷第三之六 (表面)
	(2) 法華經授記品第六 法華経化城喻品第七	卷第三之六 (裏面)
図版 44	(1) 法華経化城喻品第七	卷第三之七 (表面)
	(2) 法華経化城喻品第七	卷第三之七 (裏面)
図版 45	(1) 法華経化城喻品第七	卷第三之八 (表面)
	(2) 法華経化城喻品第七	卷第三之八 (裏面)
図版 46	(1) 法華経化城喻品第七	卷第三之九 (表面)
	(2) 法華経化城喻品第七	卷第三之九 (裏面)

図版 47	(1) 法華經化城喻品第七 (2) 法華經化城喻品第七	卷第三之十 (表面) 卷第三之十 (裏面)
図版 48	(1) 法華經化城喻品第七 (2) 法華經化城喻品第七	卷第三之十一 (表面) 卷第三之十一 (裏面)
図版 49	(1) 法華經化城喻品第七 (2) 法華經化城喻品第七	卷第三之十二 (表面) 卷第三之十二 (裏面)
図版 50	(1) 法華經化城喻品第七 (2) 法華經化城喻品第七	卷第三之十三 (表面) 卷第三之十三 (裏面)
図版 51	(1) 法華經化城喻品第七 (2) 法華經化城喻品第七	卷第三之十四 (表面) 卷第三之十四 (裏面)
図版 52	(1) 法華經化城喻品第七 (2) (未記入)	卷第三之十五 (表面) 卷第三之十五 (裏面)
図版 53	(1) 法華經五百弟子受記品第八 (2) 法華經五百弟子受記品第八	卷第四之三 (表面) 卷第四之三 (裏面)
図版 54	(1) 法華經法師品第十 (2) 法華經法師品第十	卷第四之七 (表面) 卷第四之七 (裏面)
図版 55	(1) 法華經勸持品第十三 (2) 法華經勸持品第十三	卷第五之四 (表面) 卷第五之四 (裏面)
図版 56	(1) 法華經勸持品第十三 法華經安樂行品第十四 (2) 法華經安樂行品第十四	卷第五之五 (表面) 卷第五之五 (裏面)
図版 57	(1) 法華經安樂行品第十四 (2) 法華經安樂行品第十四	卷第五之六 (表面) 卷第五之六 (裏面)
図版 58	(1) 法華經安樂行品第十四 (2) 法華經安樂行品第十四	卷第五之七 (表面) 卷第五之七 (裏面)
図版 59	(1) 法華經安樂行品第十四 (2) 法華經安樂行品第十四	卷第五之八 (表面) 卷第五之八 (裏面)
図版 60	(1) 法華經安樂行品第十四 (2) 法華經安樂行品第十四	卷第五之九 (表面) 卷第五之九 (裏面)
図版 61	(1) 法華經安樂行品第十四 法華經從地涌出品第十五 (2) 法華經從地涌出品第十五	卷第五之十 (表面) 卷第五之十 (裏面)

図版 62	(1) 法華經從地涌出品第十五 (2) 法華經從地涌出品第十五	卷第五之十一 (表面) 卷第五之十一 (裏面)
図版 63	(1) 法華經從地涌出品第十五 (2) 法華經從地涌出品第十五	卷第五之十二 (表面) 卷第五之十二 (裏面)
図版 64	(1) 法華經從地涌出品第十五 (2) 法華經從地涌出品第十五	卷第五之十三 (表面) 卷第五之十三 (裏面)
図版 65	(1) 法華經從地涌出品第十五 (2) (未記入)	卷第五之十四 (表面) 卷第五之十四 (裏面)
図版 66	(1) 法華經如來壽量品第十六 (2) 法華經如來壽量品第十六	卷第六之一 (表面) 卷第六之一 (裏面)
図版 67	(1) 法華經如來壽量品第十六 (2) 法華經如來壽量品第十六	卷第六之二 (表面) 卷第六之二 (裏面)
図版 68	(1) 法華經如來壽量品第十六 (2) 法華經如來壽量品第十六 法華經分別功德品第十七	卷第六之三 (表面) 卷第六之三 (裏面)
図版 69	(1) 法華經分別功德品第十七 (2) 法華經分別功德品第十七	卷第六之四 (表面) 卷第六之四 (裏面)
図版 70	(1) 法華經分別功德品第十七 (2) 法華經分別功德品第十七	卷第六之五 (表面) 卷第六之五 (裏面)
図版 71	(1) 法華經分別功德品第十七 (2) 法華經分別功德品第十七	卷第六之六 (表面) 卷第六之六 (裏面)
図版 72	(1) 法華經分別功德品第十七 (2) 法華經分別功德品第十七 法華經隨喜功德品第十八	卷第六之七 (表面) 卷第六之七 (裏面)
図版 73	(1) 法華經隨喜功德品第十八 (2) 法華經隨喜功德品第十八	卷第六之八 (表面) 卷第六之八 (裏面)
図版 74	(1) 法華經法師功德品第十八 (2) 法華經隨喜功德品第十八 法華經隨喜功德品第十九	卷第六之九 (表面) 卷第六之九 (裏面)
図版 75	(1) 法華經法師功德品第十九 (2) 法華經法師功德品第十九	卷第六之十 (表面) 卷第六之十 (裏面)

図版 76	(1) 法華經法師功德品第十九 (2) 法華經法師功德品第十九	卷第六之十一 (表面) 卷第六之十一 (裏面)
図版 77	(1) 法華經法師功德品第十九 (2) 法華經法師功德品第十九	卷第六之十二 (表面) 卷第六之十二 (裏面)
図版 78	(1) 法華經法師功德品第十九 (2) (未記入)	卷第六之十三 (表面) 卷第六之十三 (裏面)
図版 79	(1) 法華經法師功德品第十九 (2) (未記入)	卷第六之十四 (表面) 卷第六之十四 (裏面)
図版 80	(1) 法華經常不輕菩薩品第二十 (2) 法華經常不輕菩薩品第二十	卷第七之一 (表面) 卷第七之一 (裏面)
図版 81	(1) 法華經常不輕菩薩品第二十 (2) 法華經常不輕菩薩品第二十	卷第七之二 (表面) 卷第七之二 (裏面)
図版 82	(1) 法華經常不輕菩薩品第二十 法華經如來神力品第二十一 (2) 法華經如來神力品第二十一	卷第七之三 (表面) 卷第七之三 (裏面)
図版 83	(1) 法華經如來神力品第二十一 (2) 法華經如來神力品第二十一	卷第七之四 (表面) 卷第七之四 (裏面)
図版 84	(1) 法華經嘵累品第二十二 (2) 法華經嘵累品第二十二 法華經藥王菩薩本事品第二十三	卷第七之五 (表面) 卷第七之五 (裏面)
図版 85	(1) 法華經藥王菩薩本事品第二十三 (2) 法華經藥王菩薩本事品第二十三	卷第七之六 (表面) 卷第七之六 (裏面)
図版 86	(1) 法華經藥王菩薩本事品第二十三 (2) 法華經藥王菩薩本事品第二十三	卷第七之七 (表面) 卷第七之七 (裏面)
図版 87	(1) 法華經藥王菩薩本事品第二十三 (2) 法華經藥王菩薩本事品第二十三	卷第七之八 (表面) 卷第七之八 (裏面)
図版 88	(1) 法華經藥王菩薩本事品第二十三 (2) 法華經藥王菩薩本事品第二十三	卷第七之九 (表面) 卷第七之九 (裏面)
図版 89	(1) 法華經妙音菩薩品第二十四 (2) 法華經妙音菩薩品第二十四	卷第七之十 (表面) 卷第七之十 (裏面)
図版 90	(1) 法華經妙音菩薩品第二十四 (2) 法華經妙音菩薩品第二十四	卷第七之十一 (表面) 卷第七之十一 (裏面)

図版 91	(1) 法華經妙音菩薩品第二十四 (2) (未記入)	卷第七之十二 (表面) 卷第七之十二 (裏面)
図版 92	(1) 法華經妙音菩薩品第二十四 (2) 法華經妙音菩薩品第二十四	卷第七之十三 (表面) 卷第七之十三 (裏面)
図版 93	(1) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五 (2) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五	卷第八之一 (表面) 卷第八之一 (裏面)
図版 94	(1) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五 (2) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五	卷第八之二 (表面) 卷第八之二 (裏面)
図版 95	(1) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五 (2) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五	卷第八之三 (表面) 卷第八之三 (裏面)
図版 96	(1) 法華經觀世音菩薩普門品第二十五 法華經陀羅尼品第二十六 (2) 法華經陀羅尼品第二十六	卷第八之四 (表面) 卷第八之四 (裏面)
図版 97	(1) 法華經陀羅尼品第二十六 (2) 法華經陀羅尼品第二十六	卷第八之五 (表面) 卷第八之五 (裏面)
図版 98	(1) 法華經陀羅尼品第二十六 法華經妙莊嚴王本事品第二十七 (2) 法華經妙莊嚴王本事品第二十七	卷第八之六 (表面) 卷第八之六 (裏面)
図版 99	(1) 法華經妙莊嚴王本事品第二十七 (2) 法華經妙莊嚴王本事品二十七	卷第八之七 (表面) 卷第八之七 (裏面)
図版 100	(1) 法華經妙莊嚴王本事品第二十七 法華經妙莊嚴王本事品第二十七 法華經普賢菩薩勸發品第二十八	卷第八之八 (表面) 卷第八之八 (裏面)
図版 101	(1) 法華經普賢菩薩勸發品第二十八 (2) 法華經普賢菩薩勸發品第二十八	卷第八之九 (表面) 卷第八之九 (裏面)
図版 102	(1) 法華經普賢菩薩勸發品第二十八 (2) 法華經普賢菩薩勸發品第二十八	卷第八之十 (表面) 卷第八之十 (裏面)
図版 103	(1) 法華經普賢菩薩勸發品第二十八 (2) 法華經普賢菩薩勸發品第二十八	卷第八之十一 (表面) 卷第八之十一 (裏面)
図版 104	笠塔婆	

別冊表目次

第3表 柿経の巻束別書写一覧	第25表 柿経觀察表（卷第4—10～12）
第4表 柿経觀察表（卷第1—1～3）	第26表 柿経觀察表（卷第4—12～5～3）
第5表 柿経觀察表（卷第1—3～5）	第27表 柿経觀察表（卷第5—3～5）
第6表 柿経觀察表（卷第1—6～8）	第28表 柿経觀察表（卷第5—5～8）
第7表 柿経觀察表（卷第1—8～10）	第29表 柿経觀察表（卷第5—8～10）
第8表 柿経觀察表（卷第1—11～13）	第30表 柿経觀察表（卷第5—10～13）
第9表 柿経觀察表（卷第1—13～2～2）	第31表 柿経觀察表（卷第5—13～6～1）
第10表 柿経觀察表（卷第2—2～5）	第32表 柿経觀察表（卷第6—1～4）
第11表 柿経觀察表（卷第2—5～7）	第33表 柿経觀察表（卷第6—4～7）
第12表 柿経觀察表（卷第2—7～10）	第34表 柿経觀察表（卷第6—7～9）
第13表 柿経觀察表（卷第2—10～12）	第35表 柿経觀察表（卷第6—9～12）
第14表 柿経觀察表（卷第2—12～15）	第36表 柿経觀察表（卷第6—12～15）
第15表 柿経觀察表（卷第2—15～3～2）	第37表 柿経觀察表（卷第6—15～7～2）
第16表 柿経觀察表（卷第3—2～4）	第38表 柿経觀察表（卷第7—2～5）
第17表 柿経觀察表（卷第3—4～7）	第39表 柿経觀察表（卷第7—5～7）
第18表 柿経觀察表（卷第3—7～9）	第40表 柿経觀察表（卷第7—7～10）
第19表 柿経觀察表（卷第3—9～12）	第41表 柿経觀察表（卷第7—10～12）
第20表 柿経觀察表（卷第3—12～14）	第42表 柿経觀察表（卷第7—12～8～2）
第21表 柿経觀察表（卷第3—14～4～3）	第43表 柿経觀察表（卷第8—2～4）
第22表 柿経觀察表（卷第4—3～5）	第44表 柿経觀察表（卷第8—4～7）
第23表 柿経觀察表（卷第4—5～8）	第45表 柿経觀察表（卷第8—7～9）
第24表 柿経觀察表（卷第4—8～10）	第46表 柿経觀察表（卷第8—9～11）

附編

井相田C遺跡出土柿経の復元

—出土柿経片等の経文同定—

法華経卷第一～卷第八



Fig.1 遺跡位置図 (縮尺1/200,000)

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

近年における福岡市は、著実に発展をとげ、九州の中核都市として描ぎない地歩を占めている。郊外の田園風景も昔語りとなりつつあり、特に幹線道路周辺における風景の変貌ぶりは発展の文字をまさしく実体化させ、人々に強く認識させるものである。しかし、この発展は人口の集中化に直結し、いくつかの問題を生じさせている。すなわち、人口増に伴う公共施設の不足や交通網の未整備等である。

市の東南部に位置する三筑地区においても開発による人口の増加は著しく、同様の問題が生じている。特に、近年は就学児童数の増大期と重なり、過大規模校の存在が大きな問題となっている。福岡市教育委員会では、この過大規模校を解消するため、三筑地区に中学校を新設することを決めた。このため昭和60年、用地計画課より埋蔵文化財課へ学校建設予定地の博多区井相山2丁目における埋蔵文化財の有無確認の照会がなされた。この照会が出された同時に埋蔵文化財課では、予定地に南接する地区の発掘調査(井相田C追跡第1次調査)を行なっており、42棟を数える奈良時代後半から平安時代初頭の掘立柱建物群の存在を確認していた。さらに、昭和60年10月5日から14日まで予定地において試掘調査を行なった結果、学校建設予定地の南半部までに1次調査で確認した遺構が広がっていることが判明した。

これらの成果を基に埋蔵文化財課は用地計画課と協議を行ない、昭和61年6月から6ヶ月の予定で発掘調査を実施することにした。また、調査対象地は、試掘調査等の成果から、予定地の南半部22,000m²とした。

2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市教育委員会施設部用地計画課

教育長 佐藤善郎

施設部長 今林秀夫 土地計画課長 中島正博

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

文化部長 川崎賢二 河野清一(前任) 埋蔵文化財課長 柳山純季

埋蔵文化財課第一係長 折尾 學

事務担当 松延好文

調査担当 横山邦雄 濱本正志

3. 発掘調査の経過

調査補助	高橋 健治	整理補助	吉田 扶希子
調査協力	赤堀英子 穴井輝子 荒木君子 石本みすえ 岩男澄子 石橋春美		
	牛島幸子 緒方アサノ 岡本好子 大近麻子 岡本正枝 小倉隆 太田林		
	川辺満子 金堂融子 梶原チヨノ 片山江和子 加藤泰子 川崎セツ子		
	梶原三治 岸 邦子 吉上久次 岸原藤雄 黒瀬千鶴 桑野正子		
	久保山二三子 栗田雅之 古賀博子 児嶋綾子 河野房子 小谷保子		
	佐藤利恵子 佐藤勝子 未石悦子 千徳まり子 関 浩司 関 功一		
	染原フミエ 高野皓代 高木冴子 高田茂 高田良夫 高橋健治 田中藤男		
	徳永ノブ子 舎川キチエ 戸張雅子 中牟田顯勲 中垣 親 中垣安隆		
	中島知子 中富和刀 中嶋まきえ 中嶋さなみ 永利咲江 西山秀子		
	西出幸子 西依由紀子 西本スミ 西岡敬訓 野口ミヨ 野口和代		
	野口英憲 野中辰雄 八田直幸 播磨博子 林田 弘 濱根 定 広田政子		
	広田能雄 藤嶋典子 福岡麗子 船越エミ子 星子正勝 松尾和浩		
	松浦ウメノ 宮田恵子 宮田フジノ 水間栄子 三浦 仁 村崎ゆう子		
	村上新制 森村寿子 森山きよ子 山口光生 山崎脩 山部増人 山口光代		
	柳川恵子 山部イキエ 安田逸朗 吉原京子 吉住作美 笠 真 渡辺満生		
資料整理	氏福美穂 小川一枝 大曲敏子 岸川ひろみ 小松原澄江 清水めぐみ		
	田中美香 谷 明子 箱田かよ子 松村由香理 光島暁子		

3. 発掘調査の経過

調査区は、第1次調査や試掘の成果を踏まえ、調査地の南半部に設定した。しかし、校舎や外周工事が併行して行なわれる為に、調査区全面を一度に調査することが不可能になった。そのために調査区をFig.2に示すように、東半部（Ⅰ区）と西半部（Ⅱ区）とに分けて調査を行なうこととした。7月1日からⅠ区の表土をバックフォーによって除去し、調査を始めた。Ⅰ区においては、1次調査で確認した遺構

がさらに北へ広がるという試掘調査の成果を裏付ける掘立柱建物、竪穴住居、井戸、溝、土壤を確認した。井戸からは、木筒、土器が出土した。調査途中の8月3・4日には、福岡市埋蔵文化財センター主催による「小、中学生のための体験考古学教室」の発掘体験が当調査地にお

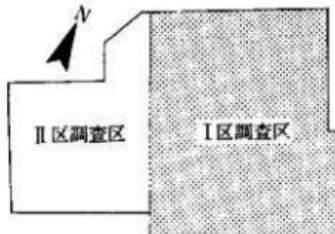


Fig.2 調査区割図

いて開かれた。10月2日にⅠ区の調査を終え、10月15日よりⅡ区の表土を排除したのち、遺構検出を始めた。Ⅱ区では、河川の一部と考えていた遺構が溜池であることが判明した。この池からは、中世の墨書き木札類（卒塔婆・笠塔婆・柿経）、人骨、土器、陶磁器、木器等が多量に出土した。さらに、Ⅱ区の大半において中世水田が検出された。水田は2層にわたり、足跡が調査区全面に残っていた。また、北西隅では、第1次調査において確認された溝の東岸を検出した。昭和62年1月24日すべての調査を終了した。

日誌

- | | |
|------------|--|
| 昭和61年7月1日 | 発掘調査開始 |
| 8月3・4日 | 福岡市埋蔵文化財センター主催による「小、中学生のための体験考古学教室」発掘実習を行なう。 |
| 8月19日 | 木簡出土 |
| 10月2日 | Ⅰ区調査区終了 |
| 10月15日 | Ⅱ区調査区遺構検出を始める。 |
| 11月9日 | 墨書き木札類（卒塔婆・笠塔婆・柿経）出土 |
| 11月30日 | 遺跡説明会を開催。約200人が見学におよぶ。 |
| 昭和62年1月24日 | 調査終了 |



Fig.3 体験考古学実習風景



Fig.4 体験考古学実習風景



Fig.5 SG16発掘調査風景



Fig.6 水田発掘調査風景



1. 井相田C遺跡第2次調査地点

A 那珂深ヲサ遺跡群	B 諸岡A遺跡群	C 諸岡B遺跡	D 板付遺跡
E 高畠遺跡	F 笹原遺跡群	G 三筑生産遺跡	H 麦野A遺跡群
I 井相田C遺跡（仲島遺跡群）	J 仲島遺跡	K 立花寺遺跡群	
L 金隈遺跡	M 影ヶ浦遺跡群	N 井相田A遺跡群	O 井相田B遺跡
P 麦野C遺跡群	Q 麦野B遺跡群	R 南八幡遺跡群	

Fig.7 調査地周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）

第二章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

井相田C遺跡周辺の地形は、北東側を三郡山地から延びる丘陵性山地に、南側を脊振山地から延びる丘陵にはさまれ、北西から南東方向にほぼ直線的に延びる溝状地形が発達し、福岡～二日市～筑後地方へ通じる唯一の解析低平地となっている。この低平地は北流する御笠川の冲積作用によって形成された標高10～15m程の平野となり、福岡平野の東南部の一角を成す。

井相田C遺跡は、この低平地に点在する微高地に位置する。調査時における地表高は12.7m前後を測るが、盛土を行なう以前は11.5m前後を呈していたと思われる。

2. 遺跡の歴史的環境

井相田C遺跡は2次にわたる発掘調査によって、古代の集落と中世の水田が主体を成すことが判明した。本遺跡周辺においては、先土器時代の遺跡を始めとする各時代の多くの遺跡が存在している。これらの遺跡については、井相田C遺跡第1次調査報告書をはじめ、既刊の報告書に詳細に言及しつくされているので本文末に関係文献を列参してこれに譲り参照されたい。本書では、今調査に深く関わる奈良時代から室町時代の遺跡に限定して述べるものである。

調査地周辺における奈良時代の遺跡には、北西5kmに鴻臚館、北8kmに多々良込田遺跡、南東7kmに大宰府政庁がある。特に、本遺跡から東へ250mに位置する仲島遺跡は、井相田C遺跡を考えていく上で注目される遺跡である。この仲島遺跡は、これまでに6次の調査が行なわれ、



Fig.8 第1次調査区全景（北から）

3. 地 質

弥生時代から奈良時代にわたる遺構の存在が報告されている。これまでの調査では、遺跡の中心を成すと考えられる掘立柱建物群等は確認されていないものの、一般的集落に伴う井戸とは明らかに異なる材、及び構造を有する井戸が7基出土している。さらに、井戸内からは墨書き土器、塩壺等が出土し、遺跡の性格の一端をうかがわせている。

井相田C遺跡とは、近距離にあるものの、昭和57年から当地周辺で行なわれている下水道整備における立会調査によれば、仲島遺跡と本調査区との間には谷部の存在が指摘されている。このため、現在は個々の遺跡名を付して区分しているが、西遺跡からの遺構、遺物から考えると、将来的にはひとつの遺跡としてとらえていく必要があろう。

最後に、本調査区に南接して行なわれた第1次調査について概観しておきたい。1次調査では、調査区の東半部を中心に、8世紀前半～10世紀初頭の集落を確認している。集落は倉庫、掘立柱建物が中心をなし、掘立柱建物42棟、竪穴式住居4棟、大溝1条、土壙46基等を数える。集落は大きく5時期に分かれさらに集落が北及び東へ広がることが報告されている。細部については、既に報告書が刊行されており参照されたい。

3. 地 質

本調査地及び周辺における地質報告は、昭和61年に行なわれた三筑地区中学校地質調査の成果を抜粋し、これにあてる。

調査地に分布する地層は、中生代白亜紀の花崗岩類を基盤岩とし、その上部に新生代第四紀の末固結層（砂質土主体）が不整合の関係で堆積している。ボーリング成果によると、調査区は次の6層より構成されている。上層から埋土層、沖積粘性土層、沖積砂質土層、洪積粘性土層、洪積砂質土層、花崗岩類である。埋土層は地表からGL-1.8mを測る。埋土の材量は主にマサ土が使用されているが、大部は礫混じり土砂が使用されている。沖積粘性土層はGL-1.8～-2.2mを測る。暗灰色を呈する砂質粘土より成り、所々に薄い砂層をはさんでいる。沖積砂質土層はGL-2.2m～-6.9mを測る。この層は、調査地背後の山地に広く分布する花崗岩類起源の細～粗砂によって構成され、層厚3～5mを有して連続的に分布している。洪積粘性土層はGL-6.9～-7.2mを測る。かなり圧密された粘土よりなり、層厚は0.3～1.2mを測る。洪積砂質土層はGL-7.2m～-13.7mを測る。砂、礫混じり砂等の砂質土を主体とした3～7m程度の層厚で連続的に分布している。風化花崗岩層はGL-13.7m以深を測る。本層は調査地の基盤岩で、北部九州に分布する花崗岩類のうち新期花崗岩類に分類される早良花崗岩となる。

註

1 弥生時代～奈良時代の複合遺跡であることから、併存遺跡群として考えるのはどうであろうか。

2 「三筑地区中学校地質調査委託報告書」鬼怒川ボーリング株式会社 1986年

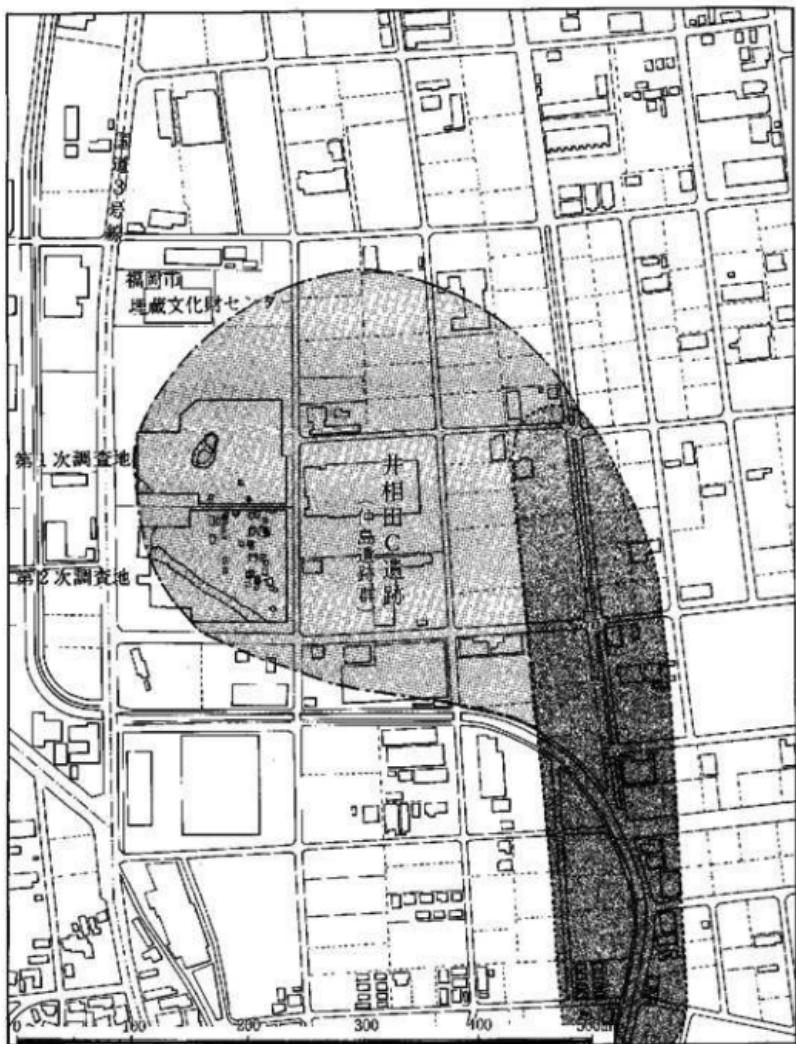


Fig. 9 調査地周辺地形図 (縮尺1/5,000)

第三章 発掘調査の記録

1. 遺跡の概観

本調査において検出した遺構は、奈良時代後期から平安時代初頭の掘立柱建物を中心とする集落跡、鎌倉時代の土壙墓、そして室町時代後期の池を中心とする水田跡等の三つに所属時代、性格が大別される。

奈良時代後期から平安時代初頭の遺構は、掘立柱建物2棟、竪穴住居4棟、井戸2基、土壙5基、溝5条、柱穴多数である。これらの遺構は、調査区南東部を標高最高点とする地域に密集し、北東方向へ傾斜する面においては少ない。このことから1次調査で確認した集落は、今調査区の中央部にその北限を求めることが可能である。遺構の希薄な傾斜面上には暗黒褐色の包含層があり、調査区西から調査区外へ広がっている。この包含層には、奈良時代を中心とする遺物が多く含まれており、後世の大規模な削平がうかがえる。

鎌倉時代の遺構としては土壙墓の1基だけである。遺存状態は悪く、先に述べた削平の可能性を強く否定するものである。

室町時代の遺構は、池、土壙、水田、河川である。池は調査区の中央部に位置している。池の西側には、平坦な水田面が広がる。水田面は2層あり、顯著に人の足跡や牛跡を残す。

以上の他には、遺構は認められないものの、縄文時代の石器、弥生時代の土器、石器が出土しており、調査周辺において各時代の遺構の存在が十分に考えられる。

2. 土 層

調査地の基本的層位は、I区調査区では地表から埋土層、旧水田（戦前）の耕土、床土層、黒褐色粘質土層、暗茶褐色粘質土層、地山の黄灰色粘質土層であるが、地山は北東部において青灰色粘質土に移行する。遺構検出は、地表下1.5mの黒褐色粘質土層上面で行なった。検出した遺構と土層との関係は、Fig.10に示すとおりである。

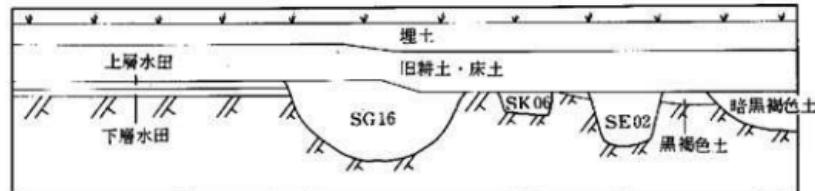


Fig. 10 遺構と土層の関係略図

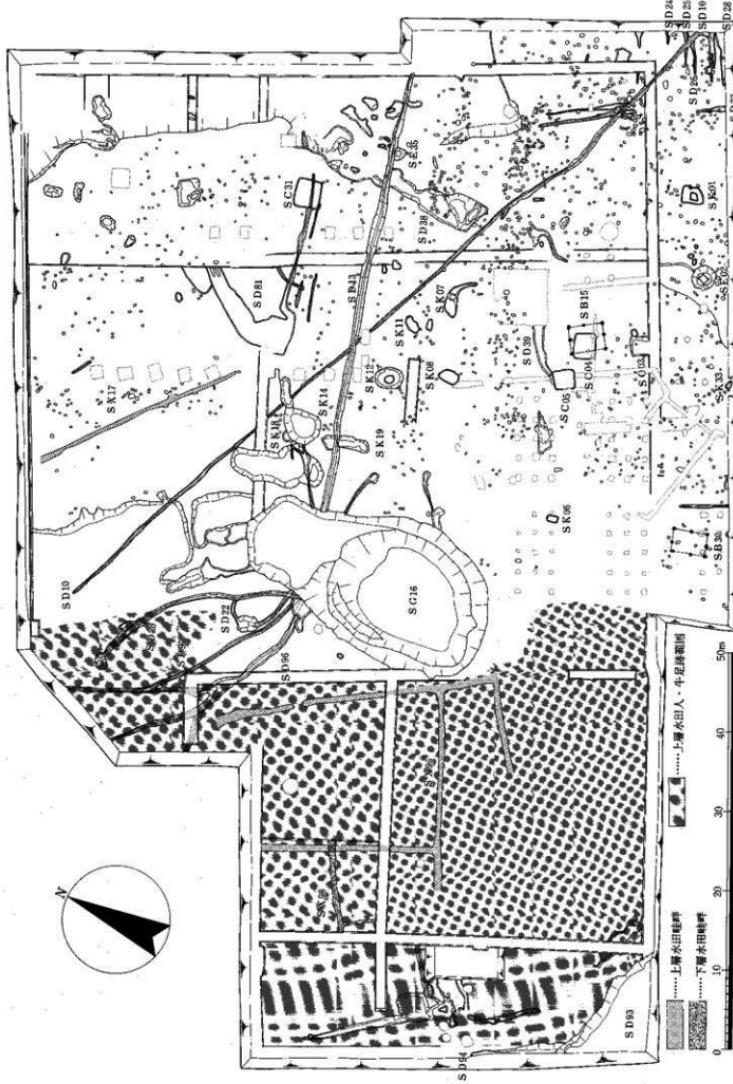


Fig. 11 湿地配置图 (缩尺1/500)

3. 遺構

検出した主要な遺構は、奈良時代後期～平安時代初頭、鎌倉時代前期、室町時代後半～近世の3時期に分かれる。以下、遺構の説明は3時期に分け、さらに遺構の種類毎に行なう。遺構には一定の番号を付し、遺構の種別を表わすため、SB—掘立柱建物、SC—竪穴住居、SD—溝・河川SE—井戸、SG—池、SK—土壙・土壙築、SP—柱穴・小穴、SX—水田等の記号を遺構番号の前に付して標記する。

a. 奈良時代～平安時代の遺構

掘立柱建物

SB15 (Fig.12 図版5) I区調査区中央部南で検出した、桁行2間(総長4.3m)、梁行2間(総長3.2m)の南北棟の掘立柱建物である。SC04の竪穴住居を作る際に柱穴の一部が壊されている。柱間は、桁行が1.9m～2.4m、梁行が1.5m～1.8mと一定しない。柱穴は、直径35cm前後の円形の平面形を呈し、深さ6cm～48cmを測る。この建物の柱穴は、側柱に位置する柱穴しか確認できなかったが、東桁柱の柱穴がSC04に壊されていることから、本来SB15は総柱建物の可能性が強い。

SB30 (Fig.13 図版5) I区調査区南西隅で検出した桁行2間(総長4.2m)、梁行2間(総長2.9m)の南北棟の掘立柱建物である。柱間は、桁行が1.8m～2.4m、梁行が1.4m～1.5mと一定しない。柱穴は、直径22cm～40cmの円形もしくは楕円形の平面形をなし、深さは18cm～27

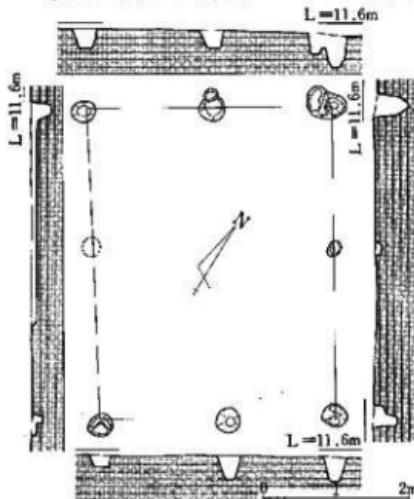


Fig.12 SB15実測図(縮尺1/100)

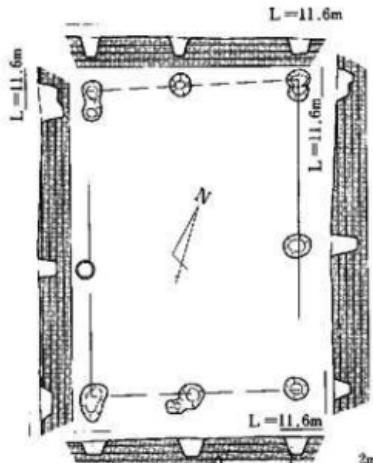


Fig.13 SB30実測図(縮尺1/100)

3. 造構（奈良時代～平安時代初頭の造構）

cmを測る。西南隅柱穴から、土師器（壺）が出土している。

竪穴住居

SC03 (Fig.14) I区調査区南で検出した長軸を南北方向に持つ竪穴住居である。竪穴部の南辺は特に削平を受けており、規模は不明である。隅丸方形の平面形を呈し、短辺2.3m、長辺は現長で2.2mを測る。床面は張り床が施され、床面下の地山面では凹凸が顕著である。竪穴部の遺存状態は悪く、5cmの壁高を測る。柱穴及び壁溝は確認できなかった。埋土中より、土師器（壺・壺・壺）、須恵器（壺・蓋）、小丸石が出土している。

SC04 (Fig.15 図版6) I区調査区中央で検出した長軸を東西に持つ竪穴住居である。竪穴部は長辺3.2m、短辺2.7mを測る。隅丸方形の平面形を呈している。カマドは北壁中央より西に偏した位置に設けられている。住居全体が、削平を受けているためにカマドの遺存状態も不良で、焚口の一部と煙出しの一部が残る。煙出しがSB15の柱穴を壊して作られている。煙出しが幅35cmを測り、床面と同じ高さで北壁からさらに北へ30cmの奥行をもつ。煙出の壁は7cmしか残存しない。床面は張り床が施されている。この床面下に2ヶ所のピットが認められた。ピットは地山面を掘削し、1m×1.5mの卵型の平面形を呈し深さ20cmを測る。ピット中からは、土器が出土している。柱穴は床面において認められない。埋土中より、土師器（壺・壺）、須恵器（壺）、小丸石が出土している。小丸石は床面中央部に集中して出土した。

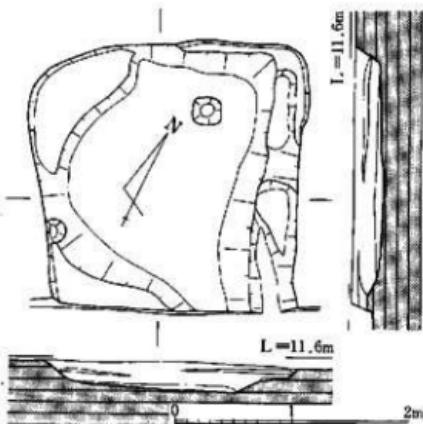


Fig.14 SC03実測図（縮尺1/50）

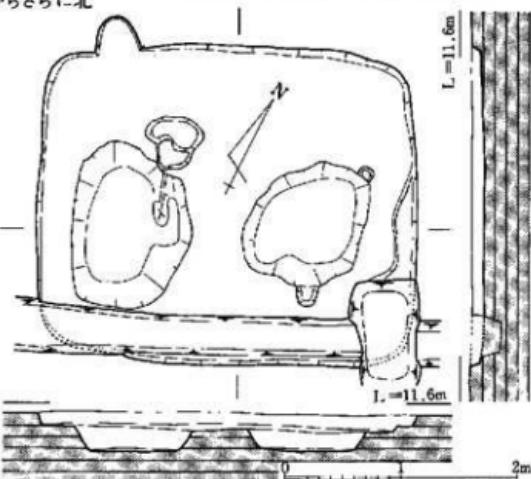


Fig.15 SC04実測図（縮尺1/50）

SC05 (Fig. 16 図版 6) SC04の北に位置する竪穴住居である。隅丸方形の平面形を呈し、長辺2.7m、短辺2.4mを測る。遺存状態は不良で、北、西辺では僅かに壁の痕跡を残し南壁で20

cmを測る。床面は張り床を行なっている。地山面は凹凸が激しい。この凹凸は人工的なものと考えられるが用途は不明である。柱穴、壁溝は認められない。埋土中より、土師器（壺・甕）が出土している。

SC31 (Fig. 17 図版 6) 1区調査中央部東で検出した竪穴住居である。隅丸方形の平面形を呈し、長辺3.6m、短辺3.2mを測る。遺存状態は不良で、壁高は僅かに5cmしか残っていない。床面において柱穴・壁溝等は認められなかった。遺物は、土師器（壺・甕）、須恵器（壺・蓋・甕）、砥石が出土している。

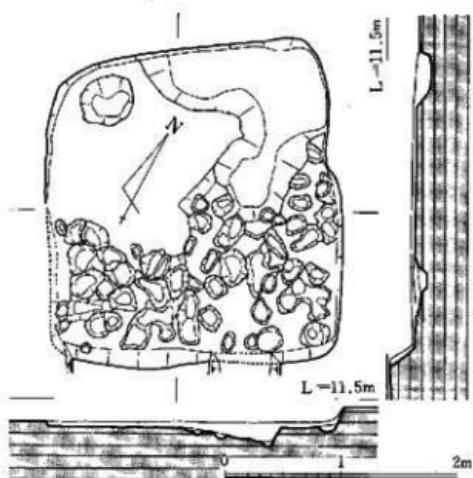


Fig. 16 SC05実測図 (縮尺1/50)

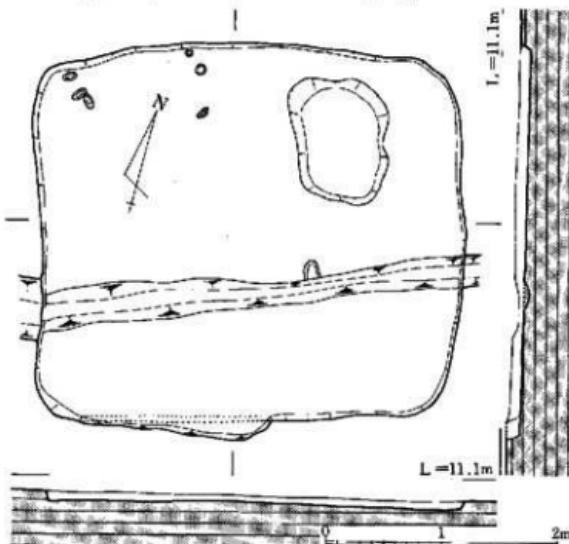


Fig. 17 SC31実測図 (縮尺1/50)

3. 造構（奈良時代～平安時代初頭の造構）

溝

SD10 I区調査区を東南から北西へ斜行する溝である。溝は直線的に延び、その南は調査区外へ延びる。北端はI区調査区北西隅で途切れる。溝は、南で幅50cm、深さ20cmを測り、壁は垂直に立ち上るのに対し、北端部へ向かって規模を小さくし、北端部近くでは、幅30cm、深さ5cmを測り、壁は緩やかな弧を描き立ち上る。溝底の標高は南端で11.04m、北端で10.88mを測り、溝の流れが調査区内において造構検出面が北へ向かって下る地形に合致したものであることが判った。埋土中より土師器（甕）、須恵器（壺・蓋）が出土している。

SD13 調査区中央部を東西に流れる溝である。西端はSG16の掘削の際に壊されており、東端は調査区の端近くで途切れる。溝底標高は顕著な差はなく、10.72cm～10.75cmを測る。溝の規模は調査区内で一定しており、上幅90cm、底幅20cm～30cm、深さ20cmを測り、溝壁は緩やかな弧を描き立ち上る。埋土中より、土師器（壺・壠甕・甕）、須恵器（壺・蓋・甕）が出土している。

SD38 I区調査区中央部東で検出した。溝の一方はSD10の東で途切れ、他方は北東方向へ流れる。途中SD13に壊されている。幅1.5m～4m、深さ0.5mを測る。深底は凹凸があり、壁は緩やかに弧を描くように立ち上がる。本所見では溝としたが、土塹と溝が接合した可能性は高い。埋土中より弥生土器（甕）、土師器（壺・甕）、須恵器（壺・蓋・平瓶・甕）が出土している。

SD96 II区調査区北で検出した溝である。南端はSG16に壊されている。溝は、上幅80cm、底幅30cm、深さ20cm～25cmを測る。壁は緩やかに弧を描き立ち上る。溝の南半部では1条であるものの、北西方向へ流れる途中で3条の溝に分かれる。分流する3条の溝は、分歧点からそれぞれ北、北西、西北西方向の調査外へ規模を小さくして統く。溝の幅は40cm～50cm、深さ10cm～20cmである。北へ延びる溝は途中でSD97と合流する。本来SD96はSD13と一つの流れを形成していたものとおわれる。

SD97 SD96の東に位置する溝で、北端ではSD96が分かれた溝と合流するが、南端ではSG16に壊されている。上幅40cm、底幅10cm～20cm、深さ10cm～15cmの規模を測る。壁は緩やかに立ち上がる。埋土中からは、遺物はほとんど出土していない。

井戸

SE02 (Fig. 18・19 図版7・20・21・22) I区調査区南で検出した、方形の井戸枠を残す井戸である。井戸枠の掘え付け掘形は径約3mを測る円形の平面形を呈している。掘形の深さは約1.2mを測る。井戸枠は、掘形の中央部よりやや西に偏する位置に据え付けられている。井戸枠の内法は長辺93cm、短辺75cmを測り、長方形の平面形を呈している。井戸枠の構造は、枠溝を施した4本の柱を長方形状の隅に配置し、板材をこの枠溝に上方より差し込ませ(落し込み)、さらにこの枠板を取り囲むように板を並べ立てている。4本の柱に施された枠溝は、全て柱の

根本から24cm～28cmを測る位置で途切れる。柄溝は幅3cm～4cm、深さ2.5cm～4.5cmを測る。ノミ状の工具を用いて開溝したのか、溝の底、壁にはノミ状工具の当り痕跡が明瞭に残る。井戸枠の底には曲物などの存在は認められない。隅柱のうち3本の柱の表面は面取りされ、手斧痕が明瞭に残る。面取りが施されているが、その断面形は正数角形にはならず、面取りの幅に広狭が認められる。柱の長さは上部が欠損してその全貌は不明であるが、残存長56cm～82cm、径12cm～18cmを測る。1本の柱の根本近くには6.5cm×7cmの方形の穴を深さ5cmにわたり斜めに穿っている。井戸枠板の横位状の板は、長さ74cm～91cm、幅10cm～30cm、厚さ1.5cm～5cmを測り、板の両端面近くは他の部に比べて薄く削られており、柄溝への差し込みを考慮したものと思われる。板の表面には、手斧痕が明瞭に残る。横板と横板との接合には、ダボ穴等を用いた

痕跡は認められない。

縦板は、幅10cm～22cm、厚さ1.5cm～2cm、長さは上部が欠損して全貌は不明であるが11cm～56cm残る。立てて用いられた縦板の多くが端面近くに方2cm前後の穴をもつ。井戸堀土中からは、土師器（壺・蓋・甕・塩壺・カマド・小型土器）、須恵器（壺・蓋・高壺・甕・平瓶）、木簡が出土している。
SE35 (Fig. 20 図版8)

I区調査区中央部東で検出した。井戸掘形は径1.5mの円形の平面形を呈し、深さは80cmを測る。掘形の北辺部はSD10に壊されている。井戸枠は遺存していない。堀土中より出土したひょうたんの外は、上器等の遺物は出土していない。

- I. 黄色粘土混黑色土
- II. 黄色粘土混暗黑色土
- III. 青灰色粘土混黑色土
- IV. 青灰色粘砂土

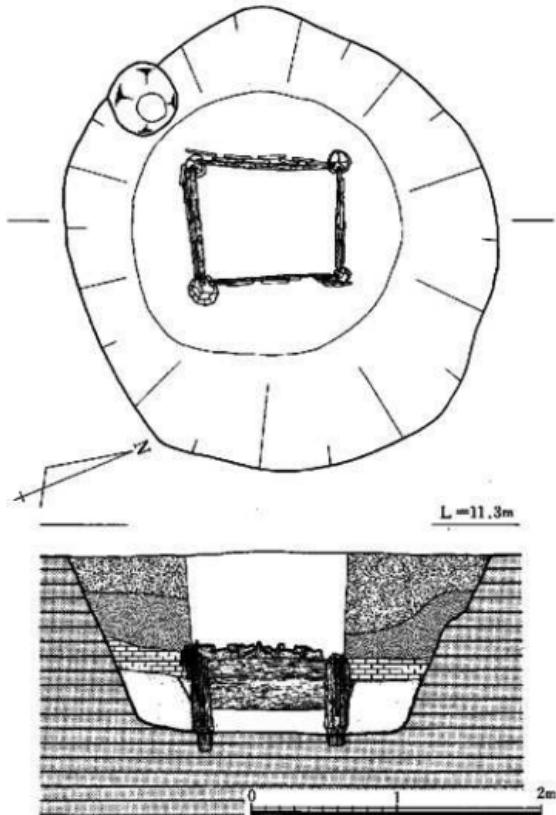
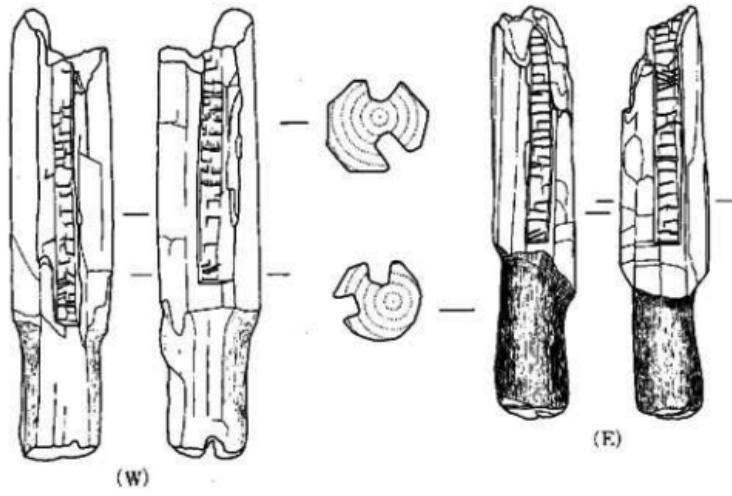


Fig. 18 SE 02実測図 (縮尺1/40)



(E)

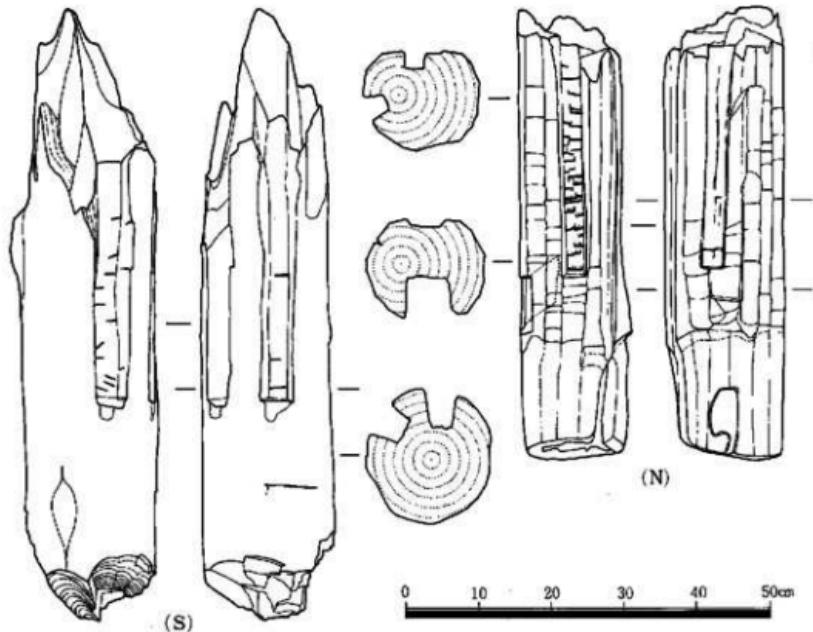


Fig.19 SE02井戸隔柱実測図（縮尺1/8）

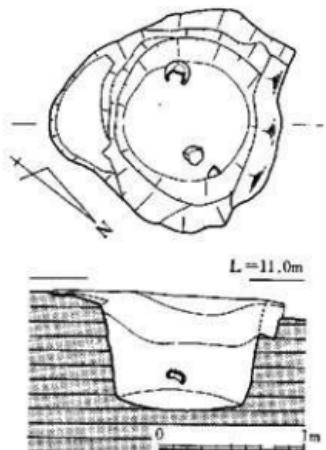


Fig. 20 SE.35実測図 (縮尺1/40)

円形の平面形を呈している。壁は、ゆるやかに弧を描き立ち上がる。埋土中より土師器(甕)、須恵器(环・甕)が出土している。

SK11 (Fig. 23) I区調査区中央で検出した。平面形は長軸2.4m、短軸1.3mを測る不整形な楕円形を呈している。底は凹凸があり、壁高は6cmを測る。埋土中より土師器(环)、須恵器(蓋)が出土している。

SK12 (Fig. 24 図版8) I区調査区のSK08の北に位置する。平面形は長軸3.4m、短軸2.8mを測る楕円形を呈し、底部中央は一段深くなっている。一段深く下がっている部分は、径1.1mの円形の平面形である。壁面は上、下段とも斜行して立ち上がり、深さは上段で40cm、下段で20cm残る。井戸の可能性も考えられる。埋土中からは、土師器(环・甕)、須恵器(环・蓋・甕)、瓦(平瓦)が出土している。

SK18 (図版9) SG16の東に位置する 南北12m、東西4mを測る不整形な楕円形の平面形を呈している。壁は緩やかに立ち上がり、高さは1cmを測る。埋土中より、土師器(甕)、須恵器(甕)、石器が出土している。

柱穴・小穴

I区調査区南半部に集中する。柱穴の密度は東西に流れるSD13を境として、南で濃く北では希薄である。掘形の平面形は、円形もしくは楕円形を呈するものと隅丸長方形を呈するものとが混在する。前者の規模は径30cm~60cm、深さ5cm~30cmを測る。後者は長辺40cm~60cm、短辺20cm~40cm、深さ5cm~20cmを測る。埋土中からは、土師器(环・甕)、須恵器(环・蓋・甕・甕)、瓦が出土している。

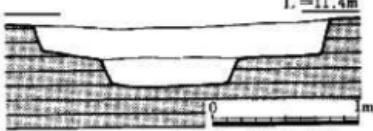
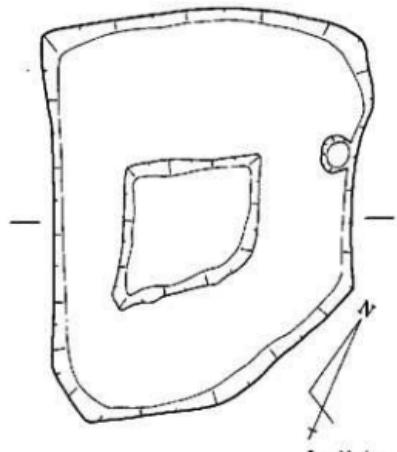


Fig.21 SK01実測図 (縮尺1/40)

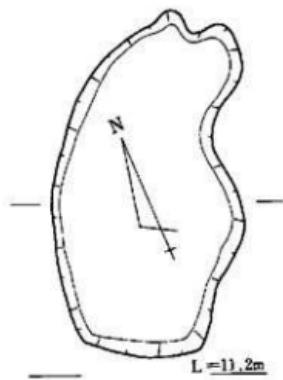


Fig.23 SK11実測図 (縮尺1/40)

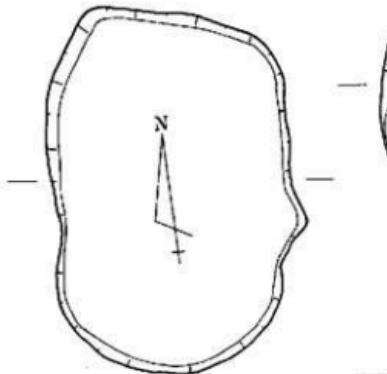


Fig.22 SK08実測図 (縮尺1/40)

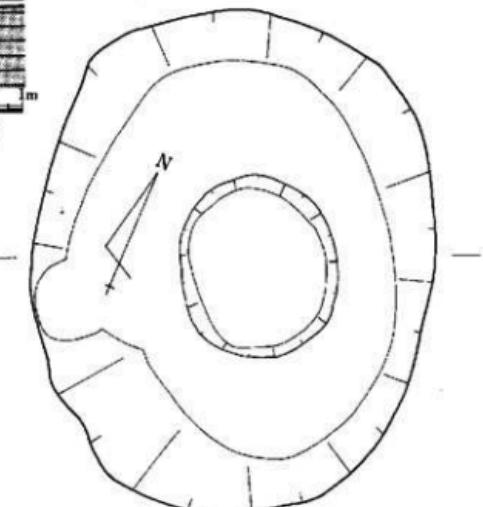
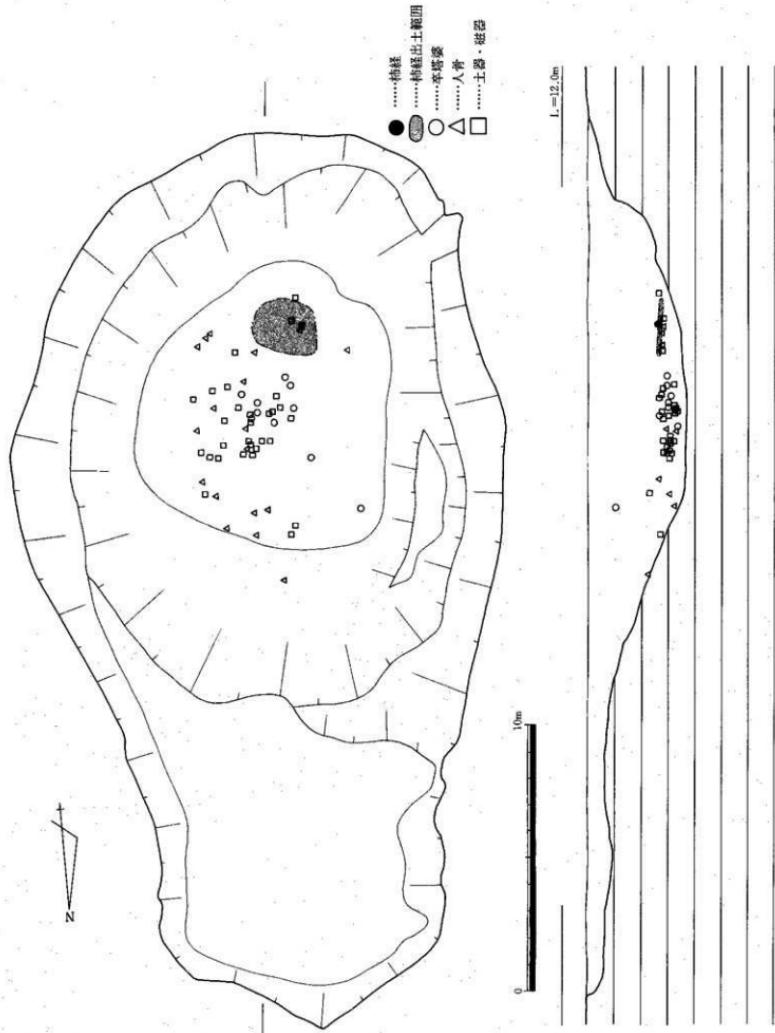


Fig.24 SK12実測図 (縮尺1/40)

Fig.25 SG16剖面・遺物出土地点図 (縮尺1/150)



b. 鎌倉時代の遺構

土壙墓

SK06 I区調査区南西、SB30の北に位置する土壙墓である。墓壙は隅丸長方形の平面形を呈し、長軸が磁北に一致する。長辺1.4m、短辺0.9mを測る。墓壙の深さは僅か7m~10mを呈していることから、後世に大規模な削平を受けていることが容易に推察される。墓壙の底面では木棺等の痕跡は確認できなかった。埋土中より充実形の青磁碗が出土している。

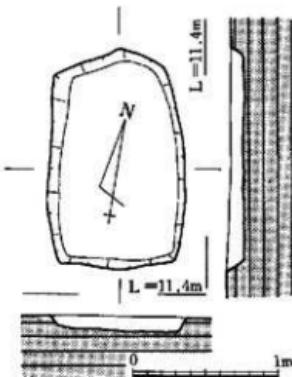


Fig. 26 SK06 実測図 (縮尺1/40)

C. 室町時代の遺構

溝

SD93 (図版9) II区調査区南西隅で検出した河川でS

D94を壞している。南東から北西方向へ流れる。今回の調査では東岸を確認したが、西岸は調査区の外に位置し、全貌を明らかにすることはできなかった。河川の埋土は、灰色~黄色の粗砂、暗灰色のシルトが互層に堆積している。幅員は、調査区内の検出状況から推定すると20m前後を呈するものと思われる。河岸は弧を描き、急激に立ち上がる。埋土中から、土師器(壺・皿・甕)、須恵器(壺・蓋・甕)、磁器、石鍋が出土している。河岸から銅錢が出土している。

SD94 (図版9) II区調査区西に位置する南北溝で、北は調査の外へ延び、南はSD93に接続されている。溝底中央部が調査区において認められないことから、幅員は2mを越すものと思われる。

池

SG16 (Fig. 25 図版9・10) 調査区中央部に位置する池状遺構である。東西18m、南北28mを測る不整型な橢円形の平面形を呈している。南半部は北半部より一段深くなる。南半部での深さは池底から遺構面まで約4mを測り、壁は弧を描き急激に立ち上がる。北半部は、深さ1mを測り、壁面は弧を描き立ち上がる。池埋土の層序は、上段より暗青灰色土、茶褐色砂質土、黒褐色砂質土、黒灰色粘質土である。最下部に位置する黒灰色粘質土は層厚2.5mを測り、SG16における埋まり状況を示唆させるものである。SG16より出土した大量の遺物は、この黒灰色粘土層中より出土している。SG16埋土からは、土師器(皿・壺・鍋・甕・擂鉢)、須恵器(壺・甕・瓶)、磁器(碗)、瓦(丸・平瓦)、埴・石器(石斧)、墨書き木札類(卒塔婆・柿絆・笠塔婆)、木器(椀・曲物・鉢・下駄・陽型木製品・加工棒)が出土している。

3. 造構（室町時代の造構）

水田

SX17 I区調査区北で畦畔を検出した。一方は調査区中央で途切れるが、他方は北西方向へ延び、さらに調査区の外へ続く。畦畔は幅0.7m～0.9m、高さ5cmを測る。

SX95 II区調査区北半部で検出した。二層確認した水田の上層水出である。畦畔と足跡が残る。水田は灰褐色粗砂、細砂に覆われている。この水田を覆う砂層は、北で3cm前後と厚く、南では僅かに残る。畦畔は幅0.7m～0.9mを呈し、東西、南北方向の4条を確認した。一枚の水田面積等は不明である。

SX98 II区調査区北西部で部分的に掘り下げて確認した。今回確認した水田の下層水田である。幅1m～1.5mの畦畔が東西方向と南北方向に延びる。

S X 95・98の水田を室町時代の造構としたが、これは土層からの所見であり、強く肯定するだけの資料はない。すくなくとも室町時代に水田耕作が行なわれていたことはまちがいないが、その開始期がどこまで古くなるかは不明である。^註

註

1 開始期が鎌倉時代より古くなる可能性は高い。

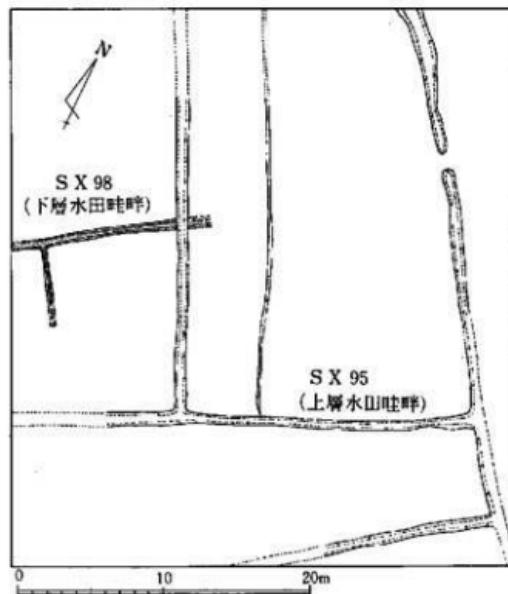


Fig. 27 SX 95・98実測図 (縮尺1/400)

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器、陶磁器、瓦、埴、石製品、木器、木筒、墨書き木札類、人骨、馬骨と多種多様で、所属年代も先土器時代から近代までと幅広い。これらの遺物は、その性格及び年代から二つに大別することができる。一つは奈良時代～平安時代初期の集落を構成する竪穴住居、井戸、土壤等の遺構から出土した土器、陶磁器を中心とする生活に関わる遺物であるのに対して、他の一つは室町時代後期の池から出土した墨書き木札類を中心とする民間信仰に関わる遺物である。以下、遺構から出土した遺物を中心に説明を行なうが、SG16出土の紳絹、笠塔婆は、その出土点数が破片も含め約4200点を数えるため、別冊で説明を行なう。

a. 上器・陶磁器

黒褐色土層出土土器 (Fig.28・29 図版15)

土師器 壺・蓋・壺蓋・鉢・甕

壺 全容を知り得るものはなく全て破片である。底部外面はヘラキリ後に部分的なナデ調整をしている。

蓋 (1) 口径16cmである。天井部内面は部分的にナデ調整している。口縁部は下方へ屈曲し、端部断面は丸くしている。

甕 体部、口縁部の破片が出土している。体部内面は口縁部近くまでヘラ削りし、外面は輻方向のハケ目調整をしている。口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部はヨコナデ調整で丸く仕上げている。

壺蓋 (26・27) 尖底筒型土器の破片が出土している。いわゆる製壺土器である。内面には布日压痕が明瞭に残り、外面はナデしている。破片が小片のため全容は不明である。布日压痕の総数は1cm四方で8本～9本で数える。

須恵器 盆・壺・蓋・高壺・甕・甕

蓋 (2～8) 大半が壺の蓋である。頂部外面はヘラ削りし、つまみを付ける。口縁部は下方に屈曲するものと、やや外反しながら屈曲するものがあり、若干の時期差が認められる。

高壺 (9) 高壺の壺部である。底部外面はヘラ削りし、内面はヨコナデで仕上げる。

壺 (12～22) 壺は底部が無高台の群 (12・13) と高台を持つ群 (14～22) に分類される。底部が無高台の壺は、底部外面はヘラキリ後にナデ調整している。口縁部は直線的に外反し、ヨコナデのまま仕上げている。さらに底部に高台を持つ群は口径の違いで二つに細分される。底部に高台を持つ壺で口径が一般的な壺 (14～20) は、口径10.2cm～14.7cm、高台径7cm～10cm、器高3.5cm～4cmである。高台は全て張り付け高台である。口縁部はヨコナデのまま仕上げ、直線的に外反する。口径の大きい壺 (21・22) は口径18.3cm、高台径10.5cm～12cm、器高5.3cm～6.6cmである。口縁部はヨコナデのまま仕上げ、直線的に外反するが、口縁部近くでや

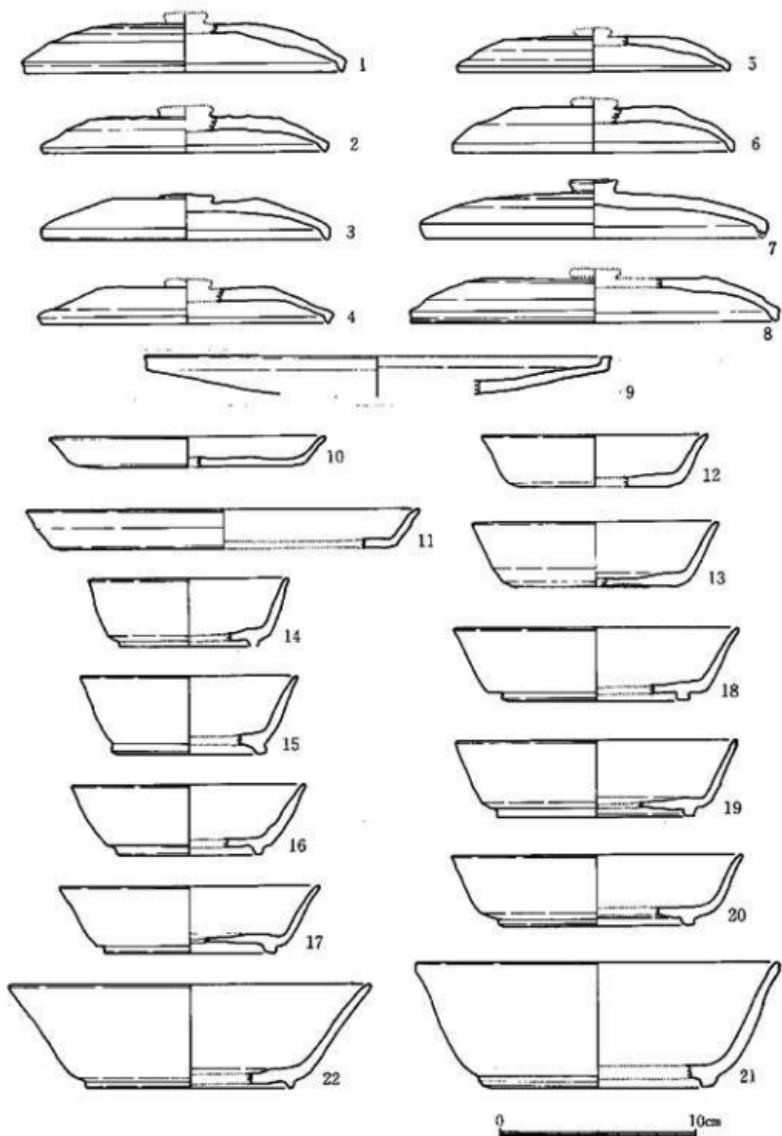


Fig. 28 黑褐色上層出土土器実測図 (縮尺1/3)

や外寄する。

皿 (10・11) 口径13.8cm~20cm、底径11.6cm~17.4cm、器高1.6cm~2cmである。口縁部はヨコナデのままで仕上げ、端部はやや外反する。

壺 (22~25) 高台径10.5cm~11.5cmである。高台はヘラ削りし張り付けている。胴部の下部はヘラ削りし仕上げている。23は他の壺と比べて胎土に砂粒を多く含み、色調の面でも異なる。

甕 体部の破片がパンコンテナ1箱ほど出土している。

外面には平行叩き目と格子叩き目とを残す。内面には当て具痕跡の青海波文が残る。

SC03出土土器 (Fig.30 図版6)

土師器 壺・蓋・壺蓋・甕

壺 すべて破片で全形を知ることはできない。口縁部はヨコナデで仕上げており、端部はやや外寄する。

蓋 数点の破片が出土しているが全形を知ることはできない。頂部に円盤形のツマミを張り付けている。天井部内面にはナデ調整している。

壺蓋 いわゆる製壺土器である。^{図22} 外径8cmの砲弾型を呈した体部の破片である。内面には布目圧痕が明瞭に残り、外面はナデ調整している。胎土には長石、石英砂粒を多く含む。土器の断面中央で色調が異なる。内面側は赤褐色を呈しているのに対し、外面は暗茶灰色を呈している。これは、土器生産時の焼成後に再び加熱を受けたものと思われる。

甕 体部外面は縱方向のハケ調整で仕上げている。内面は口縁部までヘラ削りしている。ヘラ削りの方向は、口縁部近くは横方向であるのに対して、その他の部位では底部から口縁部へ直線的に削っている。

須恵器 壺・蓋

壺 口縁部はヨコナデ調整して仕上げ、直線的に外反する。

蓋 (37・38) 口径14.2cm~17.5cmである天井部外面はヘラキリし、その後ナデ調整している。37は天井部から口縁部までが直線的であるのに対して、38は口縁部が下方へ屈曲し端部を丸く仕上げている。

SC04出土土器 (Fig.30 図版16)

土師器 壺・甕

壺 口縁部の破片が数点出土しているが、全形のわかるものはない。内外面ともヘラ磨きしている。

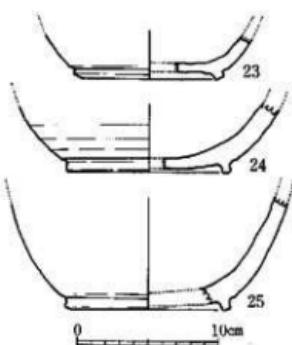


Fig.29 黒褐色土層出土土器実測図
(縮尺1/4)

4. 遺物(上器・陶磁器)

甕 (42・43) 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。体部外面は縱方向のハケ調整後、ナデで仕上げている。外面は、下方から上方へのヘラ削りしている。以上の甕の他に数点の甕が出土している。これらの甕の体部外面は縱方向を主体とするハケ調整で仕上げている。内面は縦方向のヘラ削りし、口縁部近くは横方向のヘラ削りしている。口縁部は、内面が横方向のハケ調整の後にヨコナデで仕上げており、外面は体部と一連の縦方向のハケ調整し、口縁端部近くはヨコナデで仕上げている。

須恵器 环

坏 (40・41) 口径16cm~17.6cm、高台径11.1cm~12.2cm、器高4.2cm~5.3cmである。底部はヘラキリ後にナデでいる。高台は張り付け高台でやや外反する。口縁部はヨコナデ調整で仕上げており、直線的に外反する。端部はヨコナデ調整で丸く仕上げている。

SC03出土土器 (Fig.30)

土師器 鉢・甕

鉢 (53) 口縁の一部が出土した。口縁はゆるやかに外反する。体部外面は縦方向のハケで調整した後、ナデで仕上げる。内面は横方向のヘラ削りしている。口縁部内外面ともヨコナデで調整して仕上げている。

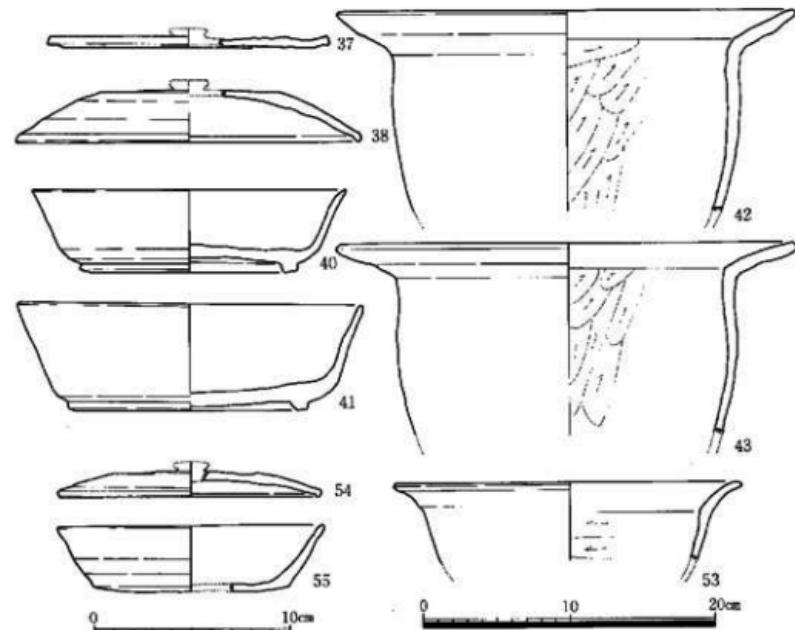


Fig.30 SC03(37~38)・04(40~43)・05(53)・31(54~55) 出土土器実測図
(縮尺1/3:37~38・40~41・54~55, 1/4:42~43・53)

壺 体部の破片が数点出土している。外面は縦方向のハケで調整している。内面は縦方向のヘラ削りしている。煤が外面に残る。

SC3I出土土器 (Fig.30 図版16)

土師器 壺・壺

壺 底部、口縁部の内外面とも横方向のヘラ磨きをしている。口縁部も含め全形は不明である。

壺 口縁部は「く」の字状に外反する。体部外面は縦方向のハケで調整している。内面は縦方向のヘラ削りしている。口縁部内面は横方向のハケで調整し、内外面ともヨコナデで仕上げている。

須恵器 壺・蓋・壺

壺 (55) 口径13.5cm、底径9.8cm、器高3.4cmである。底部外面はヘラキリのままで不調整である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整して仕上げている。端部はヨコナデで丸く仕上げている。

蓋 (54) 口径13.3cmの壺の蓋である。天井部外面はヘラキリの後、ナデで調整している。口縁部は下方に屈曲し、端部はヨコナデで丸く仕上げている。この他に、壺の蓋が出上している。破片のため全形は不明である。口縁部は下方へ屈曲し、端部は直をもつ。

壺 体部の破片が数点出土している。外面に格子叩き目が、内面には当て具の同心円文が残り、ナデ等の仕上げはしていない。

SD10出土土器

土師器 蓋・壺

蓋 口径15cmの壺の蓋である。破片で全形を知り得ない。口縁部は下方へ僅かに屈曲し、端部はヨコナデで丸く仕上げている。

壺 口縁部は「く」の字状に外反する。体部外面は縦方向のハケ調整で仕上げている。内面はヘラ削りのまま仕上げている。胎土には長石、石英砂粒を多く含む。

須恵器 壺

壺 底部の破片で全形を知り得ない。底部外面はヘラキリの後、ナデで仕上げている。

SD13出土土器 (Fig.31 図版17)

土師器 壺・塙壺・壺

壺 口縁部の破片で全形は知り得ない。胎土は精選され、僅かに0.5mm程の砂粒を含む。口縁部は中外面ともヨコナデ調整し、横方向のヘラ磨きで仕上げている。

塙壺 (57) いわゆる壠彈型をした製塙土器の口縁部の破片である。⁵⁵³ 復元した口径は、8cmである。外面はナデで仕上げている。内面には布目压痕が残り、布の経緯は1cm四方でそれぞれ8本である。また布の重ね目が認められるが、重ね目

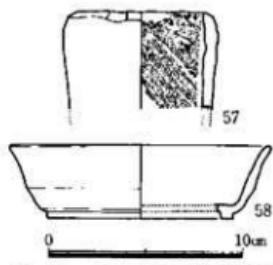


Fig.31 SD13出土土器実測図
(縮尺1/3)

4. 遺物(土器・陶磁器)

を糸でかがった痕跡は認められない。

壺 破片が数点出土しているが、全形を知り得ない。体部外面は縦方向のハケで調整し、内面は頸部まで縦方向のヘラ削りのままで仕上げている。口縁部はヨコナデで仕上げている。

須恵器 壺・皿・壺・甌

壺 (58) 口径13.5cm、高台径9.6cm、器高3.8cmである。口縁部は内外面ともヨコナデで調整している。端部は丸く仕上げ、やや外弯する。

皿 口径17.5cm、底径14cm、器高3cmである。底部外面はヘラキリしてナデで仕上げている。底部内面はヨコナデの後、中央部のみナデで仕上げている。口縁部はヨコナデのままで仕上げている。

壺 体部の破片が出土している。いわゆる四耳壺である。体部外面下端をヘラ削りしている。

甌 体部を同心円文当板、平行、格子叩きで成形する。

SD38出土土器 (Fig.32 図版17)

土師器 壺・蓋・鉢・甌

壺 高台付が大半を占める。口縁部はヨコナデで調整して仕上げている。

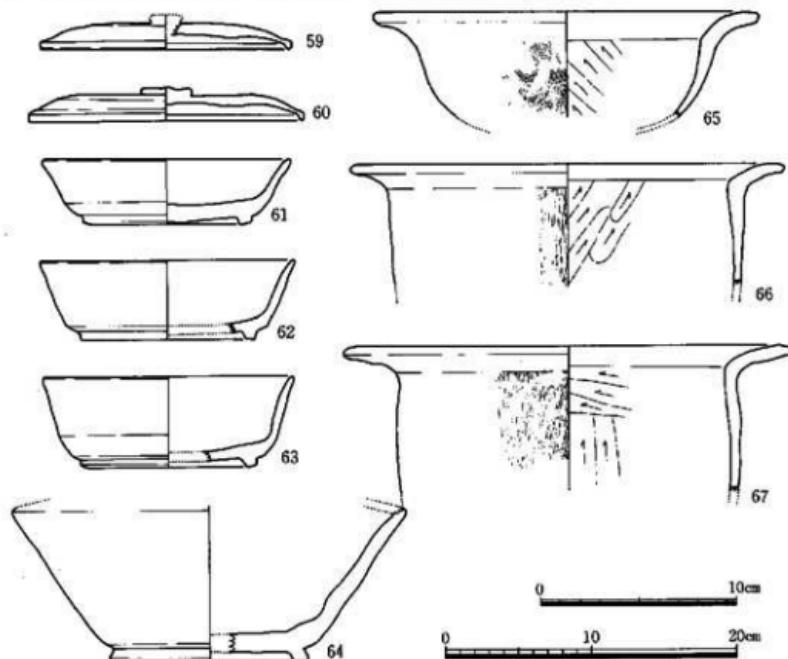


Fig.32 SD38出土土器実測図 (縮尺1/3:59~64, 1/4:65~67)

蓋 天井部外面に円盤形のつまみを張り付ける。口縁部は僅かに下へ屈曲し、端部はヨコナデで丸く仕上げている。

鉢 (65) 口径26.8cmの鉢である。体部外面は縦方向のハケの後に横方向のハケで仕上げる。体部内面は頸部まで横方向のヘラ削りしている。口縁部は外面を縦方向、内面を横方向のハケでそれぞれ調整してヨコナデで仕上げている。口縁端部まで煤が外面に付着する。

甕 (66・67) 口径30cm~31cmの甕である。体部外面は縦方向のハケで調整して仕上げる。体部内面は、頸部のみ横方向で他は縦方向のヘラ削りしている。口縁部は、外面は縦方向、内面は横方向のハケで調整して、ヨコナデで仕上げている。上記の他に把手をもつ甕も出土している。把手部は上方へ屈曲するが僅かである。体部内面はヘラ削りし、内面はハケで調整している。

須恵器 坯・蓋・長頸壺・甕

坏 (61~63) 口径12.6cm~13cm、高台径8.6cm~9cm、器高3.5cm~4.1cmである。底部はヘラ削りしてナデ調整している。底部内面は中央部のみナデで仕上げる。口縁部はヨコナデで調整をして仕上げる。

蓋 (59・60) 口径12.8cm~14cm、器高1.8cmである。天井部外面はヘラ削りで調整した後、円盤形のつまみを張り付ける。天井部内面は中央部のみナデで仕上げる。口縁部は下方へ屈曲する。

長頸壺 (64) 高台径10.1cm、最大体部径20cmで、頸は欠損している。底部外面、体部外面下端はヘラ削りし、さらにヨコナデしている。

甕 体部の破片が数点出土している。体部内面には当板の同心円文が残り、外面には平行印引き目が残る。

SE02出土土器 (Fig.33~36 図版17・18)

土師器 坯・蓋・小型壺・塙壺・甕・カマド

坏 (69~71) 口径14cm~16cm、底径9.2cm~10.5cm、器高3.1cm~3.8cmである。底部外面は、ヘラ削りしている。69、70は口縁部内外面ともヨコナデで調整して仕上げている。口縁部は屈曲して底部から外反しつつ立ち上がり、71は内外面ともヘラ麻きの調整で仕上げている。口縁部は緩やかに立ち上がる。

蓋 (68) 口径15.7cm、器高2.1cmの坏の蓋である。天井部外面はヘラ削りしてつまみを張り付ける。天井部内面はヨコナデした後、中央部のみナデの調整をしている。口縁部はヨコナデにより下方へ引き出している。外面には重ね焼き痕が明瞭に残る。その径は14.3cmである。

小型壺 (94) 口径6cmの手捏ね土器である。体部は球形を呈し、口縁部は直立する。口縁部外面は指頭上痕が連続して明瞭に残る。体部、口縁部内面はナデで調整して仕上げている。

塙壺 (77~79) 口径12cmの尖底筒型、いわゆる砲弾型を呈する壺の口縁部と体部の一部であ

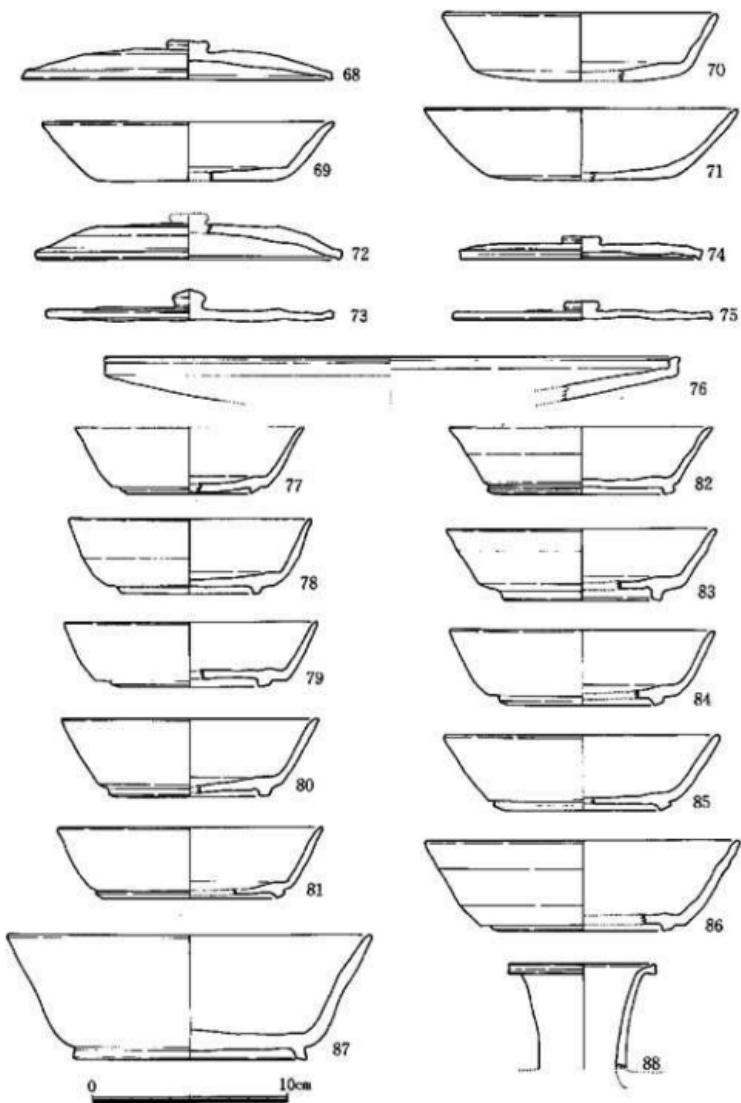


Fig.33 SE 02出土土器実測図 (縮尺1/3)

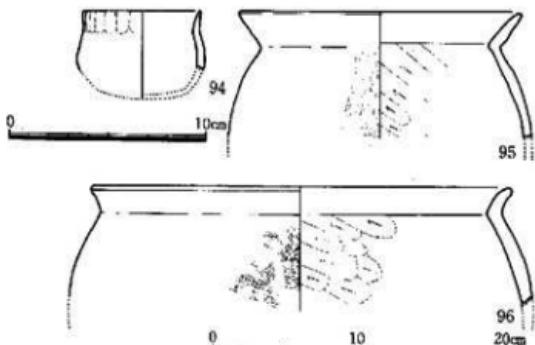


Fig.34 SE 02出土土器実測図 (縮尺1/3:94, 1/4:95~96)

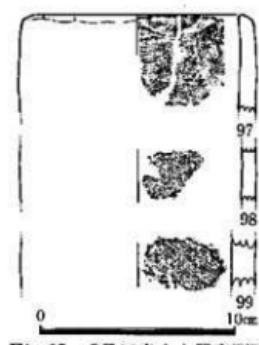


Fig.35 SE 02出土土器実測図 (縮尺1/3)

る。全て赤褐色を呈している。胎土は1mm～2mmの長石、石英砂粒を多く含むものと、良選で粗砂粒を含まないものとに分かれる。体部外面はナデで仕上げているが指頭圧痕が残る。内面は布目压痕が残る。布目压痕の経緯は、1cm四方で9本～10本を数える。

壺 (95～96) 95は体部外表面を縦方向のハケで調整して仕上げている。内面は頸部までヘラ削りしている。口縁部内外面ともヨコナデで仕上げている。96は体部外表面を縦方向のハケで調整した後、さらに横方向のハケで仕上げている。内面は頸部までヘラ削りしている。口縁部は、外表面を縦方向、内面を横方向のハケでそれぞれ調整して、両面ともヨコナデで仕上げている。95、96とも体部外表面に煤が全体に付着している。

カマド 移動式のカマドの焚き口部分である。焚き口の縁には錆が張り出す。体部内面はヘラ削りし、外表面は横方向のハケで調整して仕上げている。

須恵器 壺・蓋・高环・皿・平瓶・壺

壺 (77～87) 口径11.8cm～18.5cm、高台径7.2cm～11.8cm、器高3.3cm～6.5cmである。底部外表面はヘラ削りして高台を張り付けている。口縁部は内外面ともヨコナデで調整し、直線的に外反する。77の内面には墨液を溜めた痕跡が残る。

蓋 (72～75) 72～75は壺の蓋で、天井部外表面はヘラキリしてつまみを張り付ける。内面はヨコナデで仕上げている。口縁端はヨコナデで丸く仕上げている。

高环 (76) 76は高环の環部で、底部外表面はヘラ削りし、口縁部は上方へ屈曲する。

皿 口径14.3cm、底径10.4cm、器高1.9cmである。口縁部は直線的に外反する。底部外表面はヘラキリし、ナデで仕上げている。口縁部内外面ともヨコナデで仕上げている。

平瓶 (88) 頸部は内外面ともヨコナデで仕上げている。口縁端部は上、下方へそれぞれヨコナデで引き出している。体部は不明である。

4. 遺物（土器・陶磁器）

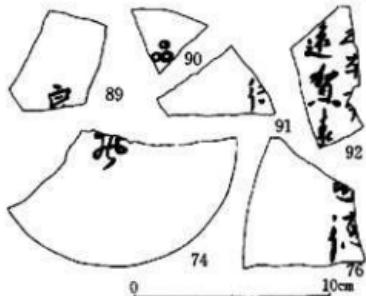


Fig.36 SE 02出土墨書き土器実測図
(縮尺1/3)

SE 02より墨書き土器が8点、ヘラ描土器が1点出土している。墨書き土器(74・76・89~92)は全て須恵器で、壺の底部外面に書かれている群(89・90)と蓋の内面に書かれている群(74・91)と高壺の壺部内面に書かれている群(76・92)に分かれる。書かれている内容は「**馬**」(74)、「**口德**」(76)、「**良**」(89)、「**品**」(90)、「**銜**」(91)、「**遠賀**」(92)である。92は習書したもので、他は人名、地名等を標記したものである。ヘラ描土器(93)は、土師器壺の底部内面に「**井**」をヘラで刻んでいる。刻み込みは土器を整形した後に行なわれている。

SK01出土土器

土師器 壺・塙壺・甕

壺 口縁部の破片で全形は知り得ない。胎土は精選されており、僅かに砂粒を含む。口縁部内面は手持ちのヘラ磨きで仕上げる。外表面はナデで仕上げる。

塙壺 3点が出土している。いずれも体部の破片で、全形は不明である。体部外表面はナデで仕上げているが、成形時の指頭圧痕が残る。内面には布目圧痕が残り、2種類の布が使用されている。一方の布目圧痕の経緯は1cm四方でそれぞれ35本~40本を数え、他の遺構から出土した同様の土器の布目圧痕とは大いに異なる。他の方はSE 02等から出土した壺の内面に残る布目圧痕と同数の経緯である。^{註5}

甕 体部外表面は輻方向のハケで仕上げている。内面は輻方向のヘラ削りを頭部までしている。口縁部は外表面を輻方向のハケ、内面を横方向のハケでそれぞれ調整して、両面ともヨコナデで仕上げている。

SK07出土土器

土師器 甕

甕 すべて体部の小片である。体部外表面は輻方向のハケで調整して仕上げている。内面は、輻方向のヘラ削りのままで仕上げている。

壺 底部外面に高台を有する壺である。底部は球形を呈している。底部は内外面ともナデで仕上げている。張り付けた高台は、径11cmを測り外反している。この他に、体部が筒型の壺も出土している。内外面ともヨコナデで調整して仕上げている。

甕 体部外面には、平行叩き目、格子叩き目を残したまま仕上げている。内面は、当て具の同心円文を残すものと、ナデ調整して仕上げているものとがある。

墨書き・ヘラ描土器 (Fig.36 図版18)

須恵器 坯・甕

坏 底部外面はヘラ削りの後、ナデて仕上げている。

SK08出土土器

土師器 甕

甕 把手をもつ甕の破片である。体部外面は縦方向のハケで調整して仕上げている。内面はヘラ削りのままである。

須恵器 坯・甕

坏 口縁部の破片である。口縁部内外面ともヨコナデで調整して仕上げている。端部はヨコナデで丸く仕上げる。

甕 体部は、同心円文当板、格子叩きで成形して、そのまま仕上げている。

SK11出土土器

土師器 坯

坏 口縁部の破片で全形は知り得ない。口縁部内外面ともヨソナデで調整後、ヘラ磨きで仕上げている。

須恵器 釜

釜 口縁部の破片で全形は知り得ない。口縁部は下方へ屈曲し、やや外反する。

SK12出土土器(Fig.37 図版23)

土師器 坯・皿・甕

坏 口縁部の破片である。ヨコナデで調整して仕上げる。

皿 (103) 口径17.3cm、底径11.6cm、高1.6cmである。底部外面はヘラ削りの後ヘラ磨きで仕上げている。底部内面、口縁部内外面はヨコナデの後、ヘラ磨きで仕上げる。

甕 (104~106) 104、105、は体部外面を縦方向のハケ、体部内面をヘラ削りでそれぞれ仕上げている。105のハケ目は粗い。口縁部は外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケでそれぞれ調整し、さらにヨコナデで仕上げる。106は体部外面を縦方向のハケで調整し、さらにナデで仕上げる。体部内面は頸部まで縦方向のヘラ削りしている。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げる。

須恵器 坯・皿・甕

坏 底部の破片で全形は知り得ない。底部はヘラキリの後ナデ調整し高台を張り付ける。底部

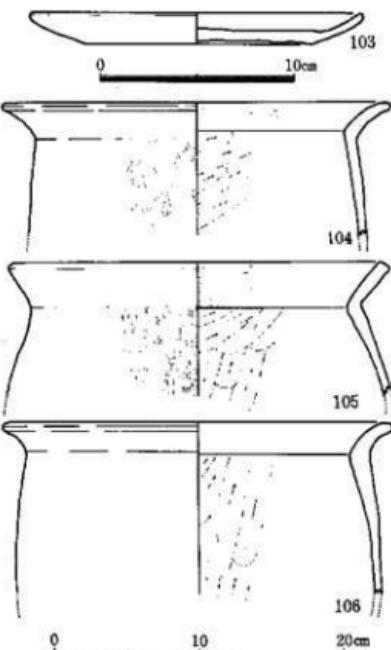


Fig.37 SK12出土土器実測図
(縮尺1/3:103, 1/4:104~106)

4. 遺物(土器・陶磁器)

内面はヨコナデし、中央部のみナデで仕上げる。

皿 底部ヘラキリのままで未調整。口縁部はヨコナデで仕上げる。

甕 体部の破片で全体を知り得ない。体部外面は格子叩き、体部内面は当板の同心円文を部分的にナデで仕上げる。

SK18出土土器

土師器 甕

甕 把手をもつ甕である。把手は上方方向へやや屈曲する。

柱穴出土土器(Fig.38 図版23)

土師器 壺・皿・甕

皿 (110~114) 口径16.3cm~20cm、底径10.5cm~17cm、器高1.8cm~2.3cmである。底部外面はヘラ削りのままで仕上げている。底部内面と口縁部内外面はヘラ磨きしているもの(111)とヨコナデで仕上げているもの(110・112~114)に分かれる。

須恵器 壺・皿・蓋・高壺・甕

壺 (115~118) 口径11.1cm~18.2cm、高台径7.5cm~12.1cm、器高2.6cm~5cmである。115~116は底部外面をヘラキリした後でナデ調整して高台を張り付ける。底部内面、口縁部内外面とヨコナデで仕上げる。339は底部外面をヘラ削りした後で高台を張り付けている。底部内面中央はナデで仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデのままで仕上げている。

皿 (109) 口径13.7cm、底径10.5cm、器高1.8cmである。底部外面はヘラキリ後にナデで仕上

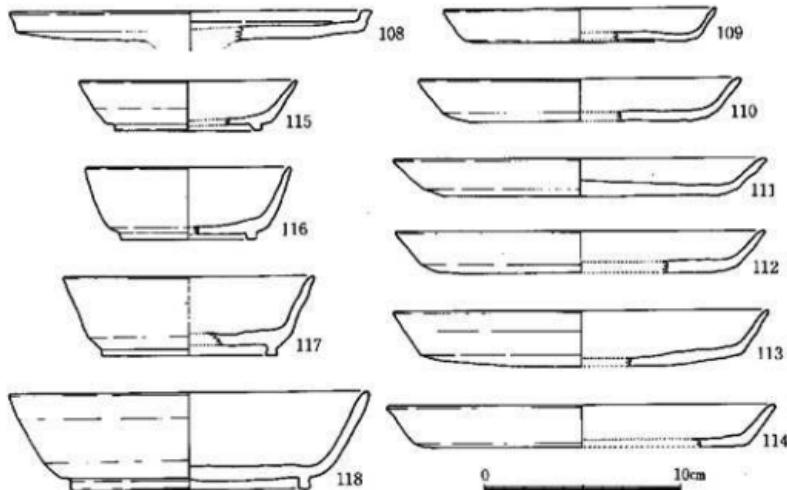


Fig.38 柱穴出土土器実測図 (縮尺1/3)

げる。口縁部はヨコナデで仕上げている。

高环(108) 口径18.4cmの高环の环部である。底部外面はヘラ削りの後ヨコナデで調整している。环内面はヨコナデした後で中央部だけナテで仕上げる。口縁は上方へ外反して屈曲する。端部は面をもつ。

SK06出土磁器

磁器 瓢

碗 (119) 口径16.2cm、高台径6.3cm、器高6.8cmの青磁碗である。胎土は灰白色、釉は綠濁色を呈する。釉は全面に施し、疊付部分を削り取る。内面には片切形による草花文と水波文とを施す。龍泉窯産のものである。

SD93出土土器 (Fig.40 図版25)

土師器 盆・甕

皿 (171) 口径8cm、底径5.7cm、器高1.6cmである。底部切り離しは糸切りによる。器形、技法的にSG16出土の土師器小皿と共通する点が多い。

甕 把手をもつ甕である。把子の体部への取り付けは、張り付けと差し込みとの2つの技法がある。

SG16出土土器、磁器 (Fig.41・42 図版24・25)

土師器 小皿・环・鍋・擂鉢・甕

小皿 (120~125) 口径8cm~8.2cm、底部径5.4cm~5.8cm、器高1.6cm~1.8cmである。底部切り離しは全て糸切りによる。底部外面には板山圧痕が残る。胎土は精選されており砂粒と金雲母を僅かに含む。

环 (126~133) 底部切り離しは全て糸切りによる。128~132は口径12.7cm~13.9cm、底径7.7cm~8.6cm、器高2.7cm~3cmである。口縁部は底部から直線的に立ち上がり、底部との境を明確にする。胎土は精選され金雲母を僅かに含む。126は口径11.4cm、底径6.2cm、器高2.6cmである。127は口径12.3cm、底径6.5cm、器高2.8cmである。口縁部と底部との境は明確でない。口径と底径との差が128~132の环に比べて大きい。胎土は精選され長石、石英砂粒を僅かに含む。133は口径16.4cm、底径8.8cm、器高3.4cmである。口縁部が他の环より内寄する。



Fig.39 SK06出土磁器実測図
(縮尺1/3)

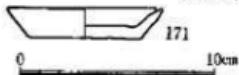


Fig.39 SK06出土磁器実測図
(縮尺1/3)

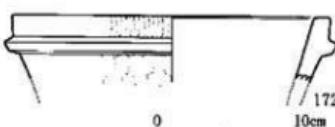


Fig.40 SD93出土土器実測図
(縮尺1/3:171, 1/4:172)

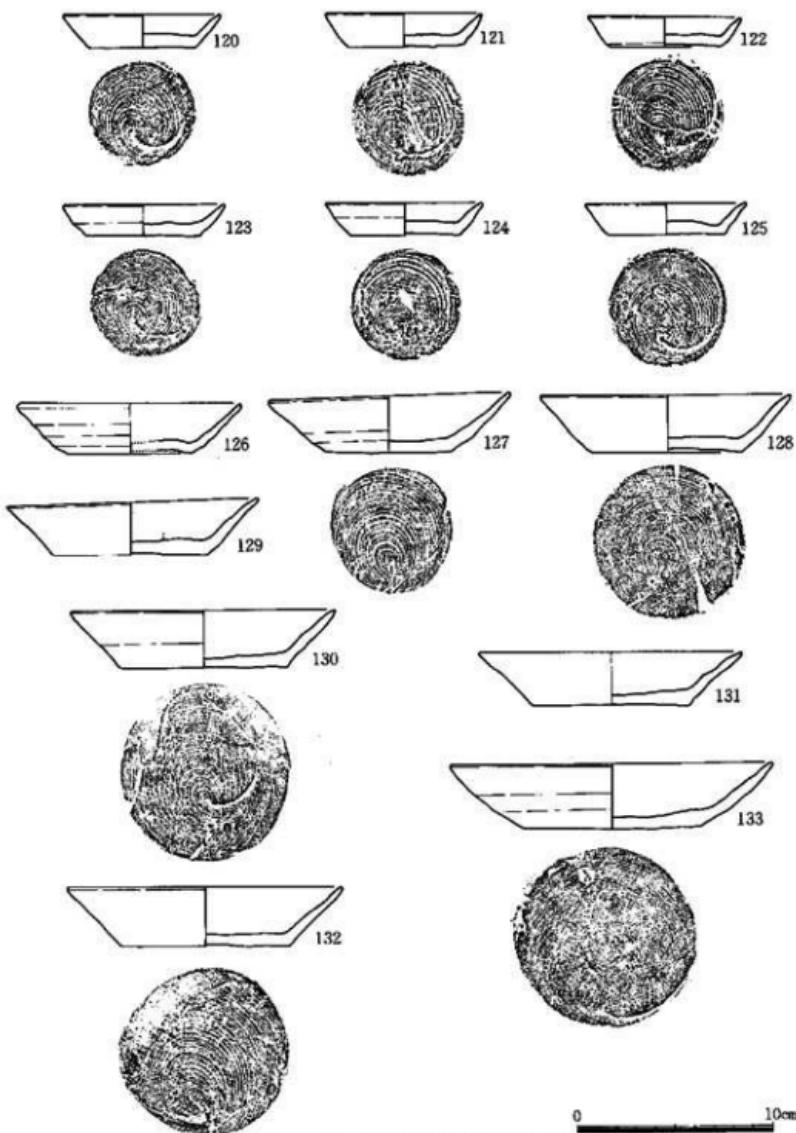


Fig. 41 SG 16出土土器実測図 (縮尺1/3:120~133)

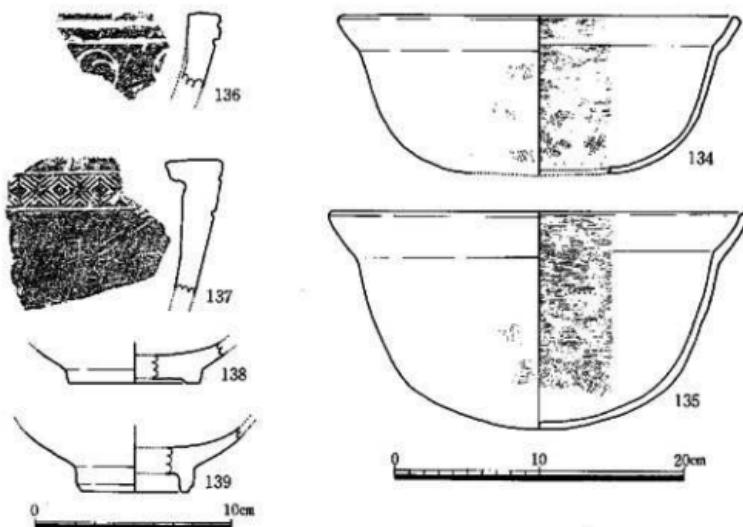


Fig.42 SG16出土磁器・土器実測図 (縮尺1/3:136~139, 1/4:134~135)

る。胎土に金雲母を多く含む。

鍋 (134~135) 134は口径27.9cm、復元器高11cmである。底部は平坦形を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。体部内面は縦方向のハケで調整した後、横方向のハケで仕上げる。体部外面は縦方向のハケで仕上げている。口縁部は、外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケでそれぞれ調整してヨコナデで内外面を仕上げている。外面には煤が1mmの厚さで付着している。135は口径28.9cm、器高15cmである。底部はやや丸味を呈し、口縁部は「く」の字状に外反する。底部内面は縦方向のハケ、体部と口縁部の内面は横方向のハケで調整して仕上げる。体部外面はハケ、口縁部外面はヨコナデで仕上げている。外面には煤が全面に付着する。

擂鉢 底部を中心とする破片が出土しているが全形を知り得ない。胎土は0.5mm~1mmの砂粒を多く含む。体部内面には4本~5本を単位とする条線を刻む。体部外面は縦方向のハケで調整して仕上げている。体部、底部外面には厚く煤が付着し、鉢として用いているものもある。

甕 体部外面はナデ、内面は縦方向のヘラ削りで仕上げている。口縁部は内外面ともヨコナデで調整している。胎土は0.5mm~1mmの長石、石英砂粒を多く含む。

瓦質土器 鉢

鉢 (136~137) 136は口縁部外面に2条の沈線を配し、その下端に二ツ巴文を連続して押印する。137は体部、口縁部外面をヘラ磨きする。口縁部外面に二条の沈線を配し、沈線の間に格子

文を連続して押印する。

磁器 瓢・皿

碗 (138・139) 138は白磁の碗である。胎土は灰白色、釉は緑濁色を呈する。全面に厚く施釉するが、体部外面下端と高台部には施釉しない。139は青磁器の碗である。胎土は灰白色、釉は緑灰色を呈する。全面に厚く施釉し、高台内の底部外面はふき取る。

b. 瓦・埴

黒褐色土層出土瓦

平瓦 粘土板桶巻作りによる。胎土は1mm～2mmの長石、石英砂粒を多く含む。凸面には、繩叩き目が残る。凹面には、布目圧痕とイトキリ痕が残る。側面は分割截面と分割破面とを残し側面調整していない。

SE02出土瓦

丸瓦 玉縁付丸瓦の玉縁部である。粘土板作りによる。内面には布目圧痕が残る。布の経緯は1cm平方で9本～10本を教える。外面には成形時の叩き目がヨコナデ調整で残っていない。側面には分割截面と分割破面とが残り、側面調整はしていない。分割は2分割である。胎土は、0.5mm～1mmの長石、石英砂粒を多く含む。内面に煤が付着している。

SK12出土瓦

平瓦 粘土板桶巻作りによる。胎土は1mm～2mmの長石、石英砂粒を多く含む。凸面には、成形時の繩叩き目を残す。凹面には、粘土板を粘土角材から切り取る痕跡のイトキリ痕と横骨を覆う布目圧痕とが残る。端面はヘラ削り調整している。

柱穴出土瓦

平瓦 粘土板桶巻作りによる。凸面には粗い繩叩き目を残す。内面にはイトキリ痕と布目圧痕とが残る。側面はヘラ削り調整している。

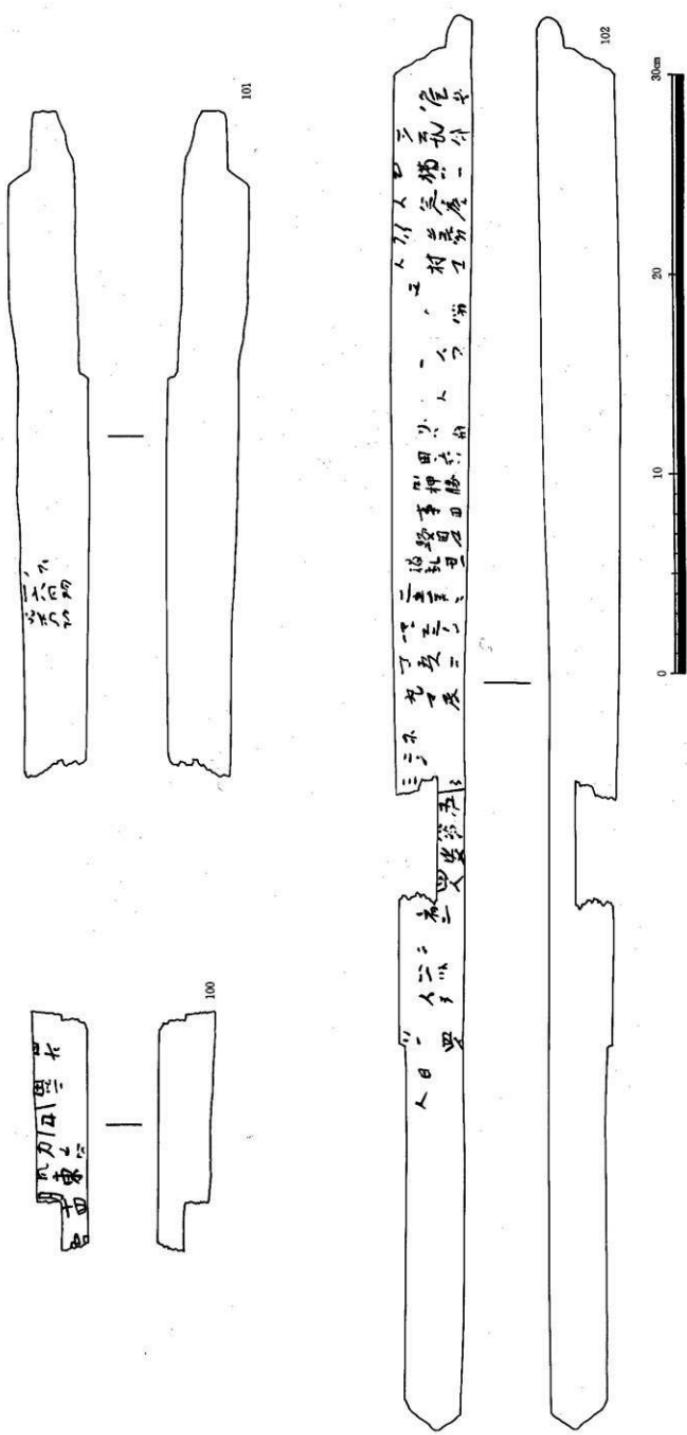
SG19出土瓦・埴

平瓦 池闌削時もしくは以降の混入と思われ、古代の瓦と中世以降の瓦とが混在して出土している。古代の瓦は粘土板桶巻作りにより、凸面に繩叩き目を残す。凹面には布目圧痕とイトキリ痕を残す。側面は未調整で、分割截面と分割破面とを残す。

丸瓦 行基式の丸瓦である。粘土板を模骨に巻き付け、繩叩きで成形している。側面は未調整で、分割截面と分割破面とが残る。内面には布目圧痕が残る。

埴 (140) 池闌削時もしくは以降の混入物と思われる。須恵質の型作りである。胎土は1mm～2mmの長石、石英砂粒を含む。埴の規格は、縦、横の長さは不明、厚さ6.7cmである。上面が摩耗していることから、この埴は実際に使用されている。

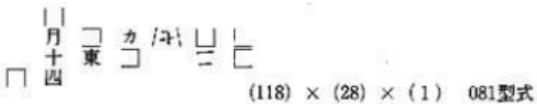
Fig. 48 SE02出土標本測量圖 (縮尺1/2)



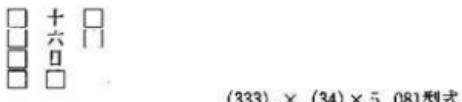
C. 木簡・墨書き札 (卒塔婆・柿絆・笠塔婆)

SE02出土木簡 (Fig.43 図版19)

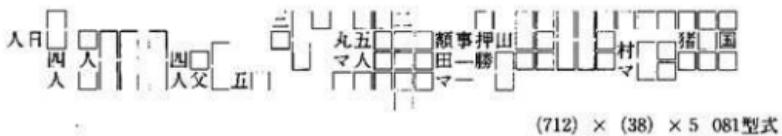
木簡 (100~102) 井戸S E 02枠内の底近くから土器等の奈良時代の遺物と共に3点が出土した。3点とも文書様木簡と思われる。100は左右、上下とも欠損しており、原形は判明しない。残存する部分は上ド1つに割れている。墨書きは片面だけに認められ、板の木目に直交して書かれる。板の中央部に書かれたセを境として文字方向が天地逆となる。叢文は下記の通りである。



101は左右、上下とも欠損しており、原形は判明しない。墨書きは片面の一部に残り、他は削り取られている。板の木目に直交して墨書きしている。残存長が約33cmあることから、巾広の板に書かれていたことが考えられる。叢文は下記の通りである。



102は左右、上下とも欠損しており原形は判明しない。5点の破片からなり、残存長は約71cmを測る。墨書きは片面に書かれているが、一部は削り取られている。板の木目に直交して墨書きしている。このことから木簡の原形は巾広の板と思われる。墨書きからは、「□村部」、「額山部」、「九郎」等の氏名、「□押勝」等の人名、「四人」、「五人」等の人数を記したのが読み取れる。叢文は下記の通りである。



墨書き札

SG16出土卒塔婆 (Fig.44~47 図版 26~28)

卒塔婆 (141~157) 卒塔婆は17点出土している。これらの卒塔婆は、形態からA型とB型とに分類される。A型は板の一端を五輪塔状に刻るものに対して、B型は板の両端を五輪塔状に刻むものである。A型の明確な141、142の他、頭部を欠損して原形が判明しない143~147もA型と思われる。

4. 遺物（木簡・墨書木札類）

141は、長さ71.2cm、最大幅6.2cm、厚さ0.7cmを測り、板の両端は墨書き痕跡とが残る。卒塔婆中央には4ヶ所の木釘が打たれている。これは、墓堂等の施設に打ち付けたものと思われる。卒塔婆の表面には梵字（種子）、経文、戒名、裏面には年紀がそれぞれ下記に示すように書かれている。

	一念弥陀	滅無量罪
(表面)	現受毛比	為右志今日亡者靈位
(裏面)	育長祿參天	生清淨土

梵字（種子）は五輪の水輪部に (キリーク) と書かれている。経文の出典は『観世音菩薩往生淨土縁經』と考えられる。年紀は一部に不鮮明な部分があるものの長祿三年(1459年)であろう。

142は長さ74.5cm、最大幅4.4cm、厚さ0.6cmを測り、下端部は尖っている。板の中央上部に2ヶ所の釘が残る。表面には、下記に示すように梵字（種子）、経文、戒名の墨書きが残る。

	迷	菩薩三業成办	東西
(表面)	□	俗故十方空本來	「歸真道金禪門靈位

□所有南北
同。

梵字（種子）は五輪の風輪部から火輪部にかけて  (パン) と書かれている。経文の出典は「古徳之傳」であろう。

143は頭部を欠損して全形は不明である。残存長97.5cm、最大巾5.3cm、厚さ1.8cmを測る。端部は尖り、削り痕跡を明瞭に残す。板の片面中央には戒名と思われる「弥十良」の墨書きが残る。

144は上部を欠損して全形は知り得ない。残存長40.5cm、最大巾4.3cm、厚さ0.8cmを測る。裏面は巾3.5cm以上、深さ0.4cmの枘溝があり、2ヶ所の木釘が残る。施設の横木に差し込み、木釘で打ち付けたと思われる。下記に示すように表面には経文と戒名、裏面には年紀がそれぞれ墨書きされている。

	願以此功德	消滅無量罪
(表面)	得阿字本性	為三良亡靈位也
(裏面)	育寛正五	可剎大覺位

経文の出典は不明である。年紀は寛正五年(1464年)であろう。

145は上部が欠損し全形は不明である。下端部側縁に方形の刻み込みが残るが、他の板に留めるために設けたものと思われる。

146は上、下とも欠損して全形は不明である。上部に1ヶ所の木釘穴が残る。表面には戒名の墨書き痕跡が残り、「各立禪門靈位」と読み取れる。

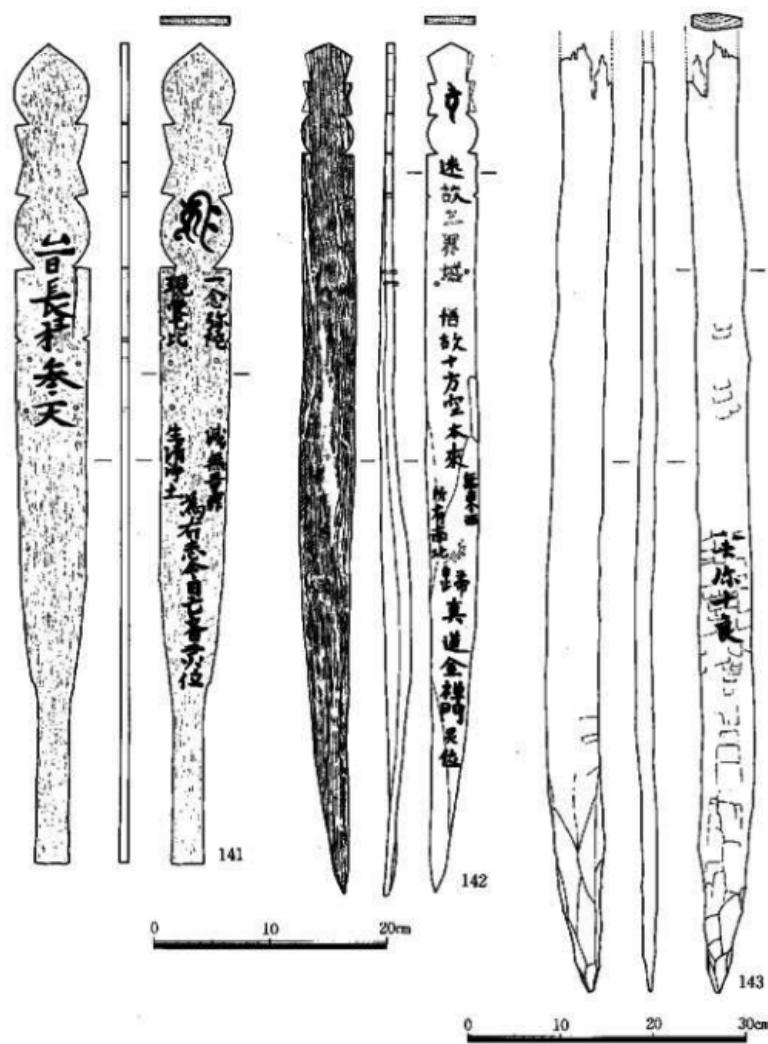


Fig.44 SG 16出土窣堵婆実測図 (縮尺1/5:141~142, 1/6:143)

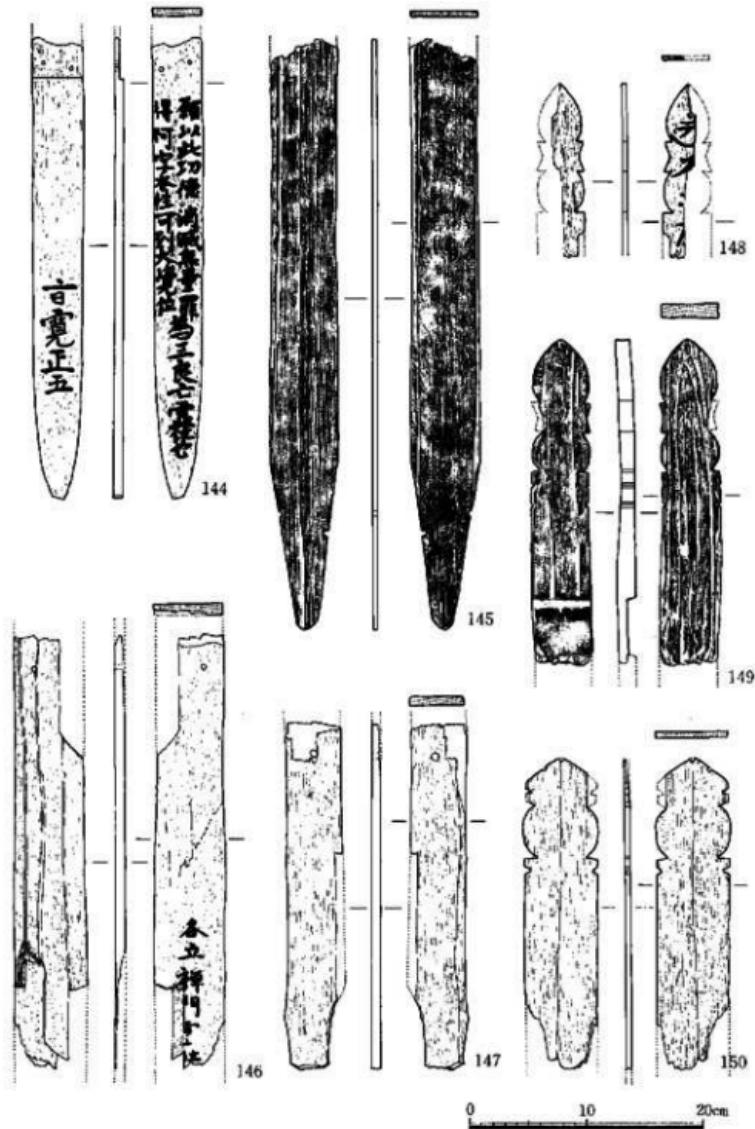


Fig.45 SG16出土李塔婆实物测图 (縮尺1/5)

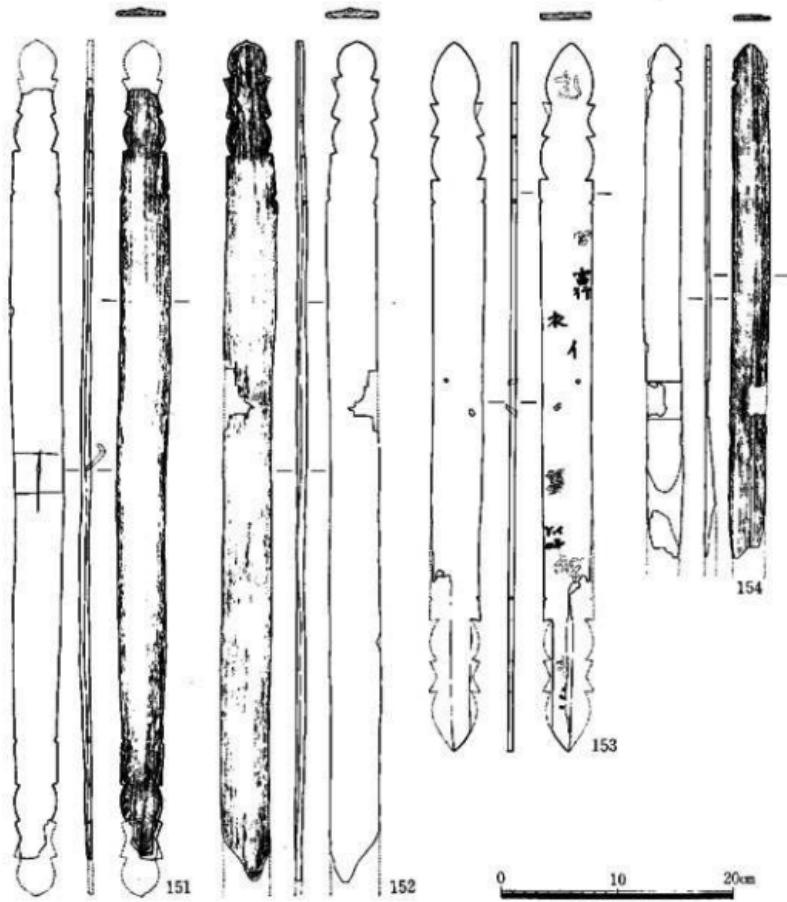


Fig.46 SG16出土半塔婆実測図 (縮尺1/5)

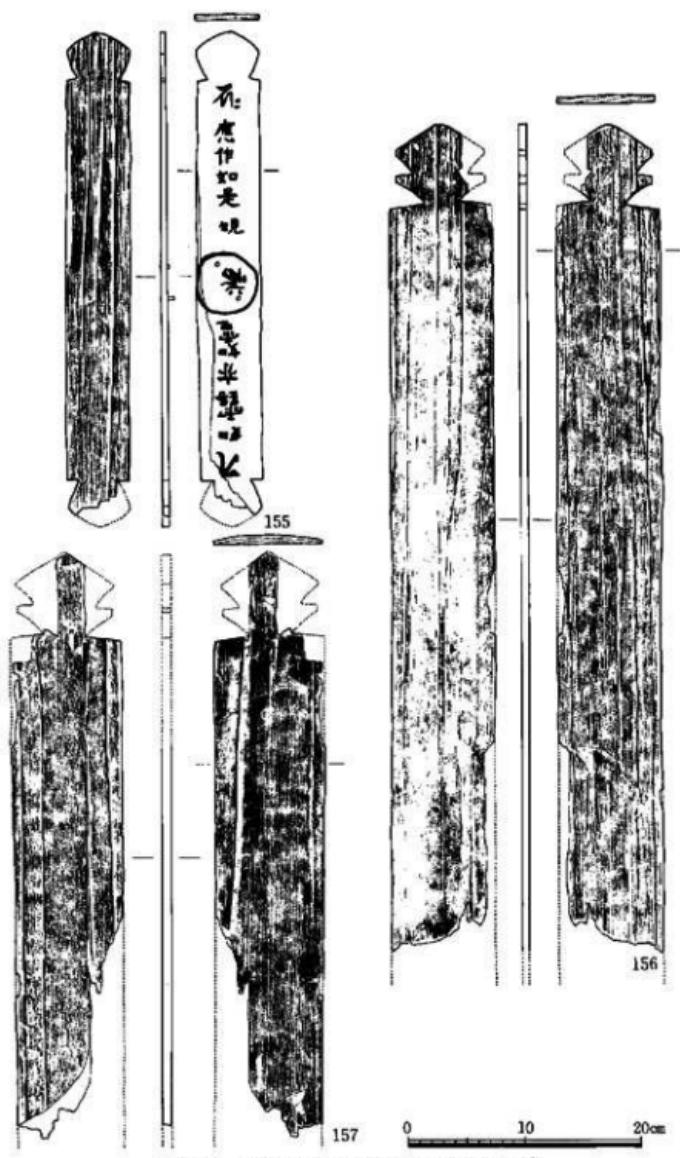


Fig.47 SG16出土窣塲實測圖 (縮尺1/5)

147は上部が欠損して全形は不明である。上端部には木釘穴が残る。

148は五輪部だけである。A型とB型の両方の可能性を持つ。片面に梵字が墨書きされているが不明である。

149は下部を欠損して全形は不明である。A型の可能性が強い。裏面の下端部には巾14.8cm、深さ0.8cmの柄溝がある。木釘穴は認められない。

150は下部を欠損して全形は不明である。五輪は空、風、火、地輪部が簡略化されている。両面に墨書きは残らない。B型の可能性が強い。

151はB型の代表的な卒塔婆である。裏面の中央部にL字状の金具が刺さっている。この金具を中心に上、下3.4cmの巾で木肌の色が他の部位と異なる。横木に留めていたものと思われる。

152は下端部を欠損するがB型の可能性が強い。両面ともに墨書きは残っていない。

153はB型で、中央部に2ヶ所の木釘が残る。木釘は斜めに打ち込んでいる。表面には梵字(種子)と経文の墨書きが部分的に残る。両方の五輪部に梵字(種子)を書き、中央部へ向って経文を書いている。そのため、墨書き方向は木釘の残る中央部を境として逆になる。梵字(種子)は不明、経文は「富行」、「衣」、「如以」、「露」が読み取れる。

154は下端部を欠損するがB型の可能性が強い。端部は五端を簡略化している。中央部には巾3.6cmの浅い柄溝がある。横木に留めたものであろう。両面とも墨書きは残っていない。

155はB型で残存長41cm、巾5.6cm、厚さ0.6cmを測る。両端部は宝珠形を成す。表面の中央部には、直径5.1cmの円が墨書きされ、その円内に梵字(種子)が書かれ、木釘が2ヶ所打ち込まれている。表面には下記に示すように梵字(種子)と経文とが墨書きされているが、中央部の梵字(種子)を境にして文字方向が逆になっている。



書かれている梵字は**प**(パク)、**क**(カ)、**कीर**(キリーク)である。文字方向から考えると他の卒塔婆が天地方向に板を立て、施設なりの横木に木釘で留めているのに対して、155は卒塔婆を横位状にして他の横木に留めている。

156は下部を欠損するがB型と思われる。残存長71.1cm、巾9cm、厚さ0.7cmを測る。端部は五輪の空、風、火輪を簡略化して刻む。両面には墨書きは残っていない。

157も下部を欠損するがB型で、156と同様の端部形態を呈していると思われる。残存長49.2cm、巾9.4cm、厚さ0.8cmを測る。表、裏面ともに墨書きは残っていない。

SG16出土の柿経 (Fig.56 卷頭図版1・2 図版33~103)

柿経 破片点数は4200を数える。接合するものが多く、実数としてはかなり少なくなる。詳細な説明は別冊に記し、ここでは出土状況を述べる。柿経はFig.25に示す様に、SG16検出面下2.4mにおいて一ヶ所に集積した状態で出土した。集積の範囲は狭く、密である。柿経の出土し

高は、卒塔婆等と同じくする。

SB16出土筆塔婆 (Fig.59 図版104)

筆塔婆 2本出土している。形態は柿絆と同じである。柿絆が集積した中に含まれて出土している。内容等については別骨で説明する。

d. 木 器

SG16出土木器 (Fig.48・49 図版29~31) 梱・曲物・容器・下駄・陽型木製品・加工棒
梱 (158・159) 158は口径14.4cm、器高3.9cmの木製梱である。木地はロクロビキ成形である。器全面に黒漆を施した後、赤漆で彩色して仕上げる。159は口径16.5cm、高台径6.5cm、器高7cmの木製梱である。木地はロクロビキ成形である。器全体に黒漆を塗った後、さらに赤漆で彩色して仕上げる。

曲物 (160~164) 160~163は底板である。160は直径21cmの円形の底板の一部で、側面には側板と接合した際の木釘が残る。底板を構成する板の接合はダボでしている。161は小判型の底板の一部である。側板との接合は樹皮で留めていたらしく、板の縁部を穿孔している。162は直径30cmの円形底板の一部である。板の縁部を穿孔していることから、側板との接合は樹皮で留めていたと思われる。163は直径31cmの円形の底板である。底板は4枚から成り、板の接合はダボしている。側縁には穿孔が残り、側板との接合方法が樹皮を用いて留めていることを示す。164は一部欠損しているが、直径27cm、高さ12cmの曲物の側板である。杉の薄板をU形に曲げ、2ヶ所を樹皮で留めている。側板内面には、木目に直交する切り込みを入れている。これは板を曲げるのを容易にするためと思われる。

木製容器 (165) 165は口径36cm、底径24cm、器高7.5cmを測る。器面には削り痕が明瞭に残り、この容器が手彫りであることを示す。

下駄 (166~168) 166は差歎下駄である。台部後部を欠失して全形は知り得ない。前歎は磨滅が激しく、歎としての機能を果しているとは言えない。前部鼻緒孔は中央部に径0.8cmで垂直、後部鼻緒孔は内側に傾斜してそれぞれ穿孔している。167は台部の長さ19cm、幅18.8cmの差歎下駄である。台部しか遺存していない。前部鼻緒孔は中央部に径0.7cmで垂直、後部鼻緒孔は内側に傾斜してそれぞれ穿孔している。歎を差し込む溝部に方3mm径の穴が残る。この穿は台部と歎部を留めた木釘もしくは釘穴であろう。釘を用いた接合が下駄製作時のものか、以降の補修時のものかは不明である。前部鼻緒孔の左に凹みが認められることから、167は専ら右足で履いている。168は差歎下駄である。台部後部、歎部を欠失して全形は判明しない。前部鼻緒孔は中央より左に寄って垂直に、後部鼻緒孔は内側に傾斜してそれぞれ穿孔している。歎の歎を差し込む溝には5ヶ所の穿孔が認められる。この孔は台部と歎部とを留めた木釘もしくは金釘の穴であろう。釘による接合が下駄製作時のものか、以降の補修時のものかは不明である。

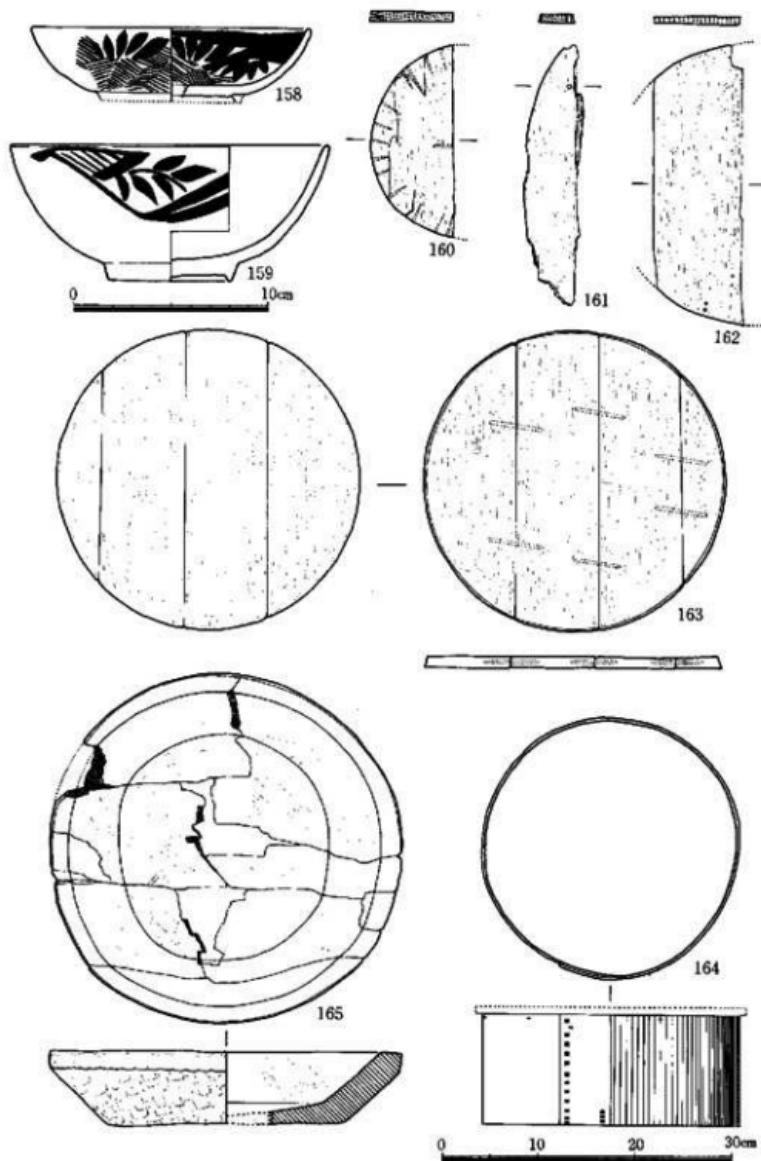


Fig.48 SG16出土木製品実測図 (縮尺1/3:158~159, 1/6:160~165)

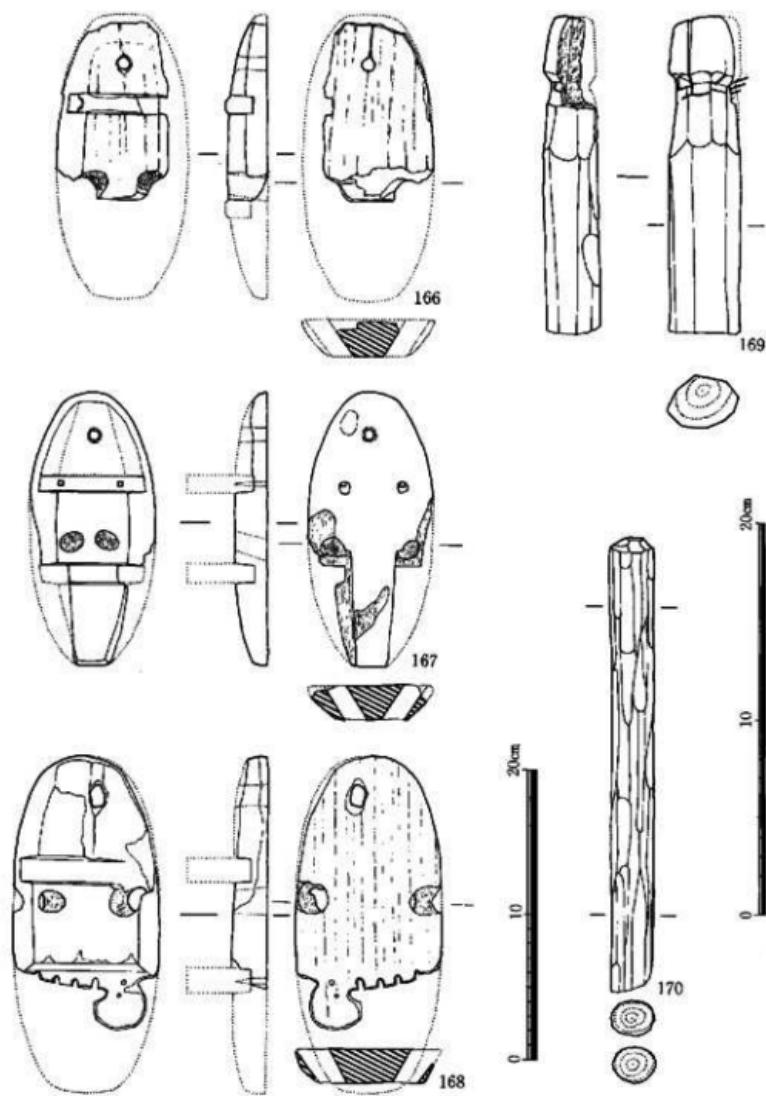


Fig.49 SG16出土木製品実測図（縮尺1/4:166~168, 1/3:169~170）

陽型木製品（169）頭部の一部と下部を欠失している。残存長16.3cm、胸部巾3.6cmを測る。頭部と胴部との境は切り込みで明確にする。胴部表面は面取りしている。

棒状木製品（170）一方の端部を欠失して全形は知り得ない。残存長23.7cm、径2.2cmを測る。表面は細かい面取りしている。用途は不明である。

e. その他の遺物

石器・石製品 (Fig.40・50～53 図版15・16・23・25)

黒褐色土層出土石器 (28～34) 28、25は黒曜石の未完製品の薄片と思われる。29は縁にリタッヂが残る。30は黒曜石の石鎌である。31はサヌカイト石製のいわゆるクワガタ石鎌である。32はサヌカイト石の石鎌である。31は縄文時代草期、28～30は縄文時代、32は弥生時代のものであろう。33～34は石包丁の破片で全形を知り得ない。34は緑泥変岩を材料とする。

SC03・04出土石製品 (35・44～52) 基石程の大きさの石である。いづれも表面は磨滅している。用途は不明であるが、SC04では床面直上の狭い範囲に集中して出土している点から考へると何らかの形で生活で用いられていたと思われる。

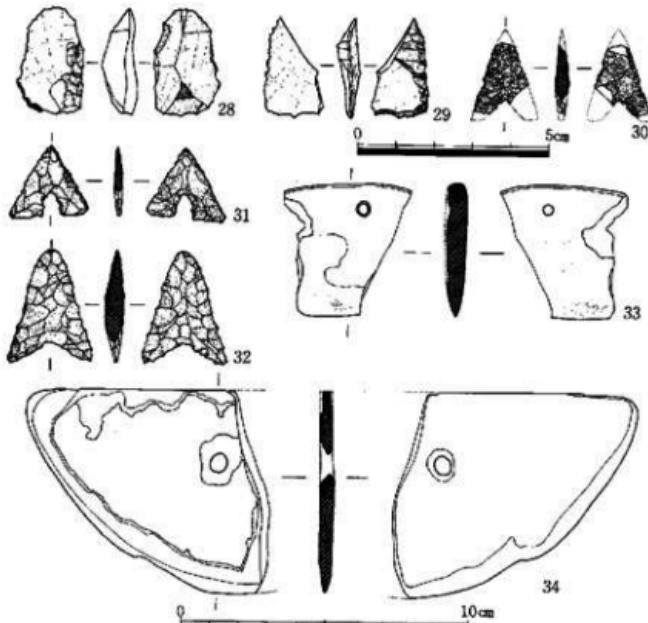


Fig.50 黒褐色土層出土石器実測図 (縮尺2/3:28～32, 1/2:33～34)

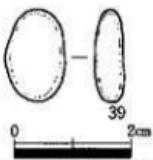


Fig.51 SC 03出土丸石実測図（縮尺1/1）

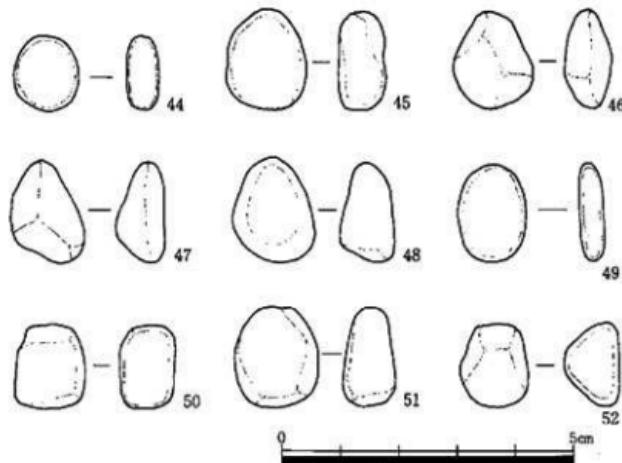


Fig.52 SC 04出土丸石実測図（縮尺1/1）

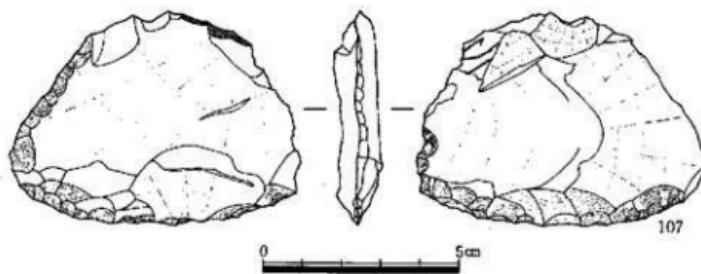


Fig.53 SK 18出土石器実測図（縮尺2/3）

4. 遺物（その他の遺物）

SK18出土石器（107） サスカイトのスグレイバーである。縁部のリタッヂは粗い。

SD93出土石器（172） 口径22cmの滑石製の石鍋である。体部、底部は欠失して全形は不明である。外面には成形、調整時の削り痕跡が明瞭に残る。内側には削り痕跡は残っていない。

銅錢 (Fig.54・図版25)

SD93出土銅錢

銅錢（173～176）4点とも遺存状態は良好。174～176は重なって出土している。173は「開元通寶」、174は「景祐元寶」、175は「皇宋通寶」、176は「政和通寶」である。

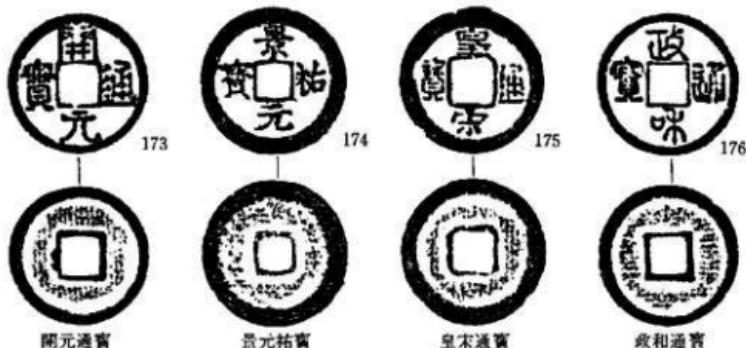


Fig.54 SD93出土銅錢拓影（縮尺1/1）

註

1. 「海の中道遺跡」でいう製塙土器Ⅱ類である。
2. 註1と同じ。
3. 註1と同じ。
4. 註1と同じ。
5. 註1と同じ。
6. 紙などが考えられる。
7. ここでいう墨書とは、板に書いた文字等の墨が残っている場合をいう。
8. ここでいう墨書痕跡とは、板に書いた文字等の墨が残っていないものの、墨に含まれるごく微量の作用によって墨書部分が風化せず、風化した墨以外の部分に比べて墨書部分が凸の状態を呈して墨書の痕跡が明確な場合をいう。
9. たとえば、奈良市の西大寺奥院の骨堂の場合は、2間×2間の建物（骨堂）に卒塔婆を打ち付けている。
10. 川勝攻入部「鬼頭」古叢社 1984 76P
11. 註4と同じ 137P

第四章 まとめ

本調査で確認した遺構は、大きく三時期に分かれる。奈良時代中期～平安時代前期の掘立柱建物、井戸を中心とする集落、鎌倉時代の土塙基、室町時代の池、水田の三時期である。本章では、この三時期に分かれる遺跡の変遷を中心に成果をまとめるとともに問題点を取り上げ、今後の周辺地域における調査研究を進める上での手掛りとしたい。

奈良時代以前の成果と問題点

本調査では縄文時代前期～古墳時代の石器、土器が少量出土しているが、遺物と直接結びつく遺構は検出していない。遺物は調査地外からの流入と考えられる。しかし1次調査においても先土器時代～古墳時代の遺物が出土していることから、本遺跡の近傍に奈良時代以前の遺構が存在している可能性は強いといえる。

奈良時代～平安時代における成果と問題点

本調査で検出した奈良時代～平安時代の遺構は、掘立柱建物2棟、竪穴住居4棟、井戸2基、土塙6基、溝5条、柱穴多数である。これらの遺構は1次調査で検出した8世紀前半～9世紀後半の掘立柱建物を中心とする集落の北部を構成するものである。本調査では微高地の北と遺構の北限範囲とが合致することから、集落は1次調査地から本調査地にかけて広がる微高地上において営まれていることが判明した。さらにこの集落が営まれていた微高地は、今調査地の中央部を北限とし、東方へ広がっていることも周辺の立会調査等で明らかになっている。

調査地周辺は、平安時代の早い時期に大規模な削平を受けているようである。これは遺構の遺存程度、微高地が北へ下る斜面上に厚く堆積した包含層等の状況等から推察される。この削工事は、調査地周辺における耕作地の整備、整備に深く関係するものと考えられる。

本調査では4棟の竪穴住居を検出したが、遺構の切り合い関係から、竪穴住居は掘立柱建物と併存している。柱穴は4棟とも床面において認められない。建物の構造など不明な点が多い。

木簡の出土したSE02の造営期間は、共伴して出土した土器から、8世紀前期～後期であろう。木簡は文書様木簡で、その内容は記録に類すると考えられる。井戸枠材に用いられた柱、板は、建築部材から転用している。井戸枠の構造、材はSE02が当時の庶民層の構成する集落等に伴う井戸とは大いに異なることを明示している。さらに、井戸内より木簡、墨書き土器、塙臺が出土しているが、これら遺物の出土例を他の遺跡に求めると、その大半は公的施設に限定されて出土している。このように、遺物の面からもSE02はもちろん、井戸と構成を成す1次調査で検出した掘立柱建物群が公的施設であることも強く裏付けている。

掘立柱建物、竪穴住居、井戸、溝等で構成される当遺跡の公的施設は、遅くとも平安時代中期頃（11世紀）にはその姿が調査地から消え去っているようである。この公的施設の消滅は、施

設の持つ性格、機能に起因するものと考えている。すなわち、これまで公的施設を成立させていた要因が、時間の経過（社会変化）の中で必要としなくなったのではないかと推察するのである。この公的施設の性格、機能を明らかにするためには当調査に所在するのが、政策上の地理的位置の問題なのか、もしくは施設（機関）の存在そのものが問題なのかを判明させる必要がある。

当遺跡を考えていく上で仲島遺跡との関係が問題となる。本書の第二章2で述べたように、仲島遺跡では奈良時代の遺構が確認されている。この遺構の井戸枠の構造、材が一般的集落に伴うものではない点や、墨書き土器、人面墨書き土器が出土している点などから、仲島遺跡が公的施設であることは確実であろう。仲島遺跡の奈良時代の井戸の造営期が8世紀前半～後半であることから、井相田C遺跡と仲島遺跡の二つの公的施設は8世紀代に併存していることになる。仲島遺跡と井相田C遺跡との区分は、先に述べたように両遺跡の間に存在する谷部による。しかし、この谷部が奈良時代においても存在するかは確認されていない。このことから、奈良時代における仲島遺跡と井相田C遺跡は一つの公的施設を構成していたと言えよう。この公的施設の範囲は現状で、東西約360m南北約150mを測るが、この数値はあくまでもこれまでに検出した遺構を中心に出したもので確定しない。今後の調査においては、この施設を区画する溝を含む範囲の確定を始めとして公的施設の内容を明らかにするために、当調査地周辺での慎重な文化財調査が望まれる。また、当調査地を含む井相田C遺跡と仲島遺跡とが一つの遺跡を構成していることが判明したので、統一した遺跡名を付ける必要があろう。

鎌倉時代の成果と問題点

鎌倉時代の遺構は、12世紀末～13世紀初頭に比定される青磁碗を出土したSK06の土壙墓が1基である。

平安時代に耕地に変わったと推定される鎌倉時代における調査地の姿は、耕地が広がっていたと思われる。ただ、13世紀初頭～15世紀初頭の間に、最低1回は調査地周辺において大規模な地下げが行われていることは土壙墓SK06の遺存度とSC16の関係から明らかである。土壙墓の遺存度から考えると鎌倉時代の地表面は、遺構検出面より0.5m～0.8m高い、標高11.7m～12mが復元されている。このことから、今調査における本来は土壙墓は1基しか遺存していないが、数基の土壙墓や他の遺構が存在していたと思われる。

鎌倉時代の問題として、大規模に行われた地下げがある。本調査地の東約700mには御笠川が蛇行して北流している。この川は中世においてもたびたび氾濫しているようである。本調査区でも東部に広がる水田面に粗砂が数cmの層厚で堆積し、粗砂は標高が低くなる北の水田面ほど層厚になっている。調査区内で最も北に位置する水田の標高が約11mを測り、鎌倉時代の推定地表面とは0.7m～1mの比高差がある。本来、頻繁に氾濫を受ける地域では、その被害を少なくするために、水田耕作面の標高を高くする地上げを行うのが一般的である。しかしながら本

調査地においては、推定0.7m～1mの地下げを行っている。地下げを行えば、御笠川の氾濫をこれまで以上に受けたのを認識しつつも、大規模な地下げを行わなければならなかつた要因は何であったのであろうか。要因の一つに、水田への水の問題が考えられる。地下げ当時の御笠川の位置、水量、水面高等は、現在では知る由もないが、水田面より低位に位置していたと考えられる。そのために水田へ十分な水が引けず、水田耕作に支障を来たしていたものと思われる。大規模な地下げは、この支障を取り除くために行われたと考える。

室町時代の成果と問題点

本調査では、室町時代の遺構は池、溝、水田である。室町後期における調査地の鳥瞰図は、池を取り囲んで水田が広がり、その西には蛇行する川が流れるといったものであらうか。調査地は平安時代後半期までには形成された水田が途中でその形を変えつつも、戦前まで永々と続いている。

今調査で検出した水田の年代を室町時代としたが、その根拠にたりる確実な資料が出土しているわけではない。SG16を覆う上層との関係から、室町時代後半期には確実に水田耕作が営まれている。さらに、水田耕土中から13世紀～18世紀の遺物が少量出土していることから、今調査で検出した水田は、遅くとも鎌倉時代前半期には耕作は始まっているようである。

SG16は御笠川から近距離にありながらも、水田と川との比高差から十分な水を田へ入れることができない調査地周辺における水田の状態を解決するために作られたものであろう。このSG16は、池と言っても雨水等を溜める一般的なものではなく、御笠川から砂層を伝わって流れる地下水を汲み取るためのものである。すなわちSG16は機能的には灌漑用の池であるが、水を得る手段の観点からは素掘りの大井戸であると言える。上層の厚いシルト層を掘り抜き、下層の粗砂まで掘り上げて作っているSG16の湧水量は多く、調査時には大型排水ポンプを常時稼動させることで池の湧水を排水できたほどである。調査時が渇水期であったことを加味すれば、SG16湧水量は周辺地域の水田を潤すのに十分であったと推定される。SG16の開削時期は不明であるが、埋土中の遺物等から近世初期には埋められているようである。池を必要としなくなつた要因は、池に替わる灌漑施設が出現したためであろう。

SG16からは、墨書き木札類、人骨、土器等の庶民信仰資料が出土している。これらの資料は、池埋土の黒灰色粘質土層より出土していることから、時間的にはほぼ同じくして池に投げ入れられたものであろう。墨書き木札は卒塔婆、柿経、兼塔婆である。

卒塔婆は形態からA型とB型に分類されるが、大半の卒塔婆には木釘、金釘が残っていることから、墓堂等に打ち付けていたものであろう。卒塔婆の裏面に長禄三年（1459）、寛正五年（1464）の年記が残るものが出されている。

柿経は、経文が重複する柿経は認められないことや、1ヶ所に集積した状態で出土していることから、法華経八巻から成る一束のものであることが判った。一束の本数は2,141本からなり、

第四章 まとめ

直径22cmを測る竹製のタガをはめ、池へ投げ入れている。

卒塔婆・柿経は、仏教信仰の供養形態の一つである先亡・追善供養で使用（作成）されたものであろう。供養を終えた後は、寺や墓堂等の施設に卒塔婆は打ち付け、柿経は奉納している。卒塔婆に残る木釘や表面が風化して収縮した状態は、正しくこの仏教上の作法を15世紀中頃の井相田周辺に住む人々が行なっていたことを裏付けるものである。供養後に寺や墓堂に納めた卒塔婆や柿経が池中より出土したのは、宗教的理由ではなく、単に時間的経過によって奉納する寺や墓堂に奉納する場所の余裕が無くなり、以前に打ち付けられたり奉納された卒塔婆や柿経を整理（取り除き）して、池へ投げ入れたためと考えている。卒塔が折れた状態、特に卒塔婆が墓室の横木に木釘で打ち付けている部分で折れて出土していることから、卒塔婆を取り外すのは割と難になっていたようである。また、この整理（取り外し）は、最低5年以上の期間を経て行なわれているようである。と言うのも、同じ埋土層から年代の異なる卒塔婆（長禄三年・寛正五年）が出土しているからである。柿経が奉納された時期は15世紀中頃を下限とするが、上限は明らかでない。柿経は年紀の有する卒塔婆と共に併せて出土したが、これは池への投げ入れの同時性を示しているにすぎず、奉納の同時性は示していない。柿経の時期を推定する材料の一つに柿経の書写方法があるが、これらは今後の研究課題としたい。

墨書き札と共に、完形の土師器（壺・皿）がまとまって出土している。これらの土器は卒塔婆や柿経、人骨等を池へ投げ入れる前に行なったであろう儀式に用いられ、その後に墨書き札等と一緒に池へ投げ入れられたものと考えている。年紀の残る卒塔婆の傷みが少ないとから、土師器の皿、壺は15世紀後半に比定されよう。SG16への奉納品の投げ入れ（整理）は、土師器の製作技法や遺物の出土状況から、15世紀後半の一時しか行なわれなかつたようである。

今回の井相田C遺跡（仲島遺跡群）の第2次調査では、奈良時代の公的施設の存在を明らかにするとともに、室町後代の庶民信仰、特に農村地域における庶民信仰の一端を明らかにした。しかし、公的施設の職掌を始めとする具体的な施設名や、墨書き札を奉納した寺、墓堂等を特定することはできなかった。これらも含め、多くの問題点の解明は、今後の周辺地域における調査に託したい。

註

1. 法華經八巻を両面写経した場合は2084本になる。本遺物の本数が多いのは、一部に片面写経を行なっているからである。
2. 卒塔婆の実例としては奈良市に所在する四大寺奥院の骨堂がある。柿経の実例としては、奈良市に所在する元興寺極楽坊に求められる。
3. 1450年を前後する頃、柿経の書写方法が、両面写経から片面写経に変わることが発表されている。（『日本仏教民俗基礎資料集成』 第6巻 22P下段104～186）

第四章　まとめ

井相田C遺跡周辺主要調査遺跡報告書

- 大野城市教育委員会 「仲島遺跡I」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第3集 1980年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡II」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第6集 1981年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡III」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第10集 1983年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡IV」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第12集 1984年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡V」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第17集 1986年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡VI」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第20集 1987年
福岡市教育委員会 「板付遺跡調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集 1967年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集 1974年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集 1974年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集 1976年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 1977年
福岡市教育委員会 「板付 县道305号線新設改良に伴う発掘調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集 1977年
福岡市教育委員会 「板付 县道503号線新設改良に伴う発掘調査報告書(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第48集 1978年
福岡市教育委員会 「板付 道跡調査概報 板付周辺遺跡調査報告書(5)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集 1977~1978年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(6)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集 1980年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(7)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集 1981年
福岡市教育委員会 「三浜遺跡・次郎丸高石遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981年
福岡市教育委員会 「那珂深ツヤ遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集 1981年
福岡市教育委員会 「板付 板付城建設に伴う発掘調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集 1981年
福岡市教育委員会 「那珂深ツヤ遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集 1982年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(8)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集 1982年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(9)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集 1983年
福岡市教育委員会 「東野下古賀遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第107集 1984年
福岡市教育委員会 「諸河遺跡 第14・17次調査報告一」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(10)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集 1985年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(11)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集 1986年
福岡市教育委員会 「那珂八幡古墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集 1986年
福岡市教育委員会 「井相田C遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第152集 1987年
福岡市教育委員会 「那珂遺跡－那珂遺跡第8次調査の報告一」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集 1987年

第四章　まとめ

- 福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集 1987年
福岡市教育委員会 「公民宿題調査係埋蔵文化財調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集 1987年
福岡市教育委員会 「那珂久平遺跡Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集 1987年
福岡市教育委員会 「麦野B遺跡群－第1次調査－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第164集 1987年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡調査報告書(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第171集 1987年

参考文献

- 紫田實他 「日本仏教民俗基礎資料集成」第六巻 中央公論美術社 1973年
竹内理三 「莊園分布図 下巻」 古川弘文館 1976年
福岡県教育委員会 「筑紫郡太宰府町所在御立川南条坊遺跡(4)」「福岡南バイパス開発 埋蔵文化財調査報告 第8集」
1978年 1978年
狩野久 「木簡」「日本の美術」第160号 平文堂 1979年
大庭裕 「木簡」 学生社 1979年
小松茂美他 「移児渡者跡起」「日本繪卷大成24」 中央公論社 1979年
川野敏太郎 「梵字講話」 河原書店 1980年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡Ⅰ」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第3集 1980年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡Ⅱ」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第6集 1981年
九州歴史資料館 「太宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報」 1981年
九州歴史資料館 「太宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報」 1982年
奥野義雄 「古代中世の逆修について－逆修からみた中世民衆文化的創造によせて－」『研究紀要』第6号 奈良県立民
俗博物館 1982年
福岡市教育委員会 「海の中道遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集 1982年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡Ⅲ」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第10集 1983年
福岡市教育委員会 「板付周辺遺跡報告書(9)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集 1983年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡Ⅳ」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第12集 1984年
福岡市教育委員会 「福岡市高速鉄道開係埋蔵文化財調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 1984年
奥野義雄 「中世逆修法にみる柿経の存在形態について－もう一つの柿経の存在を中心に－」『研究紀要』第8号 奈良
県立民俗博物館 1984年
歴史考古学会版 「便額」 言文社 1984年
大野城市教育委員会 「仲島遺跡Ⅴ」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第17集 1986年
大野城市教育委員会 「仲島跡Ⅵ」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第20集 1987年
木簡学会 「木簡研究」第9号 1987年
福岡市教育委員会 「井相田C遺跡Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第152集 1987年

福岡市井相田C遺跡出土の中世人骨

九州大学医学部解剖第二講座
中橋 孝博、永井 昌文

はじめに

井相田遺跡は福岡市南東部、御笠川左岸の沖積地に見出された遺跡で（博多区井相田2丁目）1985年7月から翌年1月にかけて、中学校建設に伴なう発掘調査が実施された。その結果、弥生時代中期から中世にいたる遺物、遺構が出土し、室町時代の池のあとからは人骨2体が検出された。保存状態が悪く、その形質的特性は知り得なかったが、いくつか興味ある所見が認められたので以下にその結果を報告する。

1. 検出状況

周辺に広がる中世の水田址の中に、東西約18m、南北約33mの池が見出され、その底部にある位置から幾つかの破片となった人骨が検出された。近接して、柿絆、卒塔婆、漆器椀、青磁碗等が出土している。墓壙は認められず、他の遺物同様、池に投げこまれたものか、もしくは流れ込んだ遺体と考えられている。

2. 所属時代

伴出した卒塔婆に「長禄3年（1459年）、寛正5年（1464年）」等の年分が書かれていたこと等から、池が掘られたのはほぼ15世紀半ば頃か、それをやや遅る時期と推定されており、人骨もそれに対応した時代、即ち室町時代所属のものと考えられている。

3. 人骨所見

保存状態

径5~6mの範囲内から数個の破片として取上げられたが、整理の結果、以下に示すように成人と幼児の2体分の頭蓋骨であることが判明した。このうち、成人骨について、その遺存部位をFig.55に示した。かなりの欠落部があるが、ほとんどが頭蓋冠の破片であり、顎面部にわずかに左頬骨の一部を残して消失している。

小兒骨は前頭骨、左側頭骨、及び下頸骨が遺存しており、歯も数片認められた。

いずれも歪み、変形が著しく、内板の剝離も各所にみられ、復原は不可能であった。また、成人、小兒とも、頭蓋片のみで、体部骨は一片も見出し得なかった。

所見

A. 成人骨（成年、女性）

眉弓部の発達はやや弱く、前頭骨の頬骨突起は細く下垂している。頬骨の前頭突起も非常に細い。外後頬隆起の発達は比較的良好だが、側頭線の粗粒度、乳様突起の発達は共に弱く、上記各部で得られた計画値(Nakahashi and Nagai, 1986)からも、女性である可能性が示唆された。

また、矢状縫合の内板に一部癒合が認められるが、他の観察可能な縫合（ラムダ縫合の全域と冠状縫合の左半）は内、外板とも開離しており、まだ熟年には達しない、成年人骨と考えられる。

特記所見：上記のように歪みが強く、欠損部も多いので復原後の計測は不可能であり、その形態上の特徴は窺い得なかったが、図に

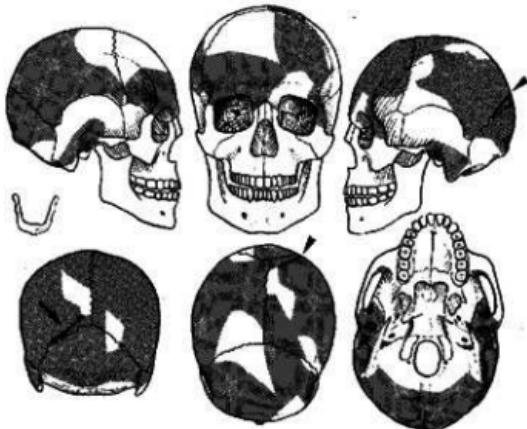


Fig. 55 SG16出土頭蓋骨図

も示したように、左頭頂骨の後端部、ラムダ縫合の左半部にそって直線状の切れ込みが見出された。遺存している部分でみると、切れ込みはラムダより前方14mm、矢状縫合の左側8mmの位置から、直線的に40mm余り左側後下方へと走り、ラムダから39mmのラムダ縫合上に至っている。その遊離片の断面観察において、内板の剝離等により一部は不整な破断面を見せているが、全体的に切断面は平滑でかつ直線的であり、頭蓋外表面との境も明瞭な稜線をなしている。発掘時につけられた損傷等によてもこれに類似した状況がみられることがあるが、断面部の色調や、その縁がわずかながら摩耗していることから、かなり古い傷であることが窺え、何か鋭利な刃物による斬創と疑わせるものである。頭蓋片上での所見なので、いわゆる創面角（切断面が耳眼水平面となす角、鈴木、1956）は不明だが、頭蓋上面観における正中矢状線と切断面とのなす角（創線角）は約40度で、創面は少くとも板間層までは達している（内板の辺縁は破損、剥離のため、刃面が頭蓋内腔にまで達していたか否かは不明）ことが確認できる。

B. 幼児骨（4～5歳）

成人骨同様、頭蓋片のみであるが、下記のような歯の萌出状況、咬耗度から4～5歳の幼児骨とみなされる。

$$\begin{array}{c} / / / / \quad \frac{\text{+}}{\text{-}} / \text{e} / / \\ \hline \text{m m}^1 \text{○○○} \quad \text{○○○△m}^1 \end{array}$$

（○：歯槽開放、/：欠損、△：歯根のみ、●：遊離歯）

以上、井相田遺跡出土の人骨は、成年女性と4～5歳の幼児の組合せとなり、いずれもが頭蓋骨片のみで、しかも女性人骨の後頭部には斬創が見出されるなど、やや特異な状況がみられ

た。どのような過程を経てこの2個の頭骨が池の底に沈められるに至ったのか、たまたま他所の埋葬墓から掘出されたものが池にすてられたにすぎないのか、それとも首を切られた状態で投込まれたものなのか、あるいはまた、単なる偶然でどこからか流れ込んだものなのか、骨の保存状態が悪いこともあるって、いずれとも断定し難い。最初にあげた事例なら、後頭部の斬創は刀ではなく、他の鎌、鍔等でつけられたものである可能性も出てこようし、次の斬首の事例ならば、この傷痕は誤って後頭部に切りつけた痕ということにもなろう。しかしながら、普通、斬首の場合は、上位の頸椎が頭骨と共に見出される筈であり、この場合のように、頭骨のみという点は斬首の事例としてもやや不自然である。骨の不良な保存状態からすればそうした小骨は地中に腐朽し去ったのかもしれないが、ただいずれにしても地中の頭蓋に鎌等があつた場合、余程その刃先が研ぎすまされたものでない限りは、このような切れ込みではなく割れてしまう可能性が強いので、斬首の折についたものはともかくも、どちらかというとやはり刃のような特に鋭利な刃物でつけられた斬創とするのが妥当かと考える。

このような斬創の事例としては、鈴木（1956）による鎌倉材木座人骨や、池田（1979）らの京都市烏丸出土のものなど、いずれも中世人骨に多くの事例が報告されている。当人骨もまた中世に生きた人の遺骨であり、まださ程年配でもない女性と幼児という組合せで、しかも頭骨のみである点を考え合わせると、この二人が親子であったか否かはともかく、いかに世上不安な時世下とはいえ、ひどく殺伐とした風景が浮かびあがってきてしまう。

文 獻

池田次郎、多賀谷昭（1979）：刃痕のある中世人頭蓋について、人類誌、87：347—351

T.Nakahashi and M.Nagai, (1986) : Sex assessment of fragmentary skeletal remains

鈴木尚（1956）：人骨の損傷、日本人類学会編「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店、東京。

中世葬祭供養品の廃棄空間

—井相田C遺跡供養品の性格をめぐって—

奈良大学文学部教授 水野正好

井相田遺跡の発掘調査では人骨、柿経、卒塔婆が池中から発見され話題となった。勿論、柿経や卒塔婆が発掘されること自体珍しいことである上、供養の品である柿経、卒塔婆と供養される遺骨が互いに関係する形で発掘されるといった稀有な例であることが注目された。その上こうした品々の出土した場所が池である点も留意しなければならない事実であった。貴重な所見をもたらした井相田遺跡の語りを私なりに記して、その理解を披露したいと考える。

1. 死骨と供養の品とその整理

井相田遺跡では、卒塔婆、柿経といった供養の品々と並存して人骨が見られ、供養される死者の姿を浮かび上させた。こうした人骨は、径5cm程の範囲に7~8ヶ所に分かれて発掘されている。これが一人の遺骨であるのか、7~8人の遺骨であるのかがまず問われねばならないであろう。しかしこのことの確認は極めて困難なことである。遺骨に人名が記されている訳ではないから恐らく決ることは出来ないであろう。想えば、中世は火葬盛行の時期である。共伴した卒塔婆に「長禄三年」「寛正五年」といった紀年をもつところからすれば、まさに火葬の盛期である。当時の火葬は、その遺体の火化のあと、捨骨し分骨するといった慣行をともなっている。分骨した骨は、その一部を墓地に納め、他骨は供養後、各地に納骨するといった特色ある在り方を見せていているのである。こうした納骨時の骨量は極めて少量、時には一片であっても良いのである。昭和36年発掘された奈良市元興寺極楽坊葬祭資料包蔵坑での所見では木製納骨塔婆に納められた遺骨は歯一点、或いは指骨一片といった量であり、納骨としては極限の納骨量であった。一方、この寺では竹製納骨筒の発見があり、径3cm弱の竹筒に火化の1~2骨片を納め栓して納める仕方が広く行なわれていたことを端的に物語った。また、時に例はさほど多くはないが鍋や曲物などにかなりの量の遺骨を容れ、これを極楽坊に納めているといった事例も見られたのである。こうした資



Fig.56 元興寺極楽坊葬祭資料包蔵坑

料からみるかぎり、井相田遺跡の7~8ヶ所の人骨は7~8人に及ぶ人達の遺骨である可能性が強いと言えるのである。恐らく紙に包んだり、布にくるむといった形で納められた火葬骨と考えるのが最適であろう。このように7~8人の遺骨と考える所見を援けるものが卒塔婆である。長禄三年(1459年)、寛正五年(1464年)といった二つの紀年は年忌の1年、3年、7年13年、33年といった年忌の期間に合致しない5、6年に当たるだけに別人の供養卒塔婆であることが明白である。少なくとも卒塔婆が死者の供養塔婆の一類であることは疑いないと同一人に対するものではなく、また先の7~8人の死者と係り合うものか否かも必ずしも分明しないのである。ただ、卒塔婆の発見数は5~6本、従って7~8人の遺骨とこの卒塔婆が相關する可能性は考えておかねばならないが、卒塔婆が他の遺骨と関係し、この遺跡の7~8人の死骨とは相關しないといったケースもありうるであろう。いずれにせよ、7、8ヶ所の人骨、形や銘の異なる数本の卒塔婆は、幾人もの死者の存在と幾人もの死者への供養、といった事実を伝えるものといえるであろう。

ところで柿経は、こうした死者や卒塔婆と同一場所から見出されている。本来、法華経一部を書写する場合、経木の一面のみを用いるならば、実に5,000枚、両面に書けば2,500枚近くなるのである。したがって幾人かの筆による分担書写といったケースも考えておかねばならないが、井相田遺跡の場合は1000枚以上の柿経が狭い範囲に集中し、そこから離れた柿経がやや広い範囲に拡散しているようであるから、法華経一部書写の内の一部、その数巻分に該当する可能性が強い。とすれば、書写した一部の法華経の一巻が他にあり、一部が井相田遺跡にあると考えることが出来るであろう。井相田遺跡の柿経の下半部の片側の縁には僅かではあるが「抉り」が刻まれている。柿経経木を20枚ごとに束ねるための用途をもつ抉りであろうから、こうした経木束を法華経の一部分なり数巻分を束ねた大束の存在が推測されるのである。大和長谷寺などにその顯著な例が見られるように、法華経を束ねた幾つかの大束中の一つの大束が井相田遺跡の池に納められていたと想像するのである。

このように検討してみると、死骨と卒塔婆、柿経は共に直接相互関係し合う、言葉をかえれば「この死骨を対象とする卒塔婆、柿経である」といった言い方はできず、むしろ、寺院等に納置されていた死骨、卒塔婆、柿経の一部が、この池中に再納されたと見るのが順当である。こう考えるならば三者は相互には関係せず、再納に当たってたまたま同一の場に持ちこまれたに過ぎないと言った経過を考えることが遺跡に相応しい解釈と言えるのである。

相似した遺跡に、南都元興寺極楽坊跡資料包蔵坑がある。大きく瓢箪形に掘った坑中に、多量の火化骨をおき、骨壺の上面に木製納骨塔婆數千基の他、多量の納骨器、藏骨器、加えて膨大な量の柿経などが納められ、丁寧に埋めもどされていた。この場合、火化骨をも含めて全ては極楽坊の本堂中に納置されていたものであり、徳川家朱印寺となる過程で、同坊に納骨された骨や供養の品がこの穿たれた包蔵坑に埋納されるといった経緯が迫れるのである。井相田遺跡

の場合もこの元興寺例と相似した状況を想定すべきであって、近接の寺院に納骨された火化骨と寺に納置された死者追善供養などに用いられた卒塔婆、柿経などが何らかの事情で処分され、かように地中に納められたものと見るべきであろう。井相田遺跡に近接する納骨寺院と関連する「遺跡」として位置づけることがこの遺跡の正しい評価ではないかと考えるのである。

一見すれば如何にも死者をおさめ、追善供養した遺跡に見える井相田遺跡であるが、その実この遺跡はそうした性格の遺跡ではなく、死骨を受けいれ追善供養の品々を受けいれた納骨寺院の、「整理」を物語る遺跡であると説きたいのである。

2. 河川沼池の諸相と廻業現象

死骨を納める場は一般には墓地と寺院、柿経や卒塔婆を納める場も一般には墓地と寺院である。従って、この井相田遺跡の場合は、この池が墳墓とは到底考えられないだけに、一旦は寺院に納められたこうした死骨や経、塔婆であったと見るべきであり、それが整理されて池に納められるようになったとするのが最も妥当と考えるのである。僅か数人の死骨、数本の卒塔婆數卷を数える法華経、こうしたものの「整理」が何故行なわれるのかもまた問わねばならないであろう。納骨をうけいれる寺院の場合、元興寺極楽坊にかぎらず、西大寺骨堂でも、また佐渡蓮華峯寺でも、或いは会津八葉寺でも膨大な量の死骨、供養の品をうけとっている。従ってその「整理」ということになれば、元興寺極楽坊の大規模な包蔵坑が想起されるように、かなりの人工的埋納整理坑が必要となるが、こうした廻業する空間が必要となるであろう。井相田遺跡の池は東西約18m、南北約33mと小さく、しかもその整理された量は極めて少ない。そうした点を配慮するならば、元興寺などの納骨をうける寺院の整理とはやや異なる一面があると考えねばならないであろう。

恐らく納骨を大きく謳う寺院ではなく、時に納骨をうけたり、供養の品をうけとる、そうした地域社会一村落一の寺として息づいていた寺院の姿が浮かび上がってくるのである。そうした場合、あざかる死骨や供養の品は特定の機会に寺院に運びこまれるだけといったことになりその整理もわざわざ埋納包蔵坑を穿ったりすることなく、寺院にほど近い池でも可能であったと見るべきではないかと考えるのである。たまたま、村の寺の中にこうした情景があったのではないかと想像するのである。

では、こうした整理に何故「池」が選ばれるのであろうか。こうした例をいくつかケースを選び記して見よう。その一は、例えば、平城宮では大膳職の井戸中に一枚の人形代が投入されていた事例がある。この人形代は「坂部秋定」の名が記され、両眼と胸に木針が打ちこまれた悽惨な呪いの人形代である。元来は樹木なり柱などに打ちつけたり、といった形で用いられるものであるから、大膳職の井戸にあることはその性格からして確かにこの中に投入したこと意味するのである。用盡し終り、その処理の場として井戸が選ばれているのである。井水の

湧く、そうした井中ならば、汲み出されたり拾い上げられたり人目につくこともあるであろうが、廐井中ならば安心して「処理の空間」となしうるのである。この場合は池ではないが、共通する水の空間の用益と見てよいであろう。本来、井水がもつ聖性、井戸が呉える聖性とは関係のない行為として呪いの人形代の廃棄空間が井戸に設定されているのである。

一方、平城京の内外では、河川、溝渠等の中から多量の祭祀に係る品々が発掘されている。朱雀大路の北端に所在する朱雀門とその東に所在する壬生門の間を結んで流れる二条大路北側溝中から207枚もの人形代が見出された実例はその顕著な一例である。同様、朱雀大路を南へ出た稗田の地では埋没していた河川が発掘され、多くの祭具と共に「人面墨描土器」200余点が見出されている。「水みち」と係り合う資料といえるであろう。一般に人形代は人がこれを一撫一吻することによって人身にある穢氣、罪、或いは病い気を移し、水みちに流しやることによって罪穢はやがて川、河を下り海底に至りさすらい失せると考えられていたのである。人面墨描土器も同様である。行疫神一鏡鬼を描いたこの盃は、中に物実を収め紙で口を封じて用いる。紙面に小孔を穿ち気息一病い氣一を封じこめるのであり、これを河川などに流しやるものである。そうすれば病い気は大海原の底できさすらうと思惟されていたのである。中世の同様の資料としては愛知県岡崎市の矢作川河底で集中的に発見されるこの種の土器があり、やはり祓い流すことの趣旨が息づいている様をよみとることが出来るのである。ただ、この種の資料の検出は河川溝渠だけではなく井中からといった事例も見られる。大阪府羽曳野市畠田白鳥遺跡の一井からも、また藤井寺市大井遺跡の井戸からも多量の完形土器と共に人面墨描土器が発掘されている。その状況から見るかぎり井戸の機能がなくなった時点、「水のみち」といった性格をたどって投棄されたものと考えることが出来るのである。こうした在り方は「池」にも見られる。秋田市に所在する秋田城跡中権部の池中から人形代などを検出したニュースは耳新しい。また同様、岩手県水沢市胆沢城中門跡の北縁側溝から見出された人面墨描土器、こうした実例はまことに数多く見られるのである。河川溝渠、井戸池沼、こうした水のみちは、この種の遺物が投じられる空間として息づいているのである。「延喜式」所収の大祓祝詞、或いは「源氏物語」明石巻をまつまでもなく、この種の品々の背景には「水みち」が重要な意義をもち、品々のまつりの場を彩るのである。ただ、この場合、注目せねばならないことは「水」が直接浄化の機能をもつたり、「水のみち」が聖性を帯びたり、といったことでこの種の祓への祭儀に登場するのではなく、あくまでも罪穢、病疫を海底に流しやりさすらい失せさせる過程の一として、そうした「水みち」が用益されていると見るべきものなのである。

一方、歴史を貫いて盛行した慣行に、鏡の池沼、河川への投供といった行為がある。各地に「鏡池」の名が見られるが、その多くは神社や仏寺境内地、時に神や仏への奉賽聖地とされる池である。こうした行為は「奉賽」といった言葉が端的に語るように、神仏に供進することに意義をもつ行為である。こうした池中投供の品はそれが神仏への供進であるだけに極めて限ら

れた文物が選ばれることとなるのであり、勢い鏡などが対象とされる結果となると見てよいであろう。池が、仏神顯現の伝承をもつ社地や御藍の聖地であったり、神秘の伝承—金竜伝承などを伴った聖なる池として息づく故に、こうした供進を生み出すことになるのである。

河川沼地に見られる特殊な性格を帯びる文物の在り方を、「捨てる」、「流す」、「捧げる」といった形で事例を検討してきたが、こうした在り方は、「水みち」が如何に考えられていたかを雄弁に物語っている。廻井や管理しきらぬ河川池沼のもつ「よどみ」と「汚穢な水」は「捨て」の空間となるであろうし、河川に流れこむ溝渠・海に流れこむ河川は「流れ行く水」、「運び去る」性格の故に「流す」空間として生きることになるのである。一方、聖地に所在する「聖なる水」、「清澄な水」はこの性格をうけて「捧げられる」空間となるのである。

こうした池沼河川のもつ種々の性格を踏まえるならば、井相田遺跡の小沼はその沼土の堆積こうした各種の供養の品の廻棄といった状況から「よどむ」空間への投棄と見ることが最適であることは言うまでもないところであろう。恐らく、卒塔婆に記された記年銘よりもかなり後世、寺院の整理をうけて撇んだ池をめぐって誕生する遺跡と考えてよいであろう。

3. 供養の品の納置と廻棄空間

井相田遺跡の小沼と供養の品を考える時、脳裏をよぎる資料に四天王寺龜井水、或いは「流灌頂」といった慣行がある。四天王寺龜井水は本坊の南側、堂宇の下に構えられた石造の龜から流出する清冷な水をうける一種の井池であるが、春秋二季の彼岸時期には數多くの人々がこの龜井水に経木を投げるといった慣行が見られるのである。亡者の戒名などを記した経木が數十萬枚、龜井水に投じられる様は実に興味深い光景である。一説にこの龜井水は金堂堂下にある青龍池より流出する地下水であるときれ、一層、その聖性が強調されている。「新古今和歌集」には、上東門院の「濁りなき龜井の水を結びあげて心の塵をすすぐかな」といった一首を見るよう、元来は祓いや禊にも通ずる意義を荷った名水であったものが、転じて経木を投げる清水と変化しているのである。この経木の投人は見たところ、井相田遺跡に通ずる一面が感じられるもののその実、経木の祓い流し、経木を供養し亡者を送るのを意に通ずるのであり、その故に數十萬枚の経木を書き龜井水に投げ入れるのである。従って、この慣行は「供養」でこそあれ、「廻棄」ではないのであって、水は「清浄な流れる水」であり決して「よどむ汚濁の水」ではないのである。投げる目的、その投じ方、投ぜられる井沼の在り方がやはり異なると見るべきであろう。

佛儀の中に「流灌頂」と呼ぶ儀礼がある。灌頂幡、または塔婆を河海に流し、水中の魚鱗介貝に利益を与えるとする儀式である。その儀は光明真言及び諸陀羅尼を書き、或いは阿弥陀の名号を書いた卒塔婆をたて、流水の上に真言と名号などを記した幡を懸け、流水がこの幡に触れて流れるよう施設するのである。こうすれば、「幡に触れた水は流れて滄海に至り、水中の

群品は永劫にその福に浴し、一切の罪障は速やかに失せ、幽魂三業の重罪を洗ひ、亡魂精益とともに流水塔婆の滌頂にひかれて九品蓮台の世界に至る」と説かれているのである。浄土宗では7枚の板塔婆をもって1基とし、総べて7基、計49枚の板塔婆を作り糸線でこれをつなぎ、その間に桟革を貫き、これを河川にたてて施餽鬼するという。こうした流滌頂も板塔婆を用いるが、その実、流水の「流れ」を利用しての供養であり、滌頂帳や板塔婆を流すといった性格をもたないだけに、やはり井相田遺跡の実態とは異なるものとするべきであろう。

想えば、板塔婆や柿経は、死者の追善業として修される作善業の性格がつよい。それだけに忌日が重視される上、忌明けをまって寺院などに納められていくのである。元興寺極樂坊を中心に考えるならば、忌日ごとに葬家の間に挿したてられた物忌札、写経の数々、供養塔婆、位牌など葬祭に係る種々の供養の品や供養の具、そうした品が忌明けを待って寺に納められていくのである。

ところが、こうした供養の品々を寺以外の地に納めた事例もまた時に見られる。福井県一乗谷朝倉氏館跡の調査の進展の中で西光寺墓地で見出された柿経の大束八束の存在などは、その極めて重要な資料である。こうした柿経などが墓地に配される一納められる実際の姿を見事に語りえている資料である。柿経を束ねた大束が墓地の一割に列をなして整然と連なり並ぶその様は、「埋経」にも通ずる思惟であり、井相田遺跡の雜然とした在り方とはまた自ずから区別される在り方と説いてよいであろう。

遺骨と供養の品々をもつ井相田遺跡の池をめぐって、こうした「供養の場」を概観したが、結果、相通ずる性格をそこに見出すことは出来ないことが明確となった。井相田遺跡の場合は元興寺極樂坊葬祭資料包藏坑と共通する面が多いが、元興寺の例が「重な「埋棄空間」であり埋棄にあたっても一種の祭儀がなされている可能性がつよいのに対し、井相田遺跡では単なる「投棄空間」として池が利用されたケースであると想定されるのである。その投棄に際しての祭儀の存在は伴出した土器が経緯を語るかも知れないが、土器自体が投棄された古き供養具の一であった可能性もあるだろう。

近隣に所在する寺院に納められた納骨、柿経、卒塔婆…。こうした種々の供養の品が祀られるべき期間を終えたあと、しばらく寺におかれづけ、やがて時間をおいて寺辺の小沼池に投棄されている、こうした情景をもって井相田遺跡を復原するのが最適と私は考えるのである。中世の葬祭慣行を頃う上に極めて重要な所見をもたらす遺跡として「井相田遺跡」を位置づけることが出来ると言えるのである。

掲載出土遺物一覽表

遺物番号	種類	特徴	出土遺構	登錄番号	遺物番号	種類	特徴	出土遺構	登錄番号	
001 27	土師・蓋	黒褐色	上	00444	050 52	16	小石丸	S C - 04	00068	
002 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00441	051 52	16	小石丸	S C - 04	00067	
003 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00370	052 52	16	小石丸	S C - 04	00066	
004 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00440	053 29	土師・鉢	上	S C - 05	00075	
005 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00368	054 29	須恵・蓋	上	S C - 31	00142	
006 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00369	055 29	須恵・坏	上	S C - 31	00141	
007 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00371	056 16	瓦石	上	S C - 31	00145	
008 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00442	057 30	土師・平皿	上	S D - 13	00092	
009 27	須恵・蓋	黒褐色	上	00372	058 30	須恵・坏	上	S D - 13	00091	
010 27	須恵・皿	黒褐色	上	00373	059 31	須恵・蓋	上	S D - 38	00152	
011 27	須恵・皿	黒褐色	上	00374	060 31	須恵・蓋	上	S D - 38	00151	
012 27	須恵・坏	黒褐色	上	00433	061 31	須恵・坏	上	S D - 38	00157	
013 27 15	須恵・坏	黒褐色	上	00375	062 31	須恵・坏	上	S D - 38	00154	
014 27	須恵・坏	黒褐色	上	00376	063 31	須恵・坏	上	S D - 38	00153	
015 27	須恵・坏	黒褐色	上	00377	064 31	須恵・長颈瓶	上	S D - 38	00150	
016 27	須恵・坏	黒褐色	上	00436	065 17	土師・鉢	上	S D - 38	00159	
017 27	須恵・坏	黒褐色	上	00380	066 31	土師・甕	上	S D - 38	00160	
018 27	須恵・坏	黒褐色	上	00383	067 31	土師・燒	上	S D - 38	00161	
019 27	須恵・坏	黒褐色	上	00379	068 32	土師・蓋	上	S E - 02	00038	
020 27	須恵・坏	黒褐色	上	00378	069 32	土師・坏	上	S E - 02	00039	
021 27	須恵・坏	黒褐色	上	00381	070 32	土師・坏	上	S E - 02	00037	
022 27	須恵・坏	黒褐色	上	00382	071 32	土師・坏	上	S E - 02	00041	
023 28	須恵・蓋	黒褐色	上	00445	072 32	須恵・蓋	上	S E - 02	00015	
024 28	須恵・蓋	黒褐色	上	00446	073 32	須恵・盖	上	S E - 02	00013	
025 28	須恵・蓋	黒褐色	上	00447	074 32	須恵・蓋	上	S E - 02	00012	
026 15	十郎・壺蓋	黒褐色	上	00431	075 32	須恵・蓋	上	S E - 02	00014	
027 15	土師・壺蓋	黒褐色	上	00432	076 32	須恵・高环	上	墨書「口應」	S E - 02	00011
028 49 15	石器	黑曜石	上	00426	077 32	須恵・坏	上	S E - 02	00027	
029 49 15	石器	黑曜石	上	00423	078 32	須恵・坏	上	S E - 02	00020	
030 49 15	石器	黑曜石	上	00404	079 32	須恵・坏	上	S E - 02	00021	
031 49 15	石器	ナスカイト	上	00424	080 32	須恵・坏	上	S E - 02	00024	
032 49 15	石器	ナスカイト	上	00425	081 32	須恵・坏	上	S E - 02	00025	
033 49 15	石器	石庵	上	00401	082 32	須恵・坏	上	S E - 02	00017	
034 49 15	石器	石庵	上	00412	083 32	須恵・坏	上	S E - 02	00018	
035 15	砾石	黒褐色	上	00391	084 32	須恵・坏	上	S E - 02	00026	
036 15	砾石	黒褐色	上	00406	085 32	須恵・坏	上	S E - 02	00031	
037 29	須恵・蓋	S C - 03	00052	086 32	須恵・坏	上	S E - 02	00032		
038 29	須恵・蓋	S C - 03	00053	087 32	須恵・坏	上	S E - 02	00028		
039 16	小石丸	S C - 03	00057	088 32	須恵・蓋	上	S E - 02	00033		
040 29 16	須恵・坏	S C - 04	00059	089 35	18	須恵・坏	上	墨書「良」	S E - 02	00005
041 29 16	須恵・坏	S C - 04	00060	090 35	18	須恵・坏	上	墨書「益」	S E - 02	00007
042 29 16	土師・甕	S C - 04	00061	091 35	18	須恵・蓋	上	墨書「益」	S E - 02	00068
043 29 16	土師・甕	S C - 04	00062	092 35	18	須恵・高环	上	墨書「返賣」	S E - 02	00010
044 52 16	小石丸	S C - 04	00074	093 18	土師・坏	上	ハラガキ「生」	S E - 02	00004	
045 52 16	小石丸	S C - 04	00073	094 33	17	土師・甕	上	S E - 02	00046	
046 52 16	小石丸	S C - 04	00072	095 33	18	土師・甕	上	S E - 02	00040	
047 52 16	小石丸	S C - 04	00071	096 33	18	土師・甕	上	S E - 02	00043	
048 52 16	小石丸	S C - 04	00070	097 33	17	土師・甕	上	S E - 02	00047	
049 52 16	小石丸	S C - 04	00069	098 33	17	土師・甕	上	S E - 02	00429	

第1表 掘出出土遺物一覧表

物語	編	目次	種類	特徴	出土遺物	目次	物語	編	目次	種類	特徴	出土遺物	目次
099	33	17	土師・壺	S E-02	00430	148	44	28	卒塔婆	S G-16	00614		
100	43	19	木簡	S E-02	00600	149	44	28	卒塔婆	S G-16	00609		
101	43	19	木簡	S E-02	00601	150	44	28	卒塔婆	S G-16	00613		
102	43	19	木簡	S E-02	00602	151	45	27	卒塔婆	S G-16	00607		
103	36	23	土師・壺	S K-12	00089	152	45	27	卒塔婆	S G-16	00606		
104	36	23	土師・壺	S K-12	00087	153	45	27	卒塔婆	S G-16	00611		
105	36	23	土師・壺	S K-12	00086	154	45	27	卒塔婆	S G-16	00610		
106	36	23	土師・壺	S K-12	00088	155	46	27	卒塔婆	S G-16	00618		
107	52	23	スクレイパー サヌカイト	S K-18	00129	156	46	27	卒塔婆	S G-16	00619		
108	37	23	須恵・瓦坏	S P-125	00326	157	46	27	卒塔婆	S G-16	00620		
109	37	23	須恵・瓦	S P-116	00315	158	47	29	木製・椀	S G-16	00635		
110	37	23	須恵・瓦	S P-130	00331	159	47	29	木製・椀	S G-16	00634		
111	37	23	須恵・瓦	S P-160	00362	160	47	29	曲物	底板	S G-16	00625	
112	37	23	須恵・瓦	S P-123	00323	161	47	29	曲物	底板	S G-16	00627	
113	37	23	須恵・瓦	S P-129	00363	162	47	29	曲物	底板	S G-16	00626	
114	37	23	須恵・瓦	S P-161	00293	163	47	29	曲物	底板	S G-16	00624	
115	37	23	須恵・瓦	S P-93	00250	164	47	30	曲物	側板	S G-16	00623	
116	37	23	須恵・瓦	S P-68	00294	165	47	30	木製・鉢	S G-16	00633		
117	37	23	須恵・瓦	S P-94	00339	166	48	31	下駄	S G-16	00630		
118	37	23	須恵・瓦	S P-137	00077	167	48	31	下駄	S G-16	00631		
119	39	23	青磁・焼	S K-06	00102	168	48	31	下駄	S G-16	00632		
120	40	24	土師・瓦	S G-16	00103	169	48	31	木器	陽形木製品	S G-16	00637	
121	40	24	土師・瓦	S G-16	00104	170	48	31	木器	樟木木製品	S G-16	00638	
122	40	24	土師・瓦	S G-16	00105	171	39	25	土師・瓦	S D-93	00184		
123	40	24	土師・瓦	S G-16	00106	172	39	25	石鍋	S D-93	00188		
124	40	24	土師・瓦	S G-16	00107	173	53	25	銅鏡	開元通寶	S D-93	00500	
125	40	24	土師・瓦	S G-16	00108	174	53	25	銅鏡	景元通寶	S D-93	00501	
126	40	24	土師・瓦	S G-16	00109	175	53	25	銅鏡	皇宋通寶	S D-93	00502	
127	40	24	土師・瓦	S G-16	00110	176	53	25	銅鏡	政和通寶	S D-93	00503	
128	40	24	土師・瓦	S G-16	00111								
129	40	24	土師・瓦	S G-16	00112								
130	40	24	土師・瓦	S G-16	00114								
131	40	24	土師・瓦	S G-16	00113								
132	40	24	土師・瓦	S G-16	00115								
133	40	24	土師・瓦	S G-16	00116								
134	41	25	土師・鍋	S G-16	00117								
135	41	25	土師・鍋	S G-16	00117								
136	41		瓦質土器	S G-16	00126								
137	41		瓦質土器	S G-16	00125								
138	41		白磁・碗	S G-16	00449								
139	41		青磁・碗	S G-16	00121								
140	41	25	博	S G-16	00128								
141	43	26	卒塔婆	S G-16	00604								
142	43	26	卒塔婆	S G-16	00605								
143	43	26	卒塔婆	S G-16	00606								
144	44	26	卒塔婆	S G-16	00616								
145	44	26	卒塔婆	S G-16	00615								
146	44	28	卒塔婆	S G-16	00617								
147	44	28	卒塔婆	S G-16	00612								

第2表 掘立出土遺物一覧表

図 版



調査地周辺航空写真（昭和23年）



(1) I区調査区全景（北から）



(2) I区調査区全景（東から）



(1) I区調査区全景（東から）



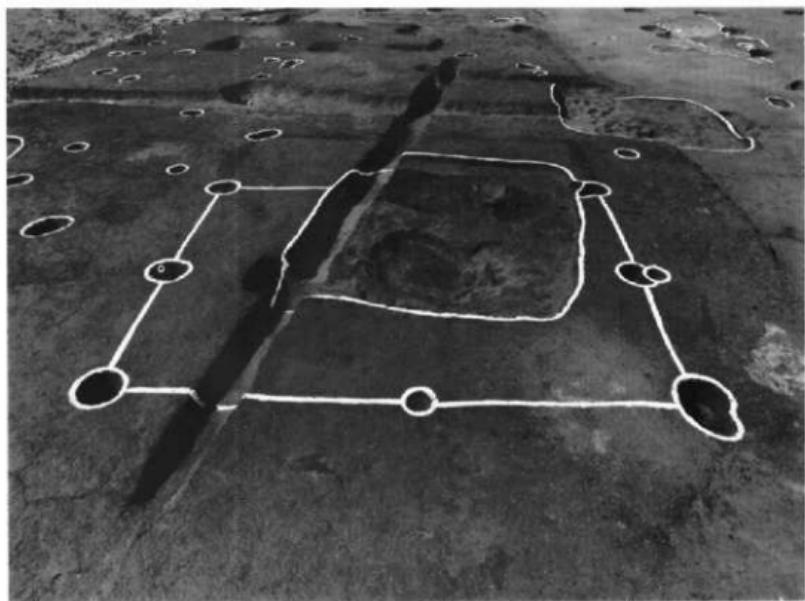
(2) I区調査区南半部（東から）



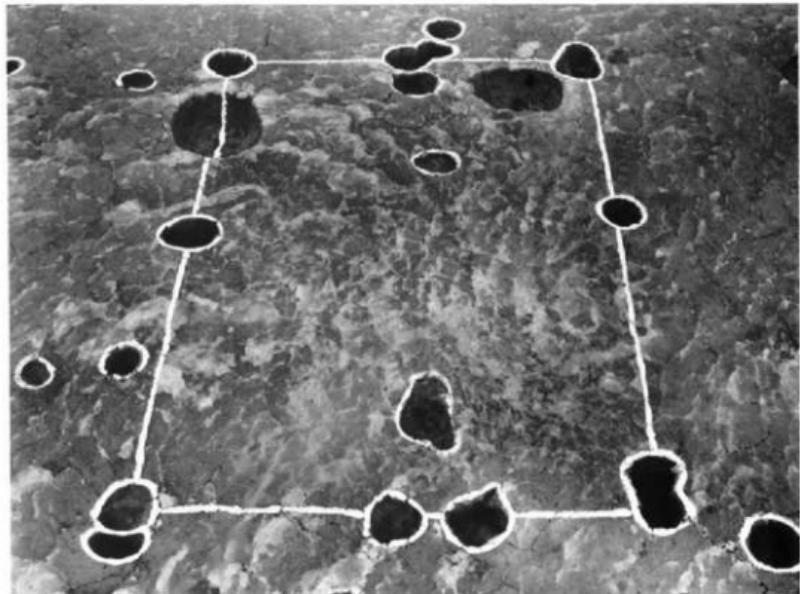
(1) II区調査区全景（東から）



(2) II区調査区全景（西から）



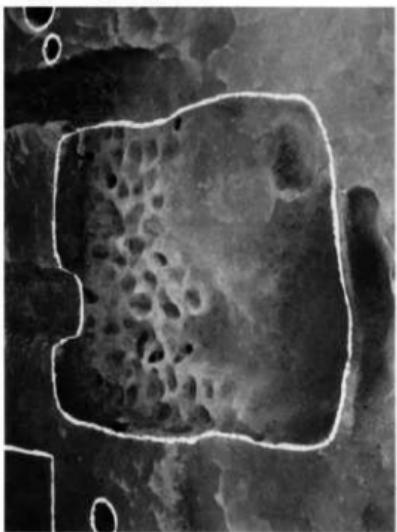
(1) SB15, SC04 (東から)



(2) SB30 (北から)

図版 6

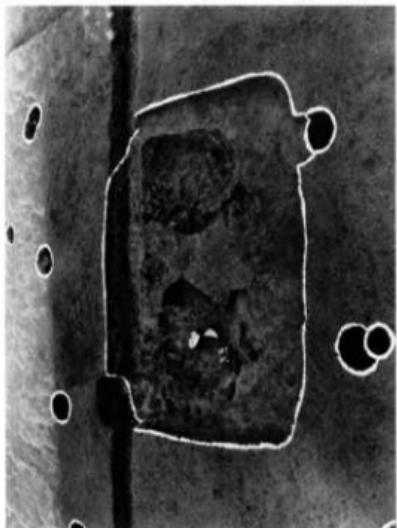
(3) SC 05 (北から)



(4) SC 31 (北から)



(1) SC 04 (北から)



(2) SC 04 遺物出土状況



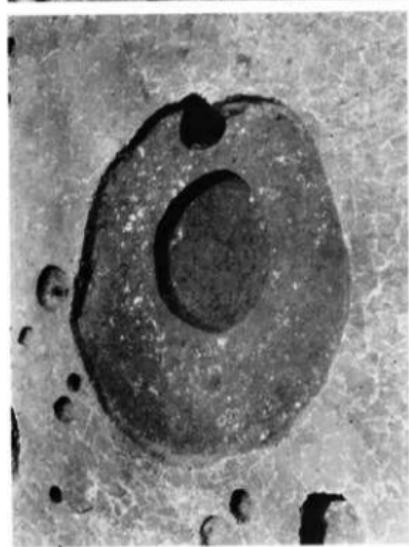
(3) SE'02 全景 (北から)



(4) SE'02 井戸隔柱 (北から)



(1) SE'02 検出状況 (北から)

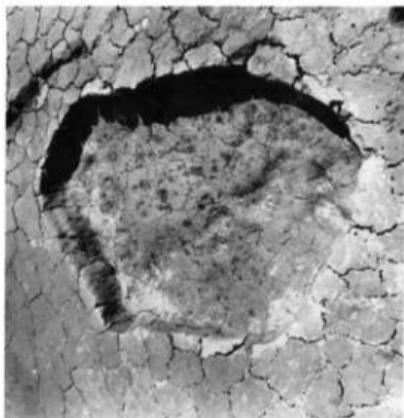


(2) SE'02 土層断面 (東から)



図版 8

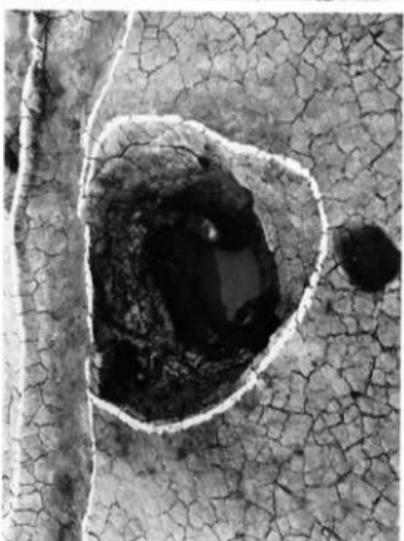
(3) SK 08 (北から)



(4) SK 12 (北から)

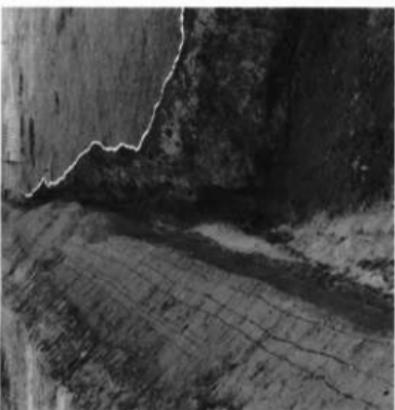


(1) SE 35 (南から)



(2) SK 01 (北から)







(1) SG16全景（南から）



(2) SG16全景（北から）

(3) SX95上層水田畔 (東から)



(4) SX95上層水田畔 (南から)



(1) SX95上層水田 (南から)

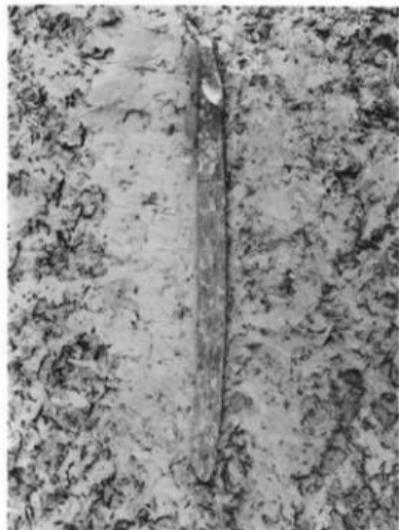


(2) SX95上層水田 (北から)

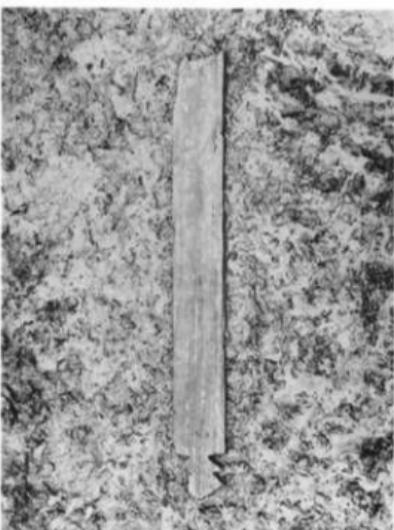


图版 12

(3) SG 16 辛塔婆出土状况



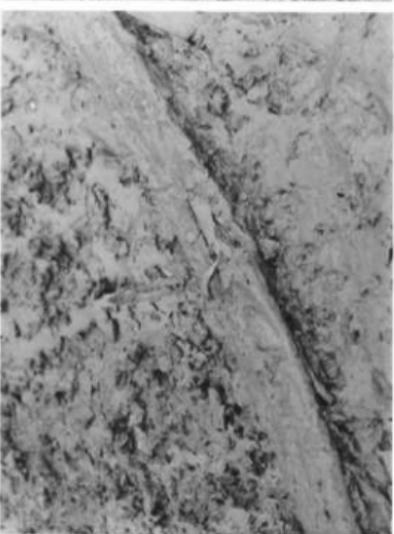
(4) SG 16 辛塔婆出土状况



(1) SG 16 辛塔婆出土状况

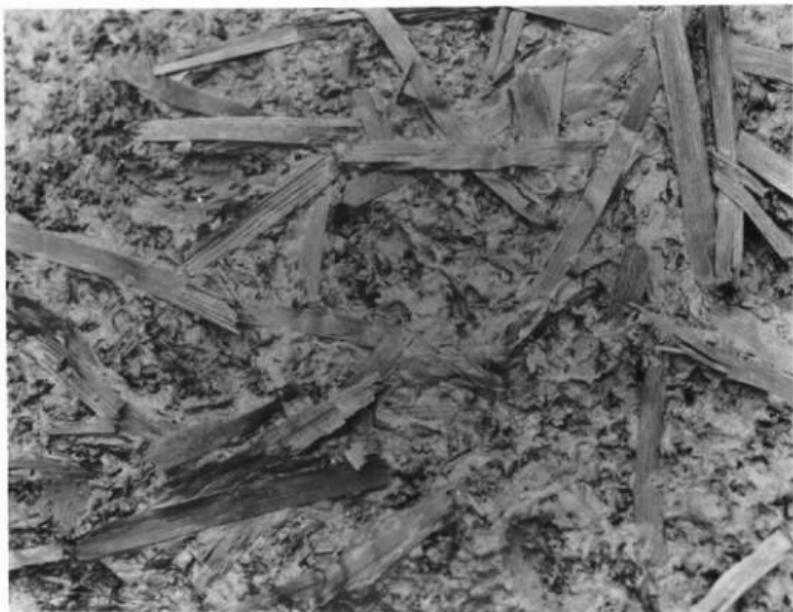


(2) SG 16 辛塔婆出土状况



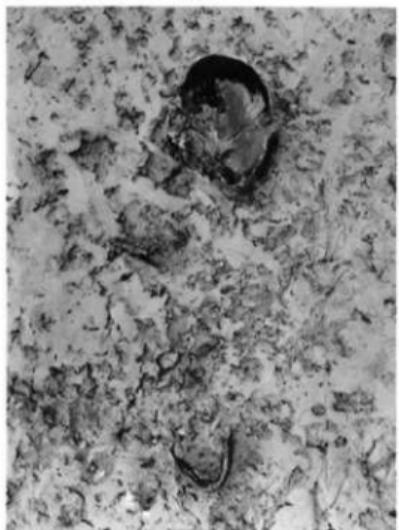


(1) 柿経出土状況



(2) 柿経出土状況

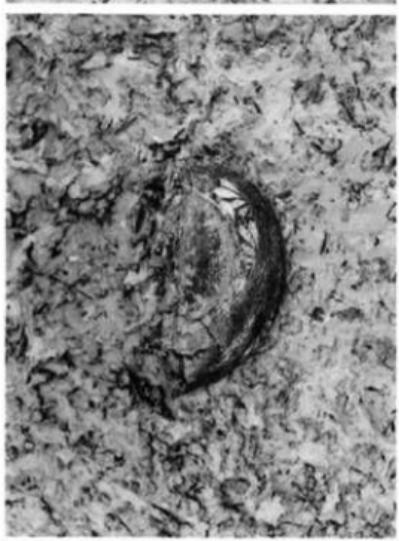
(3) SG 16 人骨出土状況



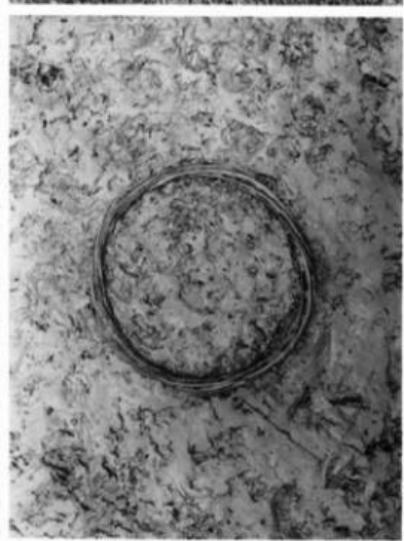
(4) SG 16 馬頭骨出土状況

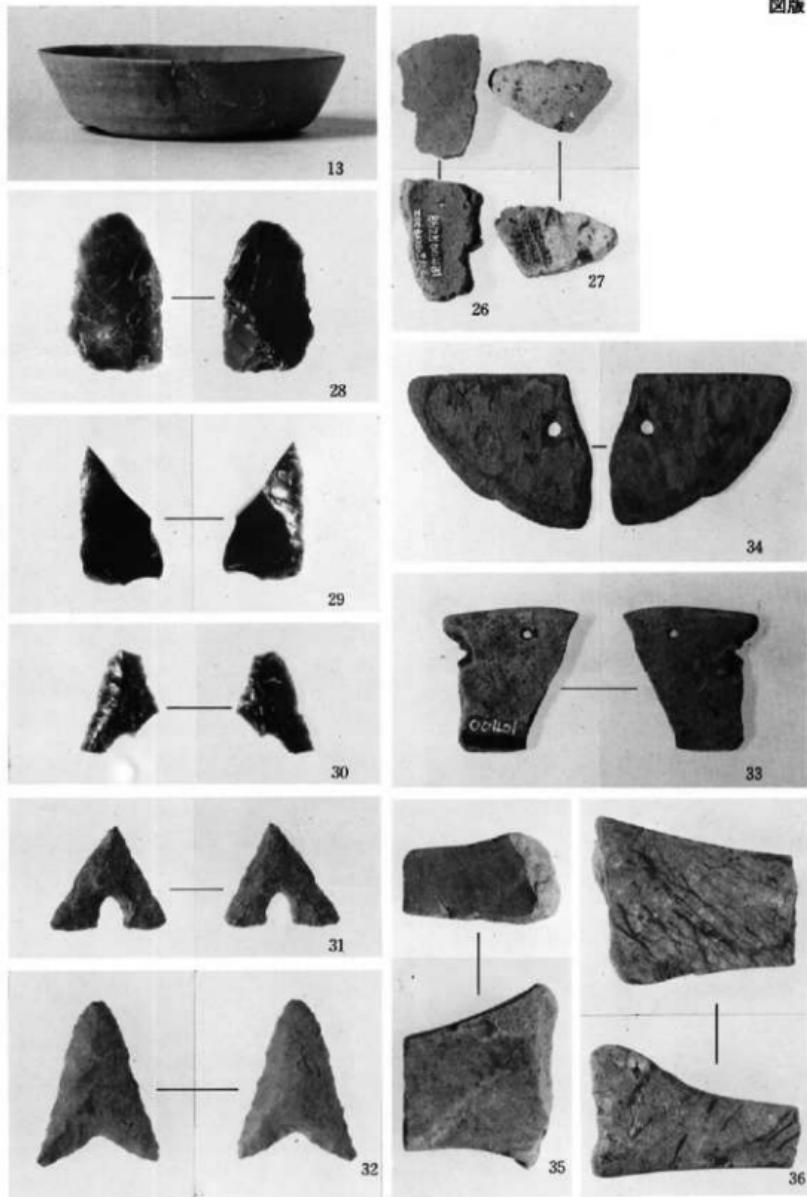


(1) SG 16 木製櫈出土状況

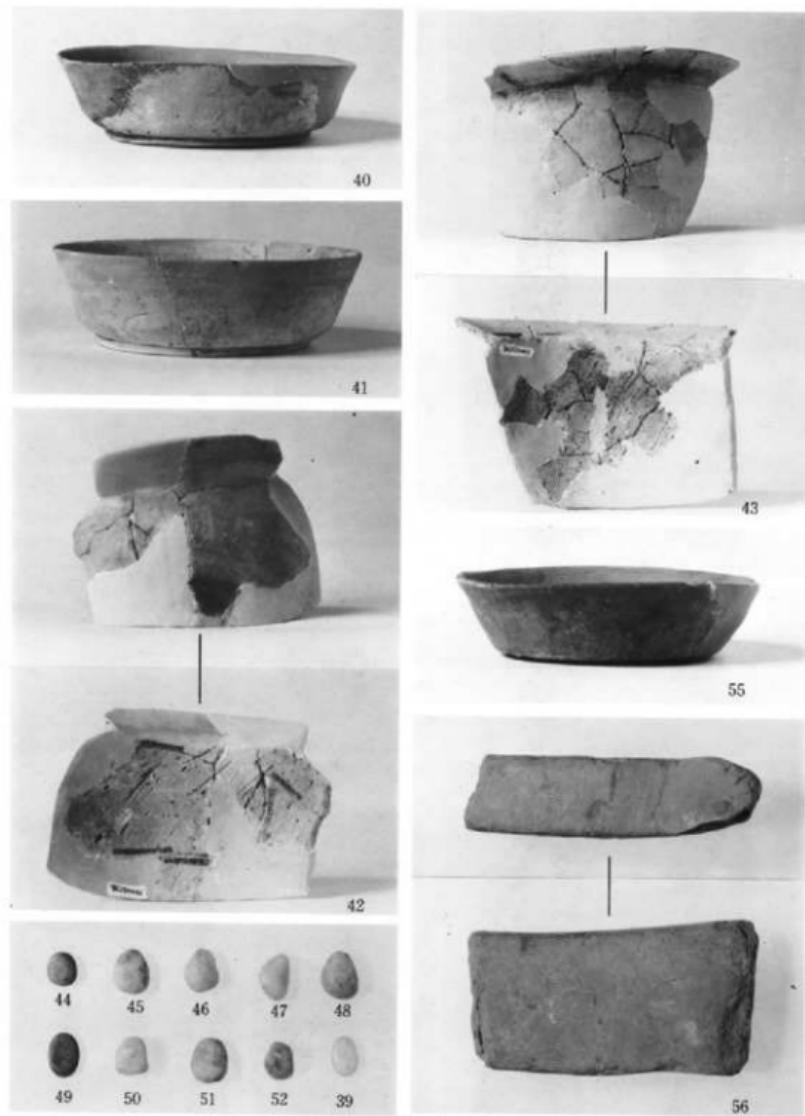


(2) SG 16 曲物タガ出土状況

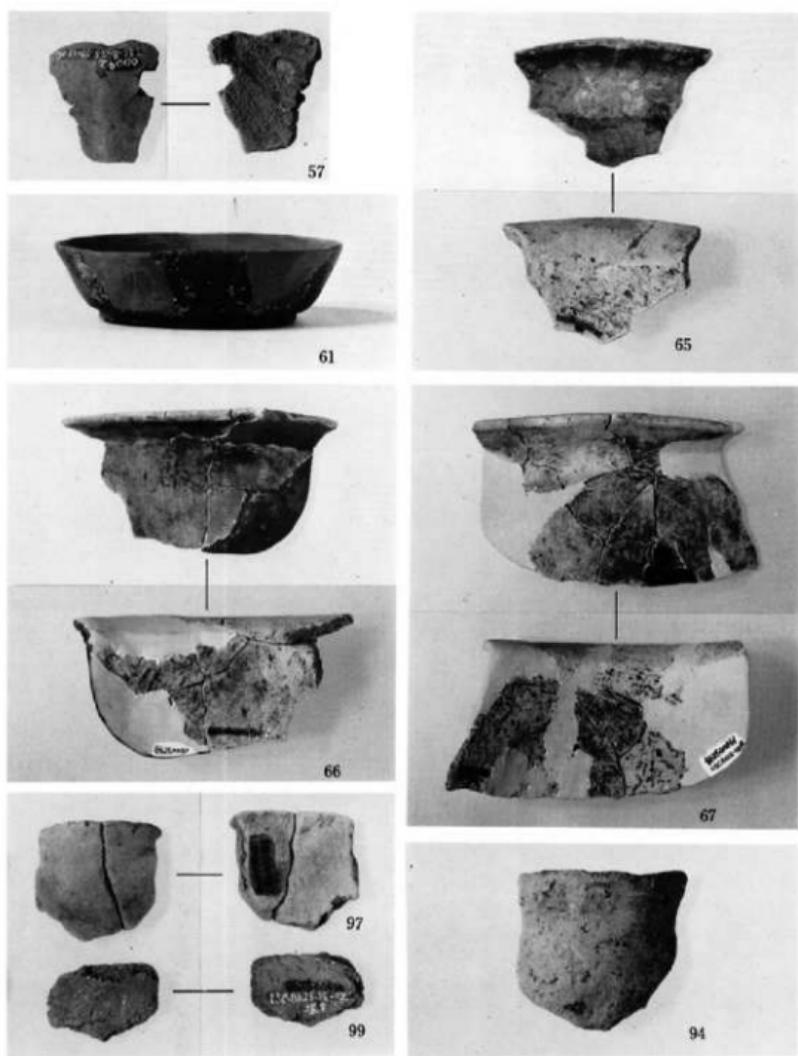




黑褐色土層出土遺物

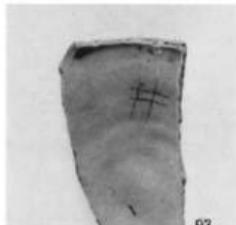
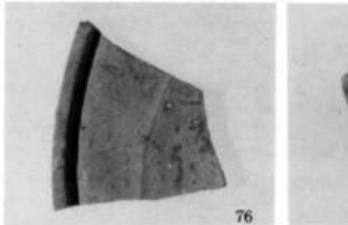
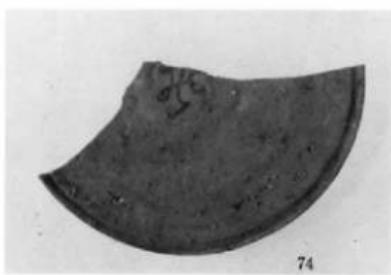
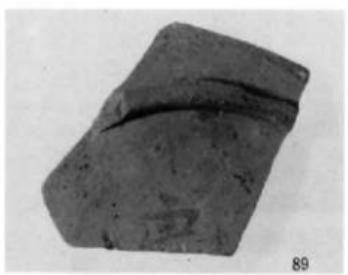
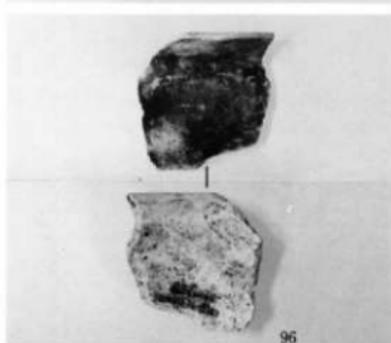
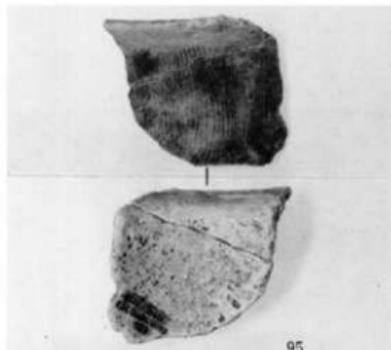
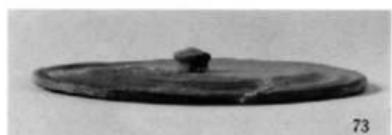


SC 03 · 04 · 31出土遺物

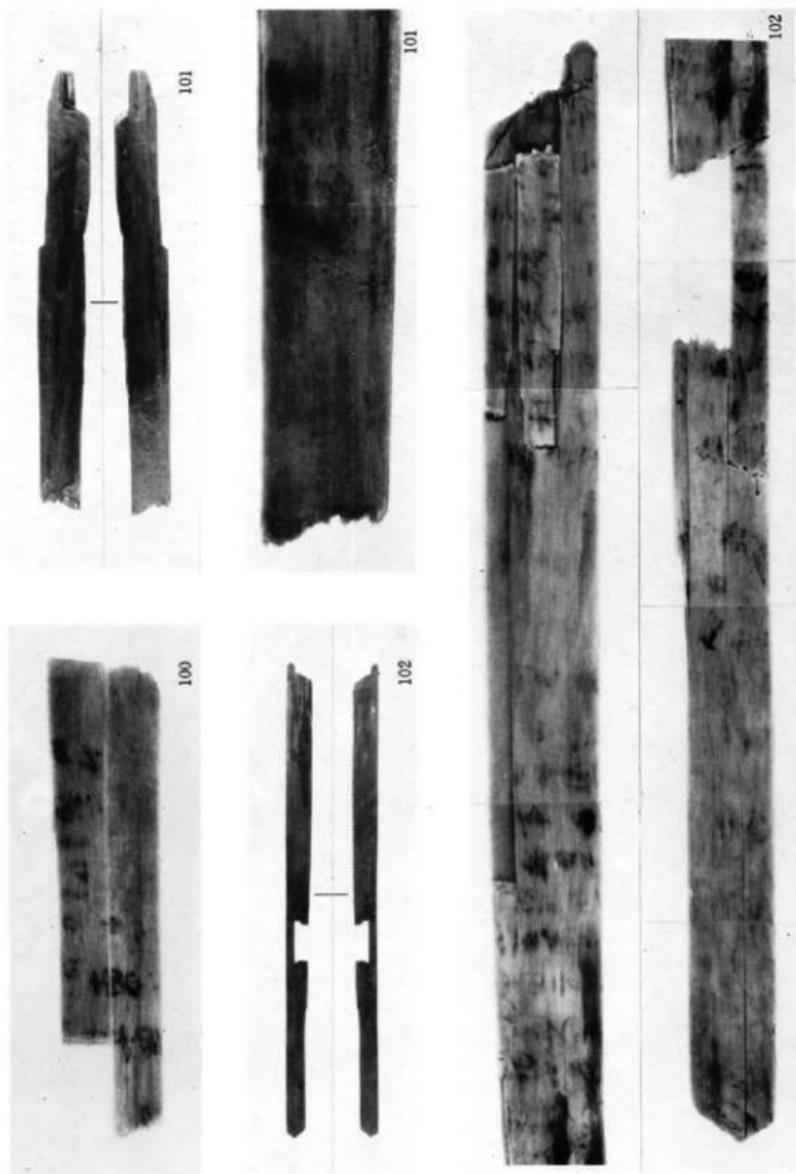


SD13 · 38, SE02出土遺物

圖版 18



SE 02出土遺物



SE02出土木簡

図版 20



(E)



b



a



(W)



a



b



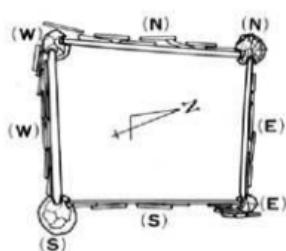
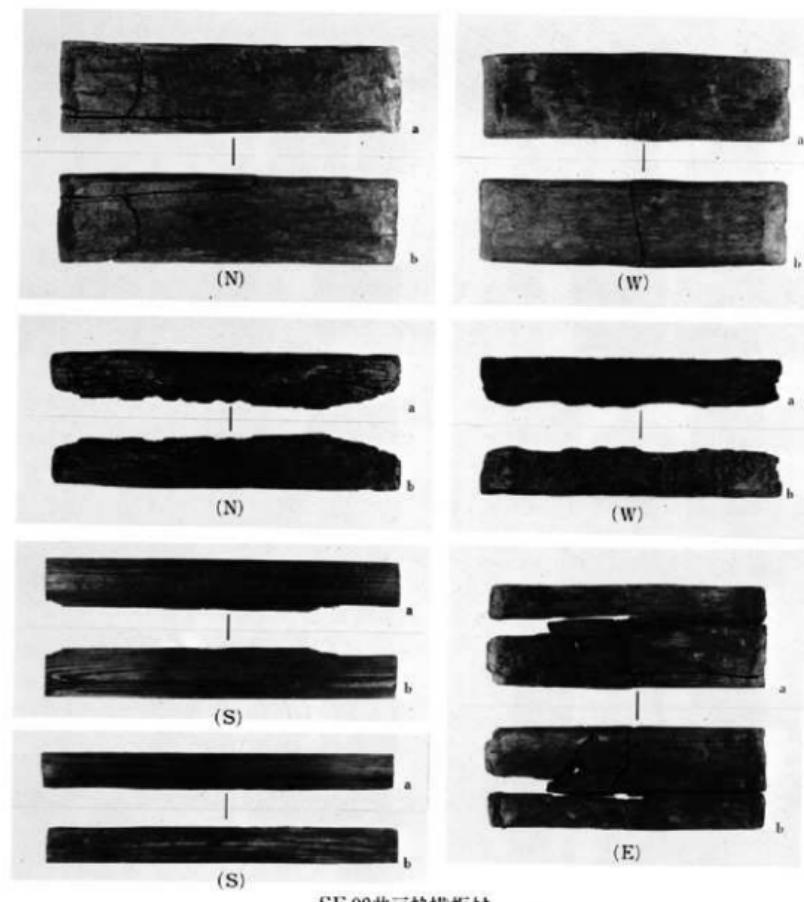
a



(S)

SE 02 井戸枠隅柱

図版 21



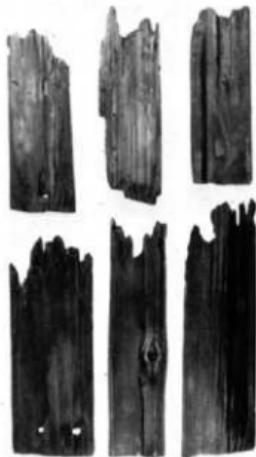
SE 02井戸棒材位置図



(N)



(E)



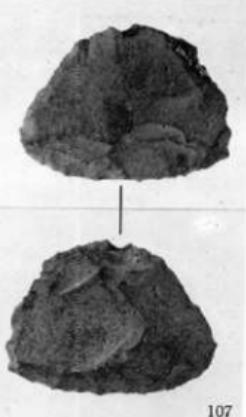
(S)



(W)



119



107



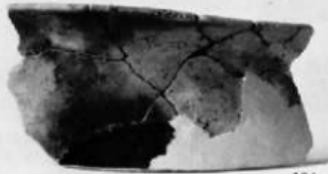
109



103



113



104



116



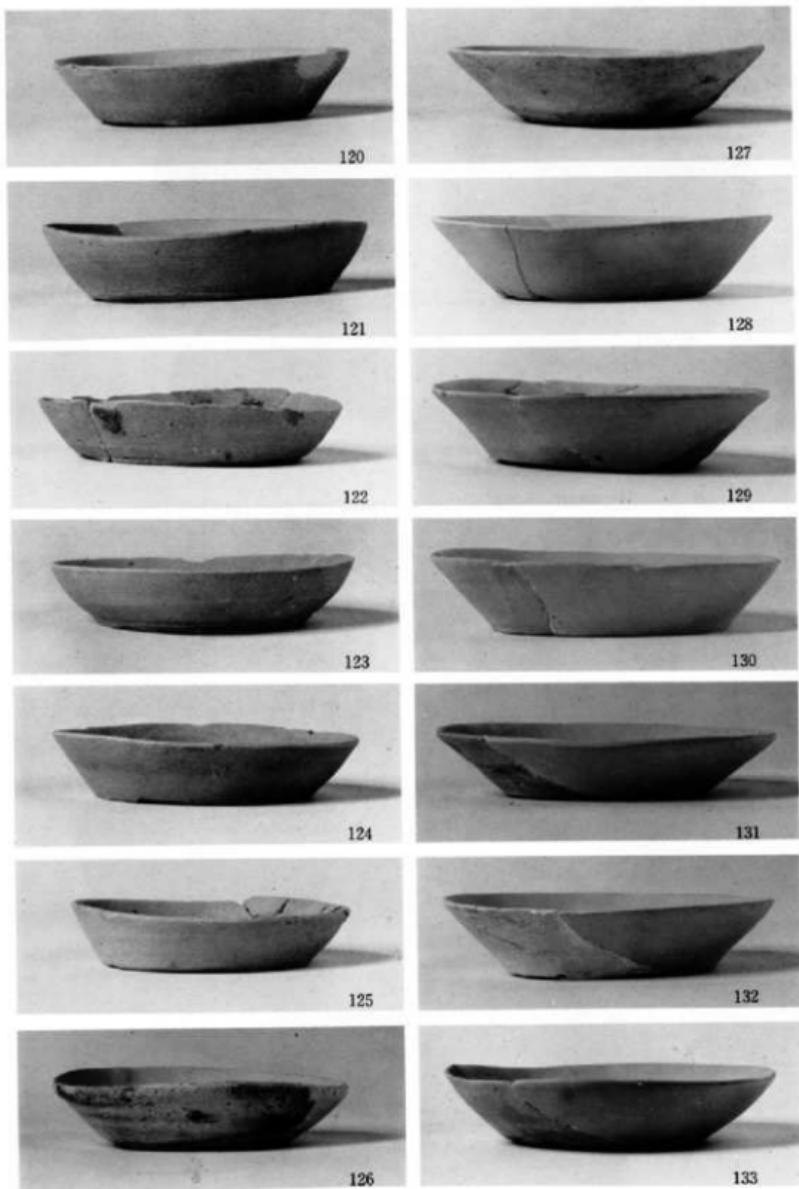
105



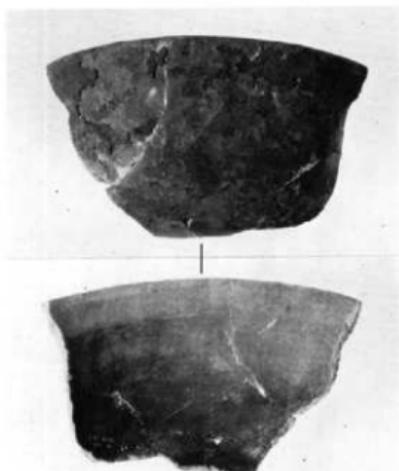
117

SK06・12・18, SP68・94・116・129出土遺物

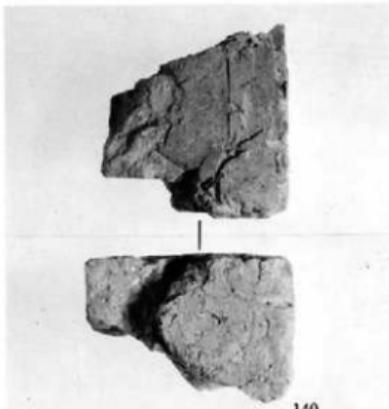
图版 24



SG 16出土遗物



134



140



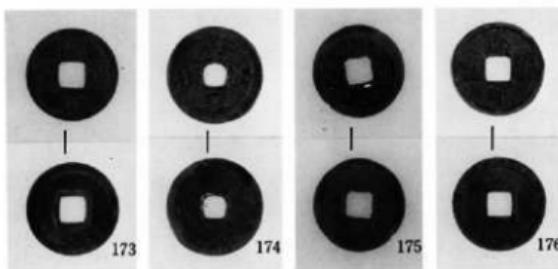
135



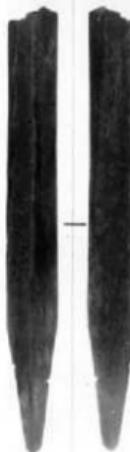
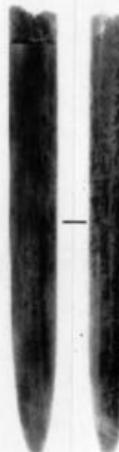
171



172



SG 16, SD93出土遺物

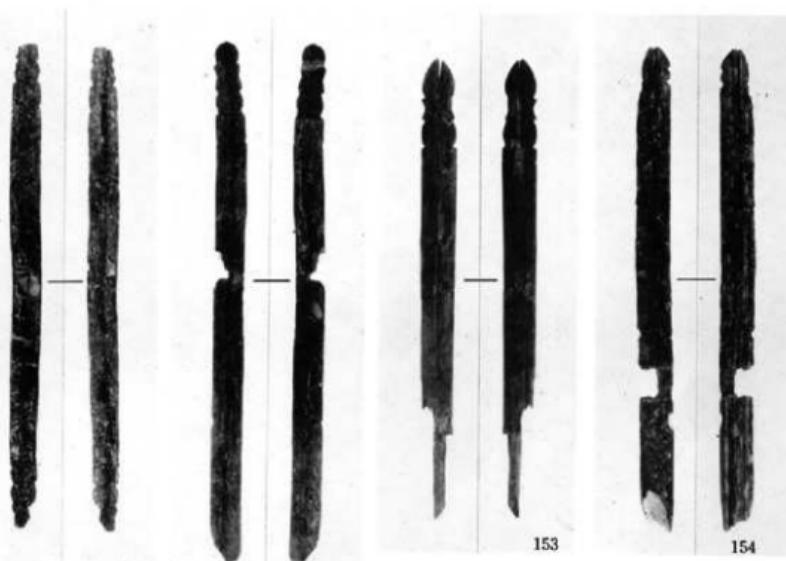


143

SG 16出土卒塔婆

145

142

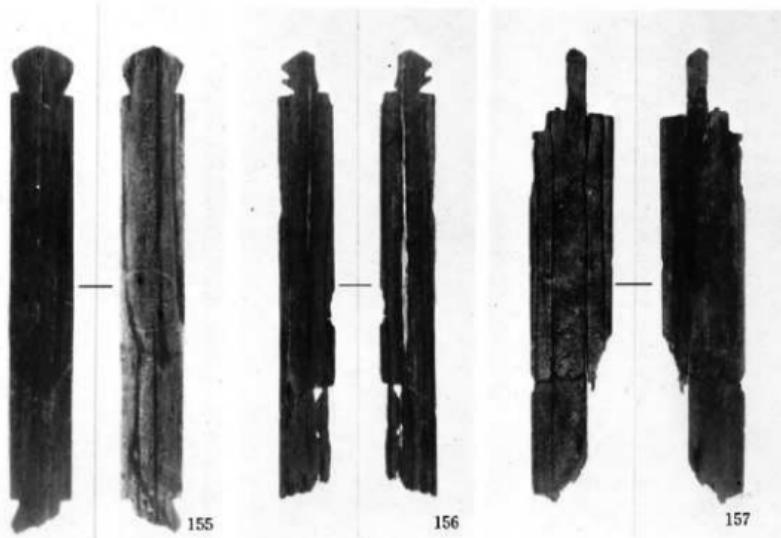


151

152

153

154



155

156

157

SG 16出土辛塔婆



147

148

148

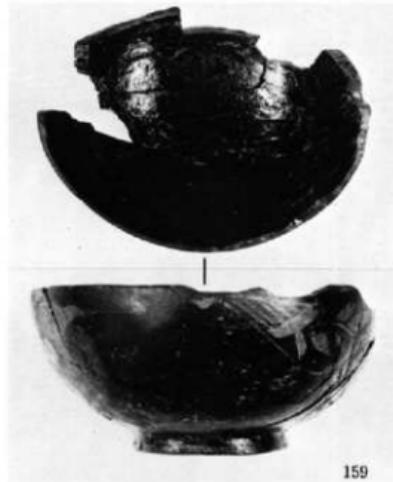


146

149

150

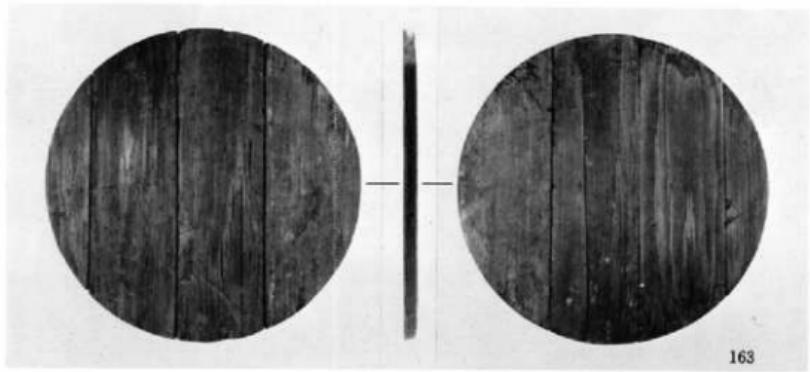
SG 16出土卒塔婆



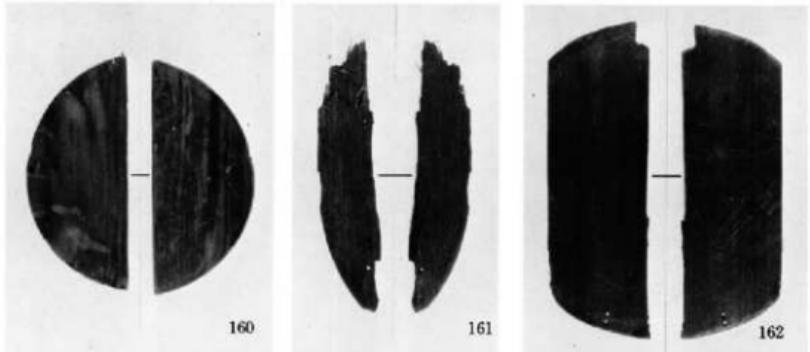
159



158



163



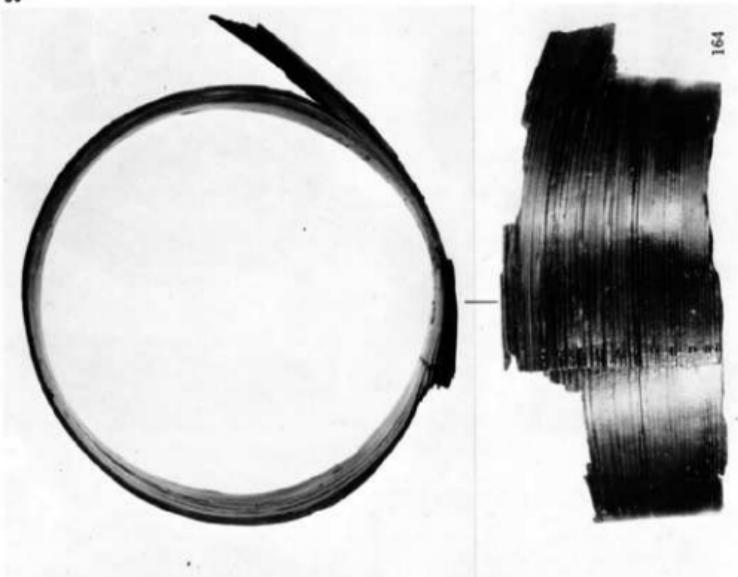
160

161

162

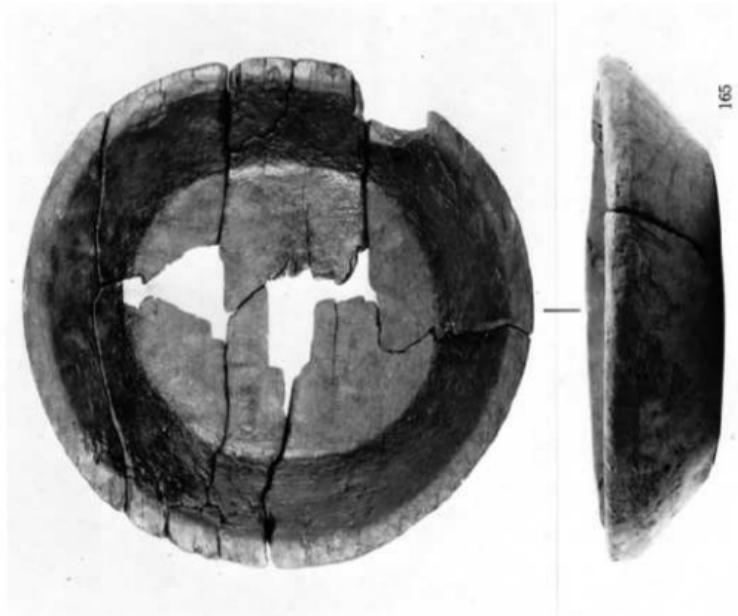
SG 16出土椀、曲物底板

圖版 30



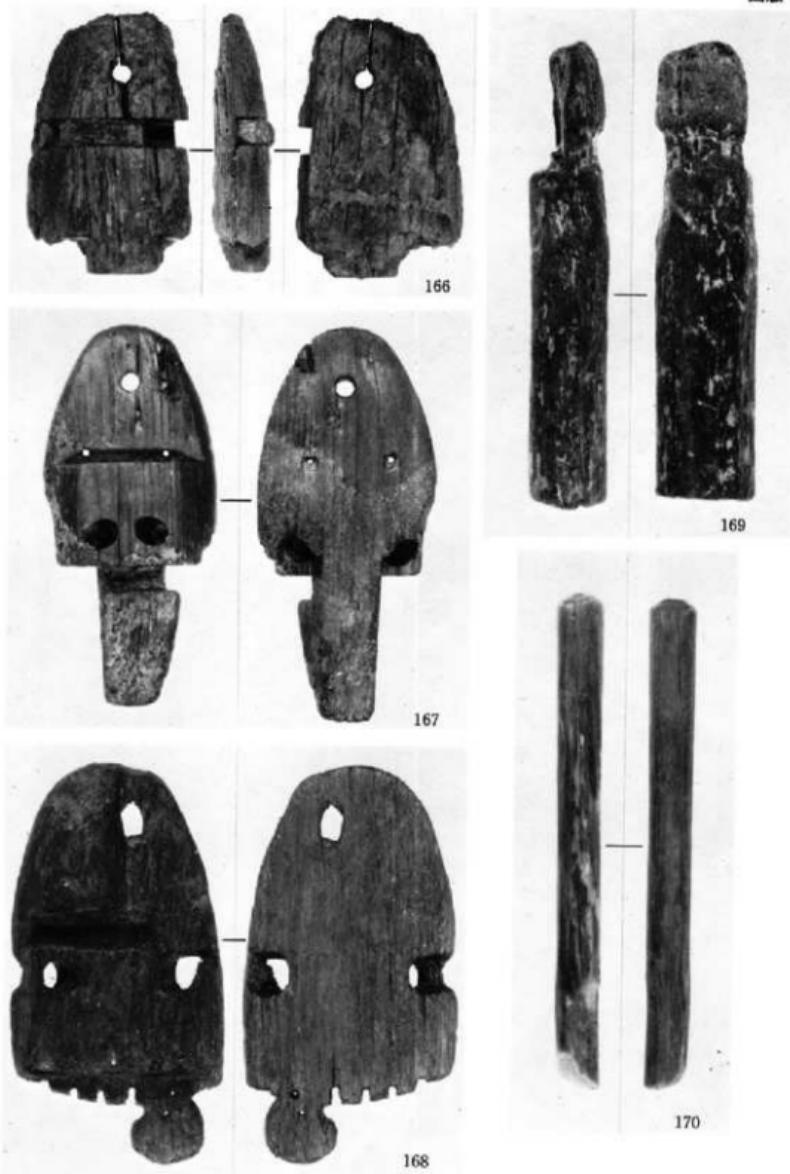
(1) SG 16出土曲木板

164



(2) SG 16出土木製容器

165



SG 16出土下駄、陽形木製品、木製加工棒



(1) 第2次調査後、板付中学校に設置された遺跡説明板



(2) 井相田C遺跡第2次発掘調査参加者

井相田C遺跡II

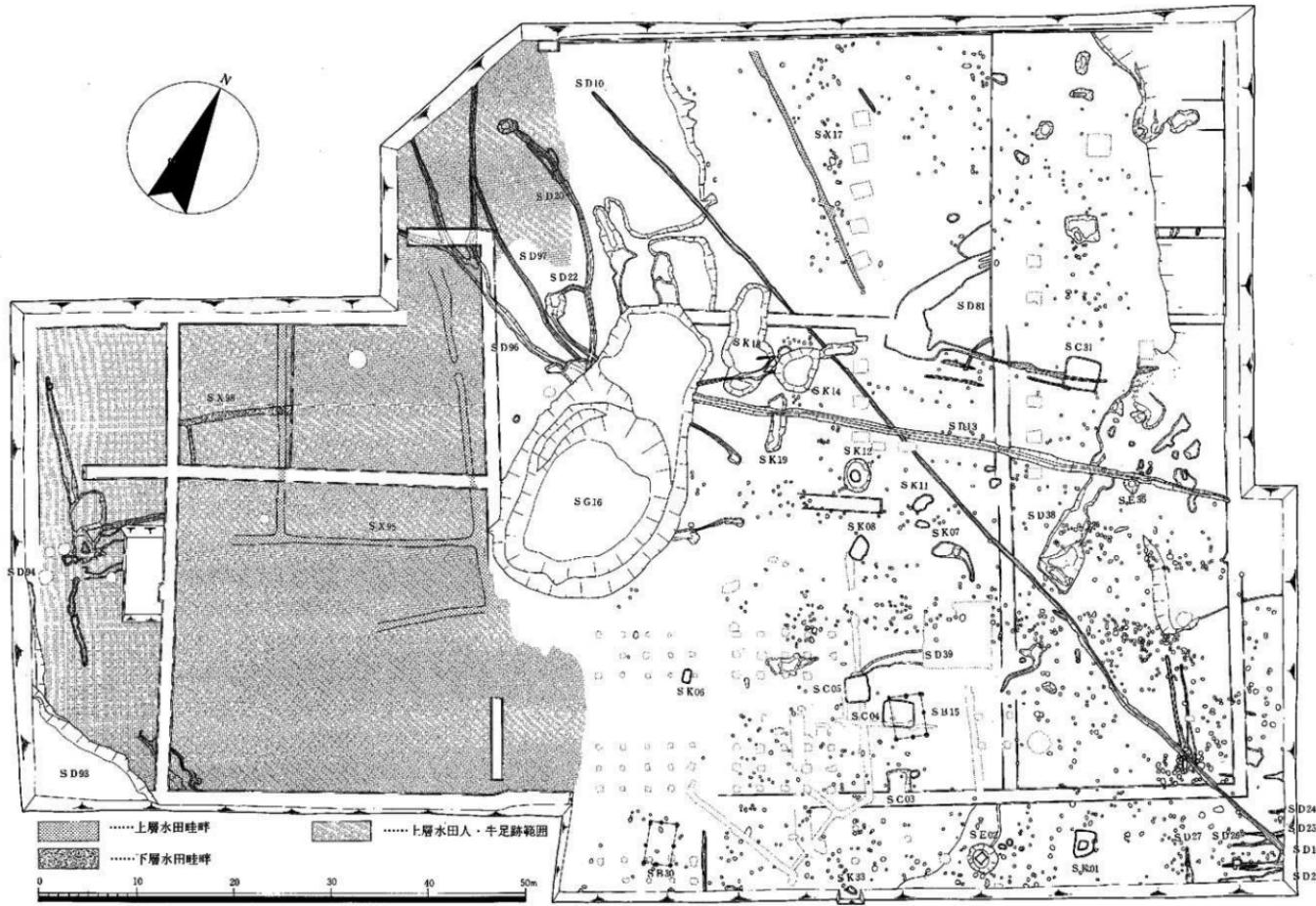
福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集

昭和63年3月31日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大名2-10-29

印刷業 玉川印刷所



遺構配置図 (縮尺1/400)

